

2013 年度 博士論文

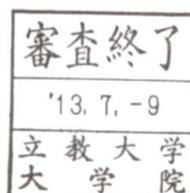
漸成発達理論からの青年期における
アイデンティティの諸相の検討

指導教授： 大野 久 教授

現代心理研究科 心理学専攻

博士課程後期課程 6 年 08WW003L

キン イ クン
斬 义 君



目 次

第 I 部 理論的検討

第 1 章 序論 1

第 1 節 青年期におけるアイデンティティの形成に関連する研究の概観 1

1. アイデンティティ理論の概説 1
 2. アイデンティティに関する理論モデル 3
 - (1) 漸成発達理論のライフ・サイクルモデル 3
 - (2) Marcia のアイデンティティ・ステータス理論モデル 5
 - (3) アイデンティティの 3 次元モデル 6
 - (4) アイデンティティの社会—認知モデル 7
 3. 青年期におけるアイデンティティの形成に影響する要因について 7
 - (1) 親子関係 8
 - (2) 友人関係 9
 - (3) 学校あるいは教育環境 11
 4. 青年期におけるアイデンティティと行動様式との関連について 13
 - (1) 青年期におけるアイデンティティと問題行動 13
 - (2) 青年期におけるアイデンティティと対人関係活動 15
 - (3) 青年期におけるアイデンティティと学業達成 17
 - (4) 青年期におけるアイデンティティと職業選択 18
- #### 第 2 節 従来の研究の問題点と漸成発達理論の導入の試み 20
1. 従来の研究においての問題点 20
 - (1) アイデンティティ・ステータスの理論上の問題点 20
 - (2) 青年期におけるアイデンティティ形成に関連する要因の範囲の広さ 21
 2. 漸成発達理論から青年期におけるアイデンティティの形成を検討する意味 23

第3節	本論文の目的, 方法と構成	24
1.	本論文の目的	24
2.	本論文の方法	26
3.	本論文の構成	27
第II部 実証的研究		
第2章	母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響	28
第1節	問題	29
第2節	方法	32
第3節	結果	34
第4節	考察	41
第3章	中国の大学生のアイデンティティ形成と寮生活の雰囲気からの影響	48
第1節	問題	49
第2節	方法	52
第3節	結果	54
第4節	考察	59
第4章	青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連	63
第1節	問題	64
第2節	方法	67
第3節	結果	68
第4節	考察	73
第5章	青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係	78
第1節	問題	79

第2節	方法	83
第3節	結果	85
第4節	考察	92
第6章	漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係	96

第1節	問題	97
第2節	方法	102
第3節	結果：分析1	103
第4節	結果：分析2	106
第5節	考察	110

第Ⅲ部 総論

第7章 総論 114

第1節 本論文の成果のまとめ 114

1. 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響 114
2. 大学生のアイデンティティ形成と寮生活の雰囲気からの影響 116
3. 青年期の愛着行動特徴と漸成発達の親密性の達成との関連 118
4. 青年期における恋愛相手の選択基準とアイデンティティ発達との関係 119
5. 漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係 122

第2節 総合的考察 125

1. 青年期のアイデンティティの形成は諸要素の複雑な影響の結果である 125
2. 青年期のアイデンティティの形成は能動的な発達の結果 126
3. 漸成発達主題の達成に有利な条件の重要性 127
4. 漸成発達の初期段階における発達主題の達成の重要性 128

5. アイデンティティの研究において、漸成発達理論を立場とする検討の有効性 129

第3節 残された課題、将来の研究課題への展望 131

文献 133

資料

1. S-ESDS(the simplified version of Oche & Plug' s Erikson and Social-Desirability scale)尺度 I
2. 中国大学生寮生活雰囲気尺度 III
3. ECR-R (Revised Experiences in Close Relationships) 尺度日本語版 IV
4. アイデンティティ達成・親密性尺度 V
5. 青年期における基本的信頼感・自律性尺度 VI

謝辞

第 I 部

理論的検討

第1章 序 論

第1節 青年期におけるアイデンティティ形成に関連する研究の概観

1. アイデンティティ理論の概説

E. H. Erikson(1950, 1963)は著書『幼年期と社会』においてはじめて「アイデンティティ」という用語を用いた。Erikson は「アイデンティティ」という概念について明確に定義していないが、アイデンティティの達成した感覚に関して解説した。すなわち「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力（心理学的意味での自我）が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」という感覚である。このような定義から以下の意味を読み出すことができる。

- アイデンティティは主観的なものである。その感覚は「不変性」と「連続性」によって支えられている。「不変性」とは「私は他の誰とも違う自分自身であり、私は一人しかいない」という信念である。また、「連続性」とは「いままでの私もずっと私、今の私もこれからの私もずっと私であり続ける」という感覚である。「連続性」の発達を障害された患者の場合は、「...彼らの人生は、もはやつじつまが合っていないようであり、もう二度と一貫した流れをもたないかのようであった。」(Erikson, 1950, 1963) という感覚を持つ。
- アイデンティティ感覚の達成は2つの面から得た経験の一致した結果である。1つの面は場所と時間を越えて自己が同一であり、不変性を持ってしかも連続しているという感覚である。もう1つは他者が自分に対するこのような連続性と不変性を認めていると自分が推測できるという感覚である。前者は個体が内的自我を認識した結果であり、後者は内的自我と外部世界あるいは社会との関係を認識した結果であると考えられる。

しかし、Erikson は、アイデンティティを構造として、指向として、また、過程であると

して時として一貫しない定義を行っている (Kroger,1996)。たとえば, Erikson (1968) は, 「アイデンティティ」の感覚とは「予期された将来を含めた現在」であるとも述べた。彼は伝記分析においてガンジーのような偉人がこのような感覚を持つのはアイデンティティ統合の結果であると強調した (Erikson,1950,1963)。

このような定義の曖昧さと意味の広さによって, 他の研究者たちはアイデンティティの定義に対して様々な観点を提出した。Jaffe(1998)の理解によるとアイデンティティは個性化と独立する過程である。Hamrick, Evans, & Schuh (2002)はアイデンティティの感覚が自己認識の獲得する感覚と見なしている。Chickering & Reiser(1993)はアイデンティティを自律から独立までの過程と考えている。Kroger (1996) はアイデンティティとは「人生の目標をしっかりと持っている感覚」であると考えている。Muuss(1996)はアイデンティティの感覚が人間関係に関するものであると述べた。さらに西平(1978)は「自己の底にあつて, いつでも何をするのでも, その点からしか人生のすべてのことがらを見ることができないほど, 個人につよい影響力をもっているもの」と解釈した。また, 大野 (2010) はアイデンティティは社会の中での自己の役割について「私が〜である自覚, 自信, 誇り (プライド・自尊心), 責任, 使命感, 生きがい」の総称であると指摘した。

アイデンティティの定義をめぐって多義な解釈が存在することは, アイデンティティという概念は様々なことを含意されており, 多様な意味と側面を持つ構成概念として非常に複雑であるという現実が反映されている。

上述したように, アイデンティティという概念について様々な定義と理論モデルが提出されたが, 本論文の場合には, Erikson の最初のアイデンティティに対する定義を理論的構成の基礎とする。すなわち, 「内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的意味での自我) が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれた自信」 (Erikson, 1950, 1963)。より日常的な言葉で表せば, ある役割における「自覚, 自信, 誇り (プライド・自尊心), 責任, 使命感, 生きがい」の総称である(大野, 2010)。

2. アイデンティティに関する理論モデル

Erikson(1968)は、その人の生物学特徴、心理的特徴、社会文化環境の特徴といった相互に影響し合う3つの要素によってアイデンティティの感覚が形成されると述べている。生物学特徴、すなわち、個人の性別、体の外見、身体能力や限界などの自覚が「身体的自我」の感覚をもたらす。また、心理的要素は、非常に個人的で独特な感覚、欲求や防衛を含んでいるが、それらが時間や状況を越えてもずっと同じであり続ける私（I）の感覚を与える。さらに、社会文化的環境は、生物学的・心理的な欲求や関心を認識する機会だけでなく、それを表現する機会を提供すると述べている。

しかし、残念なことであるが、Erikson は臨床的、隠喩的な用語でアイデンティティを表現し、操作的な説明を明確に記述しなかった。その故、様々な異なる視点や立場から、アイデンティティの本質を捉えるために、いくつかの理論モデルが生まれた。

(1) 漸成発達理論のライフ・サイクルモデル

Erikson (1963) は、人生周期をフロイトの心理—生物学的発達に対応させ心理—社会的発達の面から 8 段階のライフ・サイクル図式を提示し、生涯のそれぞれの段階で解決を要する重要な心理社会的主題を示している(Figure 1-1 を参照)。各段階はそれぞれ達成すべき発達主題をもち、各段階の危機を解決し、対立している対の特性の均衡をうまくとることで次の段階に円滑に進むことが可能になる。

第 I 段階「基本的信頼感 対 不信」では、赤ちゃんと母親との相互作用を通して、世界へアプローチして内的確実性を獲得する。この段階において子供の心の中に自分にも外部にも信頼される感覚が育つ。同時に、連続性、不変性というアイデンティティの基礎が形作られる。幼児期のごく初期の関係における信頼を通じてもたらされるきわめて重要な学習成果は、後の対人関係へのアプローチの土台となるとともに、人生全体の土台となる。

第 II 段階「自律性 対 疑惑・恥」では、自己操作を行って、自己コントロールや自己意志を発達させ、幼少期の発達課題により社会の側から認められる自信をもった人物にな

ろうという意志がめざめる。

第Ⅲ段階「主導性 対 罪悪感」においては、子どもは言語力、想像力などの新しい能力を発達させることにより、新たな目標を見出し、計画、決定、達成することができるようになる。さらに、このプロセスを通して、子どもが主導性の感覚を獲得する。

第Ⅳ段階「生産性 対 劣等感」という主題は、小学校に通う年齢の子どもにとって、アイデンティティを定義するという後の段階の課題を発見し、それを完了する際の態度の基礎を確立するものとなる。

第Ⅴ段階「アイデンティティ達成¹ 対 アイデンティティ拡散」の主題は、標準的には青年期に直面するものであるという。この段階において、青年は社会の大人として参入する要求を応じて、自分に対する自己判断と、他者から自分に対する判断を一致する感覚を求めることとなる。また、青年はこの段階において、前の段階にある主題の獲得の結果を一時的に統合して、再スタートすることである。アイデンティティ達成とは、青年は過去において内的な斉一性と連続性が、他人に対する自分の存在する意味である斉一性と連続性に一致すると思う自信を獲得することを指す。たとえば、大学生の場合には、自分が卒業後社会に役に立てるという自己認識は、周囲の人、社会環境から同じように認めることと重ねるによって獲得する自信である。アイデンティティ拡散とは、アイデンティティを明確にしようという課題に取り組めないことを指す。そこでは、勤勉性の感覚、時間体験の障害、対人関係の困難といった問題が生じるかもしれない。

Erikson(1968)によって、「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」という主題の解決は、理想としては肯定的に解決されることがよいのであるが、両極の間で一定の最適なバランスを見つけることを必要と強調した。

¹ Erikson の英語原著に第Ⅴ段階の発達主題「Identity vs Identity Diffusion」に対して、訳者によって異なる日本語の訳語を採用した。たとえば、「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」(西平・中島, 2011), 「同一性 対 役割の混乱」(仁科, 1977), 「アイデンティティ 対 アイデンティティの混乱」(岩瀬, 1973), 「同一性・拒否性 対 同一性混乱」(鍾, 1971)など。本論文においてこの段階の発達主題を専らに指して、混乱を避けるために、「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」と表す。しかし、ここの「アイデンティティ達成」の意味は後の節で紹介された Marcia 理論にあるアイデンティティ達成と異なる。

第VI段階「親密性 対 孤立」において、はじめて関与の対象は自分から他の人に向く。他人との友情および愛のような親密関係に移行できる時期である。青年後期の間に確立されたアイデンティティの感覚は、アイデンティティとある意味で対極にある親密な関係を取り結ぶのを促進する（あるいは阻害する）。

「親密性」は異性と恋愛、結婚して、自分の家庭を持つこと以外、親密な仲間関係を作ることも意味している。しかし、人の接近を拒絶したり、距離を設けたりすることや、人との親密関係のため自分自身が巻き込まれて自我の喪失の恐れ不安感を強く感じる場合、親密性の対極である「孤立」に偏ることとなる。

第VII段階「生殖性 対 停滞」においての重要な課題は、他者に与えることのできるスタイル、すなわち自分の子どもを育てたり、自分のコミュニティやより大きな社会的文脈において個人的に意味のある貢献をすることである。

第VIII段階「統合 対 絶望」とは、アイデンティティ最後の問題となる。人生最後の心理社会的な主題、すなわち人生が終わる前に、自分の唯一無二の人生に最終的な意味を見いだし、自分自身の人生のスタイルを受け入れ、自分が所属している文化と相互作用して統合の状態を到達する。

この8段階のライフ・サイクルにおいて、「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」は、青年期の中心課題であるが、それは先立つ各発達段階の課題にどう対処したかに基礎をおくと同時に、その後の成人生活において遭遇することになる各発達段階の課題に対処するための土台としても役立つ。このように、アイデンティティに関する課題は、青年期に限定されるものではない。むしろ、若者がより大きな社会秩序の中で、自分の個性を認識し、それを実現する最善の方法を学ぶという作業に際して、「基本的信頼感 対 不信」、「自律性 対 疑惑・恥」、「主導性 対 罪悪感」、「生産性 対 劣等感」というそれ以前の心理社会的段階の課題にどう対処してきたかに関連しているものである（Kroger,2000）。

(2) Marcia のアイデンティティ・ステータス理論モデル

Marcia (1966) は Erikson の記述の中から 2 つの次元を取り上げて、青年期のアイデンティティの形成を再分析してアイデンティティ・ステイタス理論を提出した。1 つの次元は役割の試行錯誤と意思決定期間における「探索」であり、もう 1 つの次元は人生の重要な課題に直面する際に「積極的関与」である。この 2 つの次元を組み合わせると 4 つのアイデンティティ・ステイタスを設定した。

- (a) アイデンティティ達成型 危機の時期をすでに経験し、ある一定の職業やイデオロギーを自分の意志で選んで、それに積極的に関与している。
- (b) モラトリアム型 危機期に意志決定をしようと探索している。
- (c) フォークロージャー型 危機を経験することなし、他人の指示どおりに特定の職業やイデオロギーに積極に関与している。
- (d) アイデンティティ拡散型 今までの自分そして未来の自分を想像することが困難である。職業やイデオロギーに積極的関与を欠いていることである。

Marcia の観点によって、アイデンティティに対する検討は理論カテゴリーだけではなく、実証的研究もできるようになった。この理論に基づいて、アイデンティティ・ステイタス尺度(Identity status interview: ISI)を作成した(Marica, 1966)。数多くの研究者たちはこの尺度を利用して、幅広い領域において研究を行って、1999 年までに 500 編以上の論文が発表された(Waterman, 1999)。

(3) アイデンティティの 3 次元モデル

さらに、Meecus, Iedema, Maassen, & Engles(2005)は Marcia の理論を再検討して、「関与」次元におけるアイデンティティを探索する行動パターンの違いによって、「深度的」探索と「広さ的」探索を基準に、3 次元モデルを提出した。すなわち、

- (a) 「深度」的探索(exploration in depth) : 青年は現在の選択したことを積極的に関与して、この選択とかわるすべての情報を収集して、友たちや家族の人と熱心に討論する状態を指している。このような探索は時間にわたっても相対的に安定な状態になっ

て、適切なしかも責任感があるアイデンティティの形成過程と考えられる。

- (b) 「広さ的」探索(exploration in breadth/ reconsideration) :青年は現在に関与した選択肢と可能性があるほかの選択肢を比較し続け、また不安定な状態と指している。このような探索は青年に一時的にうつや不安などのマイナスの心理的影響をもたらすおそれがあるが、青年たちは青年期前の段階にある自分の「一貫性」と「連続性」に対して再び認識して、自我をあらためて定義する過程をも反映している。
- (c) 「関与」(commitment) この次元は Marcia のアイデンティティ・ステータス理論にある「関与」次元と同じ、青年期に人生の重要な課題、たとえば職業、信仰などの問題に直面する際に、積極的に注意を集中することを指している。

(4)アイデンティティの社会—認知モデル

また、Berzonsky (1992) は社会—認知の視点から、青年が自分のアイデンティティを構成するあるいは再構成する傾向の違いによって3つのカテゴリーに分類した。

- (a) 拡散—回避型 (diffuse-avoidance style) このような青年は自分の未来に決定づけることを遅延し、拒否し、反抗する傾向が強く見られる。
- (b) 規範アイデンティティ型 (normative identity style) このような青年は他人の期待、社会望ましさを配慮して、決まったとおりに行動する。
- (c) 情報アイデンティティ型 (informational identity style) このような青年は自我と関連する情報を探索して、評価してから計画的にアイデンティティを統合する。

3. 青年期におけるアイデンティティの形成に影響する要因について

アイデンティティは、個々の身体と心理的状态とともに、社会との相互作用を通して形成される。このように、アイデンティティの変化の範囲は、文化それ自体に影響されるだろう。文化の中にある社会的慣習は、アイデンティティを形づくり、表現することが許される一般的な枠組みを提供する。すなわち、これらの社会的慣習は、過去との関係を保持することだけでなく、その社会の将来の方向を形づくる (Krogar,1996)。

ただし、より複雑な形で推論される自分の人生経験の意味を押し量ったりするのを援助する際に、若者たちが自己のアイデンティティの発達をよりいっそう押し進めることができるように、社会化のさまざまな担い手は重要な役割をはたすべきである (Kegan, 1994)。子ども時代と違って、家族、友人、学校、コミュニティ・サービス施設が、青年期の人々に対して、さまざまな期待を非公式な形でさし向けている。そのような期待は青年のアイデンティティの発達に強く影響している。

(1) 親子関係

青年期の親子関係は、その以前の段階における作用パターンとは異なるが、青年の成長にとってとても重要な支える源である (Collins & Steinberg, 2006)。

Delaney (1996) によって、青年前期、中期、後期の自律性への要求は、母親と父親双方との密接な関係の文脈の中で最も促進される、とする研究結果が一貫して得られている。

Barber & Olsen (1997) は 237 名の調査協力者に対して質問紙調査を行った。その結果、自律性を奨励したり行動を調整したりしながら、援助的な結びつきを提供する家族のあり方は、青年前期の精神的健康の良好さと強く結びついていた。

また、Papini, Sebby, & Clark (1989) は家族機能の特定領域における満足や不満足と、青年前期のアイデンティティの発達との関係について検討した。その結果、青年のアイデンティティの探求の度合いは、青年との葛藤を高い頻度で報告する母親がいる家庭で最も高かった。青年前期の人々のアイデンティティの探求の度合いはまた、父親と青年がお互いの行動や関係性の情緒的な質に強い不満を抱いている家庭で最も高かった。しかしながら、青年期のアイデンティティの探求の度合いは、父親-青年間の葛藤のレベルの低さと関連していた。

Grotevant & Cooper (1985, 1986) は青年と家族のコミュニケーション・スタイルの違いとアイデンティティ発達との関係について調査した。その結果、個性を重視し、促進しようという家族の中にいる青年はコミットメントする前に、よりいろいろなアイデンティティの選択肢を探索する傾向が強いことがわかった。逆に個性を認めない家族の中にいる青年はア

アイデンティティの選択肢を探索する可能性が高くないことがわかった。その結果は Bosma & Gerrits (1985) の研究結果とも一致している。Perosa, Perosa, & Tam (1996) は若者のアイデンティティ発達状況とその家族の特徴について検討した。その結果、アイデンティティ拡散型の若者は、両親に対する情緒的愛着が最も弱いと同時に独立性も低いという結果を示した。または、フォークロージャー型の青年後期の人々の家庭環境の特徴は、葛藤がほとんどないということがわかった。Schultheiss & Blustein (1994) は、アイデンティティ形成過程において、親による愛着が、男性よりも女性にとって重要な役割を果たすことを見いだししている。さらに、Weinmann & Newcombe (1990) は、父親ではなく母親に対して感じる愛情や母親から受けていると認知している愛情が、青年期のコミットしたアイデンティティ型（フォークロージャー型およびアイデンティティ達成型）と関連があることを見いだししている。

以上の研究に示されたように親子関係と青年のアイデンティティの発達状況との関連において、家族と青年の絆が幼少期の形から変化するにも関わらず、青年のアイデンティティ発達に影響を及ぼし続けることが明らかになった。しかし、親子関係および家族の構造以外の要因、特に親の人格特徴と子どものアイデンティティ発達がどのようにリンクするのかについてはあまり検討されてこなかった。Erikson (1964) は理論上、アイデンティティの発達において世代間伝達の現象があると指摘したが、実証的な研究はまだ行われていない。そのため、子どもにとって特別な意味を持つ母親自身のアイデンティティ達成状況が、どのように子どものアイデンティティの形成と関連するのかについて、ペアデータによる検討の必要があると考えられる。

(2) 友人関係

青年期の親子関係や家庭構成は、青年期の個体の将来と社会的現実性認知の態度に影響を与えるが、仲間は、新しいソーシャルスキルの学習の場と新しい経験を共有する際のサポートを提供する (Zani, 1993)。友情と仲間グループからのフィードバックは、支持だけでなく、

多様な行動の試みと自己定義の多様な可能性がテストされるような自己を映し出す鏡の役割を提供する。このため、青年期の人々にとって、友情と仲間集団は、その時のアイデンティティ発達のための重要な文脈を提供する。

Cooper (1994) は青年が両親から離れ、両親のもつ価値観を再評価するのを促進するのに仲間が果たす役割から、青年の社会的活動領域のさまざまなメンバーとの間で生じる愛着の絆の変容に関して理論的検討を行った。こうした研究は、青年期の人々は、仲間との間の愛着の絆を調整しながら新たな形の親しさを発展させていくことを示している。アイデンティティが単に基本的信頼や自律性の観点によって定義されるだけでなく、他者と親密なかかわりを保ちつつ明瞭な自己感覚を維持することができるという観点によっても定義されるべきであることも示唆した。

Akers, Johes, & Coyl (1998) は 1159 名の高校生を調査対象として友人の間のアイデンティティの類似性について検討した。その結果、相互に同一視された青年たちの親友同士では、アイデンティティ・ステータスだけでなく、多くの行動、態度、アイデンティティに関連した目標に類似性が確認された。Sussman ら(1994)の研究は若者の集団的アイデンティティと喫煙行為との関係について大規模な研究を行った。結果は、青年の喫煙行為と所属の集団のアイデンティティの間に有意な相関があることが分かった。この結果は他の研究者によって実施された研究結果とも一致している(Michell,1997; Michell & Amos, 1997; Mosbach & Leventhal, 1988)。Maxwell (2002) は 1969 名の青年に対して友人の影響効果とリスク行動の関係を縦断研究で調査した。結果に示されたように、調査参加者の喫煙、大麻乱用のようなリスク行動は同性の友人の行動によって予測される。一方、友人の影響によってこのようなリスク行動を止める機能があることも明らかにした。

また、岡田(1995)は現代青年の友人関係として、「表面的な楽しさを求める傾向」、「傷つくことを恐れる傾向」、「深い関わりを回避する傾向」が見出した。落合・佐藤(1996)は青年期の友人関係における付き合い方とその発達的变化について検討した。その結果、青年の友人

の付き合い方は2つの次元によって4つのパターンに分かれることが明らかになった。さらに加齢にしたがって、つきあい方は「浅く広く」から「深く狭く」へ変化する傾向があることもわかった。

さらに、青年中期に入ると、友情と仲間集団の機能は、アイデンティティ形成を促進する際に変化する (Coleman, 1974 ; Kroger, 1985)。青年前期の仲間集団が一般に同性の友人から構成されているのに対して、青年中期の仲間集団では、一般に、性の異なる小集団との自由な交際へと移行する。したがって、青年中期の仲間集団は、1人の(異性の)パートナーと仲よくなるための出会いの場や、実験的な活動の場を提供する (Dunphy, 1963)。また、青年中期の仲間集団は、その人の性的アイデンティティと性役割アイデンティティの認識の促進を助け、自尊感情の重要な根拠を提供する (Silbereisen & Noack, 1990)。

これまでの研究によって、青年期における友人関係はアイデンティティの発達に強い影響を及ぼしていることが明らかになった。このような機能は、アイデンティティの発達を促す可能性と損なう可能性が併存する。アイデンティティの発達において、友人関係は自己評価および自己調整をするための重要な資源としても、自我を発達するための模倣モデルとしても欠かせない存在である。

(3) 学校あるいは教育環境

青年期のアイデンティティ発達のための、家族や仲間集団を超えた文脈の役割については、系統だったやり方で検討する必要がある。青年前期のアイデンティティに対する学校の風土や構造の影響については、いくつかの研究が試みられている。

Raphael, Feinberg, & Bachor (1987) は、若い教育実習生が学校で実習する間にアイデンティティ・ステータスの変化に対する感覚と反応を調べた。その結果、モラトリアム型が最も肯定的で健康的であり、拡散型は最も否定的で精神的に不健康であることが見出された。また、モラトリアム型の実習生は実習した学校の学生に最も人気があるのに対して、拡散型の実習生は最も人気がないことがわかった。

Berzonsky & Kuk (2000) は 363 名の新入生を調査対象者としてアイデンティティの発達状況と自律性、教育主導性、対人関係の成熟性などの関連について検討した。結果に示されたように、アイデンティティの発達状況が違う青年の間に上述した各変数において、有意な差異があることを示唆した。Adams & Marshall (1996) も、青年のアイデンティティ形成に対するより大きな文脈の影響に関する理論モデルを提示している。彼らは、あらゆる社会が、青年期の人々が役割を模倣し他者に同一化していくことを可能にする制度や環境、すなわちアイデンティティ形成過程の土台となるものを提供していることに言及している。彼らは、自己と他者の関係を維持し促進するための価値観のベースラインを提供する社会的文脈は、最適なアイデンティティ形成のための条件であると論じている。

また、Roker & Banks (1993) は、ある学校の構造が、アイデンティティの発達を他よりも促進しやすい可能性を発見した。彼らは、アイデンティティ・ステータス尺度を用いて、私立と州立の学校に通っている青年期の少女の調査研究を行なった。これら両方の学校では、年齢と家族の背景が類似していたが、私立学校の少女たちは、彼女たちのアイデンティティ、特定の政治に関して結論を出すことにおいて、フォークロージャー型だった割合が非常に高かった。Dryer (1994) は、高校において、教育的環境とカリキュラムが最も青年期のアイデンティティ発達を促進すると思われる構築方法を検討した。アイデンティティの形成は、青年に提供している探索とコミットメントを刺激するような教育環境によって促進されることが示唆された。青年たちは学校、大学のような教育機関の環境に入ってから自分の人種的あるいは民族的なアイデンティティを再認識するために、統一的安定的な自我統合を感じることができる。さらに、民族的アイデンティティの達成するため、大学生の自己信頼も強くなったり、幸福感が高くなったり、孤独感が低くなったりすることがある(Phinney & Alipuria, 1996 ; Roberts et al,1999)。さらに近年、大学の寮生活という環境の大学生の人格発達や行動への影響について、研究者の注目が集まっている(Flanagan, Schulenberg, & Fuligni, 1993; Pascarella, Bohr, Nora, Zusman, Inman, & Desler, 1993; Valliant &

Scanlan, 1996)。青年は親から物理的に離れて、一人で生活における様々の問題と出会って自ら解決しなければならないと同時に、寮生活を過ごす数年間は青年にとって最も重要な心理的成長の時期である。このような環境において、青年のアイデンティティの形成は少なからず寮生活から影響を受けると言える。たとえば、Jordyn & Byrd (2003) は自宅からの通学生と、寮生活および一人暮らしの大学生を比較して、大学の寮生活とアイデンティティ形成との関連について研究を行った。その結果、寮生活をする大学生の方がよりアイデンティティ達成レベルが高く、自我コントロール能力も高く、大学寮生活とアイデンティティ形成の間に有意な関連があることを明らかにした。残念なことは、これまでの先行研究がほとんど横断的研究手法で変数間の関連性だけについて検討したが、時間の経過によって生じる変化に関して触れていなかった。もちろん、大学の4年間におけるアイデンティティの変化のプロセスについて縦断的な手法で検討すれば、青年期のアイデンティティ形成をより体系的に把握できるであろう。さらにこのような検討を通して、学生が主な生活空間とする寮生活は4年間にアイデンティティの形成にどのように影響を及ぼすかについてもより明らかになり、青年期のアイデンティティ形成についてより深く理解できる。このため、これは今後の研究課題として行う必要があると考えられる。

以上は、青年期におけるアイデンティティ形成へ影響を及ぼす主な外部要因、すなわち、親子関係、友人関係そして学校や教育環境についての先行研究をまとめた。次の節では、アイデンティティ発達状況と青年の行動様式との関連性についての先行研究を検討する。

4. 青年期におけるアイデンティティと行動様式との関連について

(1) 青年期におけるアイデンティティと問題行動

青年期に入ると、青年の生理的、心理的な変化も激しくなる。青年は自我統合を追求する際に、探求活動を通して不変性と連続性の感覚を求める。このような過程は、不安定であり、方向性も多岐に渡る。一方、社会から青年を前の段階より課題は困難になる。このような不

確定性のある青年の個性化過程と社会的望ましさに遭遇することによって、青年は自我統合の混乱状態に落ち込む可能性が高くなるかもしれない。社会的要求に対抗したり、必要な義務を回避したり、否定的アイデンティティを選択したりする結果として問題行動が浮かびあがることとなる。飲酒、ステロイド乱用、薬物濫用、性行動など問題行動の形成要因に研究者は焦点を当てている。その中で、アイデンティティの理論視点から上述した問題行動の心理的メカニズムを検討する研究はさらに注目されている(Dworkin, 2005; Mitchell, Crenshaw, Bunton, & Green, 2001)。

たとえば、Christopherson, Jones, & Sales (1988)は薬物濫用の動機に関することを検討した。彼らは中学7年生から12年生までの1691名の調査協力者に対して「青年は薬物を濫用する動機は何ですか」についての回答を分類してアイデンティティ・ステータスと関連を検討した。結果は、アイデンティティ達成型あるいはモラトリアム型に定義された協力者はより好奇心や元気の回復を動機として挙げた。それに対してアイデンティティ拡散型の協力者は、親たちに見つけられること、および警察に逮捕されることを恐れているということ、薬物を濫用しない理由として挙げた。さらにフォークロージャー型の協力者は他の型の協力者より禁欲すべきという宗教を薬物の濫用をしない理由として挙げた。

Jones & Hartmann (1988)は大規模な質問紙調査を行って、12988名の中学生を問題行動の経験に関して調べた。結果に示したように、フォークロージャー型の人の経験は一番頻度が低いことに対して、アイデンティティ拡散型の人が一番頻度が高いことがわかった。

David, Jane, Clint, Suleka, & Garrett (1997)はEIS (ego identity status)尺度とKAT(Khavari Alcohol Test)を利用して大学1年生490名の飲酒行動とアイデンティティとの関係について検討した。結果からアイデンティティ発達統合レベルが高いほど、飲酒の頻度が低くなることを明らかにした。

その他、Rose & Bond (2008)は18歳から25歳までの179名の調査協力者に対して、質問紙調査を行った。回帰分析の結果によってアイデンティティ拡散は問題行動の発生を予測

することが明らかになった。

Aadms ら(2001)は 2001 人のカナダ中学生と高校生をアイデンティティ・ステイタスと品行不良、過剰行動、感情問題との関係について研究した。共分散構造分析の結果、アイデンティティ拡散の人はそのアイデンティティ・ステイタスが品行問題、過剰行動や感情問題に対して他のスタイルの人より強い影響を与えていることが明らかになった。

上述した研究の結果はいずれもアイデンティティ拡散状態と問題行動と正の相関があること示している。アイデンティティ拡散の人は自我統合するための探索意欲も弱いし、未来への関与も少ないという心理的特徴がある。しかし、社会的要求のような外部圧力に対応しなければいけない現実に対面する際に、一種の外部圧力から逃避していく手段として自ら問題行動をしようとする傾向がある(Berzonsky, 1992a,1992b)。拡散状態は社会認知の過程や結果にも影響するので、問題行動はこのような消極的な社会認知の結果として表面化したものと考えられる(Rose & Bond, 2008)。

(2) 青年期におけるアイデンティティと対人関係活動

青年期に入ると、人々は活動領域が拡がり、活動内容も豊かになる。対人関係にかかわる一連のことは青年期の最も重要な問題の1つとなってくる。そのためにかかる時間もエネルギーも大幅に増加する(Berndt, 1982)。しかし、現代社会における友人関係が複雑化し多層化していくとともに、青年にとって友人を作ることは一つの困難な課題である(Brown, 2004)。また、友人あるいは恋人のフィードバックによって自我を確認したり、修正したりすることによってアイデンティティの統合を達成させる(Erikson, 1968)。このため、青年期においての対人関係活動とアイデンティティの形成との関連について注目されている。

Podd, Marcia, & Rubin (1970) は 56 名の男性青年と 56 名の女性青年についてアイデンティティ・ステイタスの尺度で調査し、さらに一つのジレンマ・ゲームを利用して調査参加者の対人行動特徴を捉えた。分析結果から、モラトリアム型の人はい他のスタイルの人より対人行動上で矛盾する行動傾向が示された。

Orlofsky, Marcia, & Lesser (1973)は青年期の親密状態の特徴に基づいて4つの親密の状態に分類した。すなわち、親密関係状態、親密関係前状態、紋切り関係状態、孤独状態である。彼らは質問紙調査で53名の女性大学生のアイデンティティ・ステータスと親密の状態を検討した。研究結果から、モラトリアム型あるいはアイデンティティ達成型の人により親密関係状態になるのに対して、アイデンティティ拡散型の人により親密関係前状態および紋切り関係状態に落ち込みやすいことが明らかになった。

さらに Donovan (1975) は 22 名の大学生に面接調査を実施し、アイデンティティの達成状況と対人行動の様式を調査した。研究結果から、フォークロージャー型の調査参加者は権威者（親、年上、先輩など）に対してより従順に対応し、モラトリアム型の参加者は権威者に反抗すると同時に友人たちに依存する行動傾向があることと見出された。また、拡散型の参加者は対人行動において退行したり、見捨てられた感じを持つことが示された。

Akers, Jones, & Coyl (1998)は青年の友人のアイデンティティ発達状況の異同を研究するために、1159名の高校生を質問紙調査法で調べた。分析は3つの状況に分けて二人ずつのアイデンティティの得点を比較した。すなわち、ペアの相手に一番の親友がお互いに指名された場合、一番の親友でも互いに指名されなかった場合、ランダムにペアにする場合と3つの状況である。分析結果から見ると、互いに親友に指名された場合には二人のアイデンティティの得点特徴がほかの2つの状況より一致している。その結果によってアイデンティティ発達状況が相似している若者はより友人になりやすいことが明らかになった。

Cook & Jones (2002) は 84 カップルの夫婦に対して、夫婦間のアイデンティティ状況の一致性と結婚生活の満足度の間の関係を研究した。結果に示されたように、アイデンティティ状況が一致している夫婦の方は一致していない夫婦より結婚生活満足度が高かった。さらに夫婦間のアイデンティティ一致度は女性の生活満足感の評価に最もかかわっていることがわかった。

以上の研究をまとめると、アイデンティティ達成状況と対人活動との間に関連があることが示された。青年たちは社会の他の人々と交流を持ち必要な情報を求める際に、アイデンティティ統合への探索と関与の程度や指向の違いによって対人活動においても行動様式が異なることが示された。たとえば、拡散型の人是对人関係活動における退行や、権威者への反抗などの行動特徴があるが、アイデンティティ統合への回避と拒否する傾向と一致している。しかし、今までの研究は主にアイデンティティ・ステータスと対人活動の静的関係だけを検討した。そのような関係の形成及びアイデンティティの初期段階の発達状況と青年期の対人活動の行動特徴との関連についてはまだ触れてない。今後、対人関係活動、たとえば恋愛相手と愛着行動との関係に関する研究はこの方向に向けて、さらに展開させる必要があると考えられる。

(3) 青年期におけるアイデンティティと学業達成

青年期には、人は遊ぶ時間を削っても教育と職業に最も関心を払う (Nurmi, 1989)。学業場面におけるパフォーマンスは青年にとって重要な自己定義の源である (Cross & Allen, 1970)。青年たちの学業上の成功は成人期の就職状況と緊密に関わっているため、青年期のアイデンティティの発達と学業達成との間に潜在的な関連があることが推測できる。

Cross & Allen (1970) は 81 名の大学生の学業成績とアイデンティティ・ステータスとの関連を検討した。結果から、アイデンティティの達成状態が良い調査参加者は達成状態が良くない調査参加者より学業成績が優れていることが見出された。Berzonsky (1985) は 98 名の大学新生を調査対象者として縦断研究を行った。その結果、アイデンティティ拡散状態と学業パフォーマンスとの間には有意な相関がないが、フォークロージャー型の参加者の学業成績はより低いことが分かった。Meeus (1993) は 300 名の高校生に対して調査を行った。その結果、アイデンティティ達成型に判別された調査参加者は学業パフォーマンスがよりよいことが明らかにされた。その他、Grotevant & Thorbecke (1982), Orlofsky (1978) の研究においても、アイデンティティ達成型の人と学業達成との間に有意な正の相関があることが

示唆された。

職業的アイデンティティの達成は青年期アイデンティティの達成の重要な指標である。青年期におけるアイデンティティの達成状況がよくなるほど、青年は未来の就職について積極的に探索する意欲が強く、関与の程度も高い。このことはアイデンティティの達成が学業パフォーマンスを促し、未来の就職のための更なる積極的準備に向かうことためだと考えられる。

(4) 青年期におけるアイデンティティと職業選択

青年期における職業選択は青年にとって非常に重要である。むしろそれは青年期のアイデンティティ発達を中心の課題であると主張している研究者もいる(Cramer, 2003; Grotevant & Thorbecke, 1982; Jakobsen, 2001)。職業選択は青年の職業的アイデンティティの具体的な表現であり、未来への展望と社会において自分の位置づけを試すことだと考えられる。Erikson (1959) によれば、青年期における社会的役割の獲得という形で統合され、アイデンティティの確立にいたるとされる。その社会的役割の獲得において中心的位置を占めるものが職業選択である。また、青年は就職活動を通して将来の自分をイメージしながら、「肌に合う」という職業的適合感がある仕事を積極的に探す過程において自己概念を再定義してアイデンティティを統合させる(鑪・山本・宮下, 1984)。

Waterman, Geary, & Waterman (1974) は 53 名の男性大学生に対して縦断研究法で職業的アイデンティティの発達変化を調べた。その結果、大学1年生の間に、職業的アイデンティティ・ステータスの変化を示した人が全体の 44% であり、特にモラトリアム型の方が増加した。また、大学入学初期にアイデンティティ達成型にあった人のステータスが安定して高いとは言えなかった。しかし4年生までの推移をみると、アイデンティティ達成型に移行する人が増え、このステータスの安定性も高かった。従って大学1年生時に達成された、職業に関連した面での積極的関与は、比較的安定していると考えられる。Galinsky & Fast (1966) の研究は学生相談の事例に基づいて職業選択に際して困難を示す青年の心理特徴を分析した。共通した特徴は、そのような青年は仕事を成し遂げたり、何か意味あるものを生み出す能力

の欠如が自我の積極性あるいは勤勉性に関する問題が発生している。Holland & Holland (1977) は 1005 名の高校生と 692 名の大学生を調査対象者について検討した。調査内容は、アイデンティティ発達状況、就職態度、決定づけ能力と趣味に関することである。その結果、アイデンティティ発達状況と就職態度との間に正の相関があることがわかった。また、アイデンティティ達成型ではない参加者はより自ら「仕事未定」のカテゴリーを選択した。下山 (1986) は、職業未決定尺度を作成して、アイデンティティ発達の各段階との関係に関して、重回帰分析を行った。その結果、青年期におけるアイデンティティ達成に相当する「統制性」と「主体性」という下位因子は、職業未決定の各下位因子にいずれも強い影響を及ぼしていることが明らかになった。また、森本(2008)は私立大学の大学生 374 名を対象とし、職業未決定とアイデンティティの形成の関連について検討した。その結果、職業未決定とモラトリアム型の間には強い相関があることが分かった。また、アイデンティティの形成が職業未決定に及ぼす影響についての重回帰分析をした。その結果、「対自的同一性」という独立変数は職業未決定に対する回帰係数が有意に高かった。

モラトリアム型あるいはアイデンティティ拡散型の青年は統合的、連続的自我の感覚を感じられず「混乱」、 「拡散」状態に落ち込み、多くの選択肢から選択し決定することができない。以上の研究の結果からは、このような自己意識の不明確さが職業未決定に影響を与える可能性が示唆された。

このように青年期におけるアイデンティティ発達状況が青年の主な行動様式を予測するのに有効な概念であること、またアイデンティティの変容が行動の変容に重要な役割を果たすことが多くの研究によって明らかにされてきた。多数の研究結果は Erikson の理論を支持しており、青年期のアイデンティティ発達の重要性とその複雑性と多面性を示唆している。青年期におけるアイデンティティ発達状態は一つの内的作業モデルとして日常生活の行動に影響して、しかもこのような行動を通して社会環境と相互作用してアイデンティティの発達を促進することもある。

本節では、青年期におけるアイデンティティ発達状況に影響する主な外部要因、及びアイデンティティ発達状況と青年期の行動様式についての先行研究を検討したが、さらに、従来の研究に存在する不足や問題点を検討し、今後の研究方針を明らかにする必要がある。次の節はこの目的をめぐって検討を行う。

第2節 従来の研究の問題点と漸成発達理論の導入の試み

1. 従来の研究においての問題点

(1) アイデンティティ・ステータスの理論上の問題点

上述したアイデンティティに関する実証的研究の多くは、青年期のアイデンティティの状況を測定するために、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータス理論モデルに基づいて作られた尺度を用いている。この尺度を使用することにより、青年期のアイデンティティの形成状態を数量化して、統計的分析手法を活用できるという研究上の利点があると同時に、理論上の問題点も浮上した。すなわち、Marciaのアイデンティティ・ステータス理論と本来のEriksonの理論の間には、かなりの乖離が存在していると指摘された(Côté & Levine, 1988; Matteson, 1977; Van Hoof, 1999)。具体的には：

- (a) Eriksonの最初のアイデンティティに関する理論の提出は1950年だったが、もっとも重要な著作や論文の大部分は1968年とその以後に発表された。この間に、Eriksonは、この理論について繰り返し吟味しながら、修正を行っている。しかし、Marciaはアイデンティティ・ステータスという概念を1964年に博士論文 (Marcia, 1964. Determination and construct validity of ego identity status. 未発表) として提出し、これに基づいて尺度作成が行われたのは1966年 (Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.) であり、その後ほとんど修正が加えられていない。
- (b) アイデンティティ・ステータス理論はEriksonの理論における生涯発達のある一時期の

状況にすぎないし、その前後の段階における発達主題との関連性から切り離れる傾向が考えられる。

- (c) Eriksonが社会的、歴史的および心理的な要素を統合して、心理-社会的な視点から「アイデンティティ」を理解するという理論的立場とは違って、Marciaのアイデンティティ・ステイタス理論はより行動指向や意思決定の傾向に注目した (Matteson, 1977)。
- (d) Marciaはアイデンティティ・ステイタス理論において、4つの地位を命名したが、それらの命名が漸成発達理論にある概念の定義と異なっているところが存在している。たとえば、Eriksonは「このように青年期の終わりは、明らかにアイデンティティ危機の段階である。しかし、アイデンティティの形成は、青年期に始まるのでも終わるのでもない。それは生涯にわたる発達であり、若者も社会も、その大部分は気づかない。」(アイデンティティとライフ・サイクル, p.128) と述べた。すなわち、アイデンティティがある時期に達成できて定着されるものではなく、生涯をわたって絶えず変化したり、統合したりするものであると強調した。しかし、Marciaは一つのアイデンティティ・ステイタスを「アイデンティティ達成」と呼び、静態的、固着的な状態と説明した。

以上の指摘によって、Marciaのアイデンティティ・ステイタス理論を否定するわけではないが、とくにアイデンティティ形成のプロセスや時間的変化に関する研究を行う際に、より注意深く理論的吟味をする必要があるとともに、関連する尺度の使用についてもさらに慎重な態度を持たなければならない。ところが、多くの先行研究ではこのような検討が行われなことが指摘されている(Côté & Levine, 1988; van Hoof, 1999)。

(2) 青年期におけるアイデンティティ形成に関連する要因の範囲の広さ

青年期は、生涯にわたるアイデンティティ発達にとってもっとも重要な時期である。しかし、青年期におけるアイデンティティの形成は過去を受け継ぎ、さらに未来へつながるプロセスである。Eriksonによって、「この段階において達成されるべき成全性 (wholeness) を、わたしは内的アイデンティティの感覚と呼んでいる。青年は、成全性を経験するためには、

児童期の自分と将来の自分とのあいだに、また、自分が考えている自分の姿を、他人が考え、かつ期待している自分の姿との間に、漸進的な連続性があると思わなければならない。個人のレベルでいえば、アイデンティティというものは、自分が依存している人々のようになりたいと願い、またしばしばそういう人間になるようにしむけられたあの幼年時代における、すべての成功した一体化の総合を含むものであり、またそれ以上のものなのである。アイデンティティとは一つの独特な産物なのである。」（『アイデンティティ：青年と危機』、1968、p.107）すなわち、青年期のアイデンティティの形成について考察する時に、その前後の段階の発達状況に配慮しなければ、形成の原因や将来への影響に関するとても重要な情報を見落とす可能性があると考えられる。

さらに、Erikson（1959,1980）は青年期においては、「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」という発達主題が優勢であるが、他の発達段階における発達主題の青年期における現れについても重視している。たとえば、「アイデンティティ拡散」や「病的アイデンティティ」のような青年期に特有な現象を描写する際に、「時間が経つのも難しいし、そこから離れることも難しい。」（『アイデンティティとライフ・サイクル』、p.145）というような「時間的展望の拡散」や、「急性の疲労感覚の混乱にも苦しむ」のような「勤勉さの拡散」（同上、p.147）、または「主導性」を守るためにみずから「否定的アイデンティティ」を選択することと「確実なアイデンティティの感覚が欠けていると、友情や恋愛関係さえも、互いを自己愛的鏡に映し合うことによって、アイデンティティの曖昧な輪郭を明確にしようとする必死の試みであり」（同上、p.143）など一連の人格上に関連して発生する異常な現象を挙げた。

すなわち、青年期においてこれらの発達主題に関連した不健康な現象が、アイデンティティ拡散を伴って発生するので、漸成発達理論を理論立場として各構成要素の形成状況を同時に考察することにより、青年期におけるアイデンティティ発達をさらに全体的に把握できると考えられる。

このことから、次に青年期におけるアイデンティティ発達についての研究に漸成発達理論を導入する意味について述べる。

2. 漸成発達理論から青年期におけるアイデンティティの形成を検討する意味

青年期におけるアイデンティティの形成については、研究する焦点の変化によって、2つの研究の方向性が可能である。一つは、Marciaたちの研究者に採用されたように、焦点を絞って、研究範囲は青年期すなわち第5段階の発達主題「アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散」の発達状況だけに限る方向性である。上述したように、このような研究の多くはアイデンティティ・ステータス尺度を用いて、この主題とかかわっている様々な行動や人格特性との関連について検討した。もう一つは、焦点を広げて、青年期の発達主題だけではなく、生涯の各発達主題を含めて吟味する方向性である。すなわち、漸成発達理論の立場から研究する方向性である。

すでに本章の第1節で述べたように、漸成発達理論では人格発達に8つの主題、すなわち基本的信頼感、自律性、主導性、生産性、アイデンティティ達成、親密性、生殖性と統合性を仮定し、しかもその主題が生涯発達の中で顕著に現れる発達段階があると主張した。これらの主題の関係について、Erikson (1959, 1980) は2つのことを強調した。一つは、すべての主題は体系的に関連しあっており、特定の順序性をもつ。ある段階の主題の獲得は続く段階の主題の獲得の在り方に重要な影響を及ぼす。もう一つ重要な点は、各主題はそれが顕著に現れる段階の前後の段階にもその影響は存在しており、生涯にわたって一貫した影響がある。

さらに、これらの主題の関連は表面的なものではなく、「人格の活力」というものによって、お互いに有機的に内在的に繋がっている。「人格の活力」は、生まれながらの強さと積極的な性質のような特性を備え、基本的な人格的特性であり、人格的な複数のパワーの集合体である (Erikson, 1964)。さらに、Eriksonは「これは、少なくともここで示したいと思っている強さ、統制力、勇気といったものの統合された性質を指し示している。」と述べた(『洞察と責任』, p.107)。「人格の活力」は生得的なものであり、各段階の発達主題の達成に対

応する形で現れる。たとえば、最初の段階に現れる「人格の活力」は「望み」であり、第2段階ならば「意志力」である。各段階の発達主題の達成に伴って「人格の活力」も活発になり、その段階の発達主題の獲得を促進する。また、青年期のアイデンティティの形成とともに「忠誠心」という「人格の活力」が活性化するが、青年期以前の段階に現れた「人格の活力」も大いに関連している。「望み」は青年に未来へのことや人間を信頼させ、「意志力」は青年に将来の職業や信仰などを自由に選択できるという感覚を持たせ、「目的性」は青年に未来への志向性を持たせ、「有能感」は青年に最終な選択の探索と決定に重要な根拠を提供する(Erikson, 1964)。(Figure 1-1 を参照)

こうした概念を含んだ漸成発達理論の立場から、青年のアイデンティティの形成についての研究を行うならば、より豊かな情報を得られるとともに、各主題がどのように関連して互いに影響し、どのような形で青年の行動や活動に実際に現れるかについても総合的に考察できる。このような検討が青年期におけるアイデンティティ形成に関する研究にとって理論的にも応用的にも非常に有益であることが推測できる。

第3節 本論文の目的、方法と構成

1. 本論文の目的

本論文の目的は、漸成発達理論を理論的基礎として、青年期におけるアイデンティティの形成の諸相について検討することである。

Eriksonは、漸成発達理論において重要な外部の社会環境要因と、対応する主題の形成及び青年期のアイデンティティの形成との関連について繰り返し強調したが、本論文はまず代表的な外部要因、すなわち母親、学校環境を選んで実証的手法でこれらの関連性を明らかにする。これを一つの研究目的とする。

また、前節で論じたように、青年期のアイデンティティの形成は外部から影響を受けるだけでなく、青年の様々な行動様式や活動にも影響を与えている。本研究はそれぞれの発

第Ⅷ段階								統合 vs 絶望
第Ⅶ段階							生殖性 vs 停滞	
第Ⅵ段階						親密性 vs 孤立		
第Ⅴ段階					アイデンティティ達成 vs アイデンティティ拡散			
第Ⅳ段階				生産性 vs 劣等感				
第Ⅲ段階			主導性 vs 罪悪感					
第Ⅱ段階		自律性 vs 疑惑・恥						
第Ⅰ段階	基本的信頼感 vs 不信							
活力	望み	意志力	目的性	有能感	忠誠心	愛情	はぐくみ	知慧

Figure 1-1 漸成発達理論ライフ・サイクル図式と各段階の活力(Erikson, E.H. (1950, 1964)から作表)

達主題の形成状況と青年期の代表的な行動や活動を研究対象として、複数の実証的研究を行い、青年期におけるアイデンティティの形成状況により、青年の行動や活動に影響を与えることについて検討する。

以上のことから、本研究の主な目的は以下のとおりである：

第1、漸成発達理論の立場から、青年期のアイデンティティの形成に影響する母子関係や、大学寮生活のような社会環境の要因について論証する。

第2、漸成発達理論の立場から、青年期のアイデンティティ形成が恋愛対象の選択や恋愛における愛着の傾向などの青年の行動や活動にも影響を及ぼすことについて論証する。

第3、第1と第2にあげた青年期のアイデンティティ形成に対する外部からの影響と、青年の行動や活動がどのように影響し合っているかについて検討する。

さらに、これらの研究を通して、漸成発達理論の立場からの考察は青年期におけるアイデンティティ形成の研究に新たな視点を追加することができるであろう。したがって、このような研究は、従来の研究から得た類型論的結果と比べて、より内的因果論的な心理力動的な知見を加えることができることが期待される。

2. 本論文の方法

本論文はすべての研究において、量的な分析手法を用いる。しかも、青年期におけるアイデンティティ形成の時間的変化にも配慮して、横断的研究と縦断的研究の両方を採用する。また、研究対象は青年だけではなく、青年の親たちにも調査を実施して、データを収集した。さらに、より明確に論証するために、多次元尺度分析法、共分散構造分析などの統計手法も導入した。

その他、本論文は研究目的から考えるとより多くの主題が包括されている尺度がより適切であるので、Erikson and Social Desirability Scale (Ochse & Plug, 1986)を採用した。Ochse & Plug (1986)はEriksonの概念を十分に検討し、各主題の概念を日常レベルで具体的かつ明確にとらえた質問項目作成を行った。その上で幅広い年齢やさまざまな人種の人々を対象と

して大規模な調査を行い、汎用性の高い尺度であるErikson and Social Desirability Scale を作成した。この尺度は高い信頼性と弁別的妥当性を持つことが示されている。そこで三好・大野久・内島・茂垣・大野千里(2003)はこの尺度を日本語に翻訳した上で、偏りのある項目や適切ではない項目を修正して日本語短縮版(the simplified version of Oche & Plug's Erikson and Social-Desirability scale, 以下S-ESDS)を作成し、日本での調査の結果、高い信頼性と弁別的妥当性のあることを示した。本論文においての研究はすべてS-ESDS(第3章ではESDSの中国語版CS-ESDS)を用い、各主題の形成状況を測定している。

3. 本研究の構成

本研究は、3部によって構成されている。

第I部は理論的検討である。主にアイデンティティの概念や理論モデルについて論じる。さらに、従来の研究及び問題点に関して検討する。最後の部分において本論文の目的、方法と構成について紹介する。

第II部は、主に実証的検討である。第II部はさらに2つに分けて検討を行った。

前半の部分では、青年期におけるアイデンティティ形成への影響要因について3つの章に分けて研究を行った。すなわち、第2章では母親と青年のアイデンティティにおける世代間伝達性について、第3章では縦断的調査手法で大学の寮生活の雰囲気のある青年のアイデンティティ形成への影響について、さらに第4章では青年期の愛着行動の青年の親密性への影響について検討した。

後半の部分では、漸成発達理論の立場から、青年期における代表的な行動として、恋愛行動をめぐって、アイデンティティ形成との関連について研究を行った。すなわち、第5章ではアイデンティティ形成状況と恋愛相手の選択基準との関連について、第6章では漸成発達初期段階の形成と青年期の愛着行動との関連について検討した。

第III部は総論である。この部分において主に上述した研究の結果をまとめ、研究において不十分なところを検討し、将来の研究を展望した。

第Ⅱ部

実証的研究

第2章 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響

漸成発達理論において、アイデンティティの形成は心理—社会的相互作用の産物であると述べられている。すでに、第1章に論じたように、個体は発達の各段階における社会からの要求に対応しながら、生涯にわたって社会から様々な影響を受け続けている。

これらの影響から、特に人生の初期の段階において、母親からの影響は子どもにとって最も重要であり、最も根本である。この影響の結果としては生後の段階に人間の人格発達の基盤が決まることだけではなく、青年期のアイデンティティ達成までにも影響すると考えられる。本章では、漸成発達理論の立場から、母子間の漸成発達の主題の獲得の関連性についての分析を通して、このような影響を読み取り、さらにこの関連性から青年期のアイデンティティの達成への影響について検討し、母親から子どもの人格発達への影響のメカニズムを明らかにしようとする。

本章の内容は、『発達心理学研究』（第24巻第3号掲載、内定）に掲載された論文に基づいて加筆したものである。

第1節 問 題

Erikson (1959, 1980)は、人間の人格発達について生涯発達の観点から、漸成発達理論を提唱した。さらに、生涯発達心理学における課題は、個人の発達過程の研究だけでは十分でなく、異なったライフサイクルの時期にある世代間の相互作用についての検討が必要であるという主張がある(平石, 2000; Lerner & Busch-Rossnagle, 1981; Newman & Newman, 2005)。漸成発達理論の研究において、このような検討によって、青年期の心理発達がより深く理解されるだけでなく、人間の生涯発達に関する探究にも有益であろう。ところが、このような研究方法を利用して、Erikson の漸成発達理論における世代間の相互作用について実証的に検討した研究はほとんどない。しかし、一方で世代間伝達を直接的にリアルタイムで実証することは、方法論的に困難である。そこで本研究では、青年と母親の漸成発達理論に示された主題（以下、主題）の獲得状況を測定し、その特徴と母子間の関連性から世代間伝達の可能性と、それが青年のアイデンティティ形成に及ぼす影響について検討を行うことを目的とする。

Erikson の漸成発達理論は、人格発達の上で8つの主題、すなわち基本的信頼感、自律性、主導性、生産性、アイデンティティ達成、親密性、生殖性と統合性があると仮定し、しかも主題が生涯発達過程の中で顕著に現れる発達段階があると主張した。たとえば、「基本的信頼感」の顕著に現れる段階は誕生から1年半という時期であり、「自律性」の顕著に現れる段階は1歳から3歳までである。これらの主題の関係について、Erikson (1959, 1980)は2つのことを強調した。一つは、すべての主題は体系的に関連しあっており、特定の順序性をもつ。ある段階の主題の獲得は続く段階の主題の獲得の在り方に重要な影響を及ぼす。たとえば、第V段階のアイデンティティが発達している人ほど次の第VI段階の親密性も一般に発達している(Kacerguis & Adams, 1980; Macia, 1976; Tesch & Whitbourne, 1982)。もう一つ重要な点は、各主題はそれが顕著に現れる段階の前後の段階にもその影響は存在しており、生涯にわたって一貫した影響がある。この2つことから、当然のことながら個人内における各主題

の得点の間には高い相関があることが考えられる（仮説 1）。なお、このことについて、三好ほか(2003)の研究には大学生を調査対象とした分析により、各主題間に相関があることは示されていた。ところが、他の年齢層においてこのような相関の有無についてまだ未検討だった。本研究では、この現象の普遍性と一般性を検証するために、調査対象の年齢層を拡大して中年期に対しても調査を行い、主題間の相関について吟味する。

ところで、母親の価値観、規範あるいは行動パターン、人格特徴は子ども世代に伝達することを示唆する先行研究がある。例えば、山内(2010)は怒り、悲しみ、不安、恥のような心理特徴において子どもと母親双方を分析し、両者の関連性を明らかにしている。また、愛着行動パターンに関する研究でも母子間の相関の高さから世代間伝達があると述べられている（金政，2007;数井・遠藤・田中・坂上・菅沼，2000）。Sperling(1994)は同様の研究方法を用いて自己愛人格障害の世代間伝達に関して調査した。その結果、母親が依存的で無力な自身の一部を子どもに投影し、子どもと自分を同一視することが原因で、子どもは青年期に入ると同じ自己愛人格障害の傾向が見られることを明らかにした。こうした漸成発達の関連領域の研究では、母親の心理的特徴と子どもの心理的特徴との間に高い関連性があることが明らかにされている。

同様に、Erikson (1959, 1980) は漸成発達理論においても母子間の世代間伝達と読み取れる記述がある。子どもの「基本的信頼感」に関して、「母親たちはその関係の質の中で、赤ちゃんの個別の欲求を敏感に配慮することと自分たちの属する共同体のライフスタイルとして信頼されている枠組みの中で自分が信頼に足る人間であるという確かな感覚を結合させる営みを通して、子どもの中に信頼感をつくりあげていく。」(p.60-p.61)と指摘している。すなわち、子どもの「基本的信頼感」の獲得は、母親自身の「基本的信頼感」の獲得状況に左右される。さらに次の段階における「自律性」の獲得についても、Erikson (1959, 1980)は「両親が小さい子どもたちに与えることのできる自律の感覚の種類と程度は、両親自身が自らの生活の中で持っている個人的な自律の感覚とその尊敬に左右されている」（『アイデンティティ

とライフ・サイクル』, p.73)と述べた。つまり、子どもの「自律性」の獲得にも親の自律性の獲得状況の影響が最も大きいと考えられるだろう。このように漸成発達において母子の間に世代間伝達があることが予想され、このことは母子間の主題の獲得状況の相関の高さとして示されるだろう。そこで本研究では対応する漸成発達理論の各主題の間にある母子間の主題の獲得状況の相関の高さについて実証的に検討する。具体的には、母子間で対応する主題との間には有意な正の相関があるだろう(仮説2)。

また、Erikson (1959, 1980) が指摘したように、「アイデンティティ達成」という主題は全生涯の中で最も重要な主題である。青年にとって、家庭における親からの影響は青年期に至っても重要な外部要因として存在している(Kroger, 2000)。親の影響に関する検討を行った先行研究は少ないが、母親の主題の獲得は子どもの「アイデンティティ達成」と関連することが示唆されている。たとえば、Rice (1992) は親の主題の獲得は青年の「アイデンティティ達成」と関連があると理論的に考察している。また、親側の青年に対する信頼感は青年の「アイデンティティ達成」と関連するという知見もある(渡邊・平石・信太, 2007; 岡堂, 2008)。これらのことから、母親のすべてもしくは一部の主題の獲得は青年の「アイデンティティ達成」と直接的であれ、間接的であれ有意な正の相関があると考えられる(仮説3)。

このように、これらの分析によって親子間の関連性は予測できるが、従来の研究は親の各主題の獲得が青年の「アイデンティティ達成」へどのように影響するのかについて具体的なプロセスを明らかにしてこなかった。

この問題を解決するために、母親の各主題の獲得、子どもの青年期以前の主題の獲得及び青年期の「アイデンティティ達成」という変数の間にある関連性について検討することが重要である。母親の各主題の獲得と青年の「アイデンティティ達成」との関連性については2つの可能性が考えられる。一つは、母親の各主題の獲得が子どもの青年期以前の対応する主題の形成に強い影響を及ぼすと同時に、青年期の「アイデンティティ達成」にも直接強い影響を与える可能性である。この場合、母親の各主題の獲得から子どもの青年期以前の対応す

る主題、及び青年期の「アイデンティティ達成」へのパス係数がすべて有意になる。

もう一つは、母親の各主題の獲得が直接、青年の「アイデンティティ達成」に影響するのではなく、母親の各主題の獲得が青年の青年期以前のそれに対応する主題に強い影響を与えて、青年自身のそれらの主題が「アイデンティティ達成」に影響を与える可能性である。この場合、母親の各主題の獲得から青年の青年期以前のそれに対応する主題へのパス係数が有意になるとともに、青年のこれらの主題から「アイデンティティ達成」へのパス係数も有意になる。一方、母親の各主題の獲得から青年の「アイデンティティ達成」へのパス係数は有意ではない。母親の主題の獲得が青年の「アイデンティティ達成」に影響するプロセスにおいて、青年の青年期以前の主題の獲得は媒介変数としている機能している。前者の場合、青年のアイデンティティ形成に対して、母親の人格発達の主題の獲得の程度が青年期まで影響し続けることになる。これに対して、後者の場合では、青年のアイデンティティ形成は、母親からの直接の影響ではなく、青年自身が獲得したより初期の人格発達の主題がより強く影響していることになる。この点について Erikson (1959, 1980) は、青年は青年期以前の段階に獲得した主題を再構成し、親たちへの同一化を超えて独自のアイデンティティを形成すると指摘している。

このことから、後者により理論的な根拠があるために、本研究はこれを仮説（仮説 4）として検討を行う。

第 2 節 方 法

調査用尺度

漸成発達の各主題の獲得状況を測定する尺度として、研究者たちは Erikson の記述に基づいて数多くの尺度を作成した (Darling-Fisher & Leidy, 1988; Domino & Affonso, 1990; Rasmussen, 1964; 谷, 2001 など)。本研究は青年と母親を調査対象とするために、幅広い年齢層にも有効な尺度が必要である。また、研究目的から考えるとより多くの主題が包括さ

れている尺度が本研究にとってより適切である。Ochse & Plug (1986) は Erikson の概念を十分に検討し、各主題の概念を日常レベルで具体的かつ明確にとらえた質問項目作成を行った。その上で幅広い年齢やさまざまな人種の人々を対象として大規模な調査を行い、汎用性の高い尺度である Erikson and Social Desirability Scale を作成した。この尺度は高い信頼性と妥当性を持つことが示されている。そこで三好ほか(2003)はこの尺度を日本語に翻訳した上で、偏りのある項目や適切ではない項目を修正して日本語短縮版 S-ESDS を作成し、日本での調査の結果、高い信頼性と妥当性のあることを示した。本研究は S-ESDS を用い、青年とその母親両方の漸成発達の各主題の獲得状況を測定し、漸成発達の特徴と母子間の関連性について検討する。

S-ESDS は第 I 主題から第 VII 主題までの獲得状況を測定するために、それぞれの主題につき 7 項目、社会望しさを測定する 7 項目と合わせて計 56 項目から構成されている。回答者は、各項目について、“全く当てはまらない=1”、“あまり当てはまらない=2”、“やや当てはまる=3”、“非常に当てはまる=4” の 4 件法で評定を行った。

調査対象者・手続き

首都圏の私立 2 大学で心理学関係の講義を受講している学生を対象に講義時間内に調査依頼を行った。調査依頼の際に、回答者に対して、本調査が学生本人とその母親の両者を対象にした調査であること、各回答者の匿名性は保たれることなどを説明した。その後、回答者が本調査の主旨を理解して協力する意思がある場合のみ、質問紙などが入った B4 封筒を配布し、回答への協力を求めた。B4 封筒には、学生用（青年用）の質問紙、母親用の質問紙、母親への質問紙の依頼状（本調査の主旨の説明と協力へのお願いが書かれたもの）、および質問紙を回収する際に使用する密封用の長形 3 号封筒シール付 2 通を同封した。なお、学生用と母親用の質問紙の回収封筒については、混乱を避けるため、前者を水色、後者をピンクと色分けを行った。さらに、回収整理のために、学生用と母親用の封筒に同一の整理番号を印字し、また学生用と母親用の質問紙の裏面の上部にその番号を印字した。

学生用の質問紙は、講義時間内に回答してもらい封筒に封をした状態で回収した。その後、学生には母親用の質問紙一式を持ち帰ってもらい、母親に渡してもらうように依頼した。なお母親への依頼状には、母親の質問紙の実施と回収時の注意として、質問紙の回答時には学生と相談し合ったり、回答結果を見せたりしないこと、ならびに、質問紙の回答後には、自分の手で密封用の封筒に質問紙を入れシールで厳封すること、という教示を太字で明記した。母親用の質問紙の回収は、配布より約 2 週間以内とし、学生を通しての手渡しまたは郵送での返却を依頼した。

その結果、324 セットの質問紙を配布したうちの 107 セットを回収した。回収時に封筒が密封されていなかった 3 セットを除外し、104 組の学生と母親のデータを分析の対象とした。学生の分析対象者は、男性 21 名、女性 83 名であり、平均年齢は、19.51 歳 ($SD=2.17$) で、母親の平均年齢は、49.54 歳 ($SD=4.64$)、子どもの人数の平均は 2.06 ($SD=.67$) であった。

本調査は、2009 年 5 月~6 月にかけて大学において授業時間を利用して実施した。

統計パッケージ

以下、すべての分析に、SPSS18.0 for Windows を用いた。

第 3 節 結 果

S-ESDS の検討

青年と母親用の S-ESDS についての信頼性を検討するため、Ochse & Plug (1986) と三好ほか(2003)の先行研究を参照して、各下位尺度をそれぞれ因子の数を 1 と指定して主成分分析を行った(Table 2-1)。母子両方の α 係数は.81~.70 という高い値を示し、S-ESDS は適当な信頼性を持つことが示唆された。

Table 2-1 S-ESDS 尺度の主成分分析の結果(その1)

項目内容	子ども		母親	
	主成分 荷量	共通 性	主成分 荷量	共通 性
基本的信頼感	$\alpha=.74$		$\alpha=.77$	
私は生きている間には、自分がしたいことを成し遂げられると思う。	.46	.21	.69	.48
私は人から信用されていないように思う。R	.69	.48	.48	.23
私は、元気がないと思う。R	.70	.48	.66	.44
人類って素晴らしいと思う。	.53	.28	.72	.52
私の人生には何か足りないと思う。R	.57	.32	.62	.38
人は信用できるものだ。	.69	.48	.71	.50
私の未来は明るいと思う。	.74	.55	.63	.40
	累積寄与率		40.00%	
			42.14%	
自律性	$\alpha=.81$		$\alpha=.78$	
私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする。R	.77	.53	.71	.50
自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする。R	.70	.49	.76	.58
友だちから非難されるのではないかと心配になる。R	.73	.53	.81	.66
穴があつたら入りたいとか、人前から消えてなくなりたいと思うことがある。R	.74	.55	.72	.52
誰かが、私の欠点に気づいてしまうような気がする。R	.49	.24	.70	.49
私は意志が強い。	.38	.14	.54	.29
人の意見に賛成できないとき、それを相手に伝える。	.41	.17	.38	.14
	累積寄与率		37.86%	
			45.43%	
主導性	$\alpha=.73$		$\alpha=.72$	
自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい。	.51	.26	.61	.37
私は人と競争(することで自分の能力を発揮)することを楽しむ。	.76	.58	.66	.44
私は自分が計画したことを実行して、それを成功させる自信がある。	.78	.61	.49	.24
私は好奇心や探究心が旺盛だ。	.63	.40	.74	.55
人と競争するとき、私は勝つことに一生懸命になる。	.51	.26	.53	.28
(日頃)私はわくわくするようなプランを立てている。	.54	.29	.74	.55
私は何かをする際に、新しい方法を試してみることにためらいを感じる。	.62	.38	.53	.28
	累積寄与率		39.70%	
			38.71%	
生産性	$\alpha=.71$		$\alpha=.73$	
私は自分の能力を最大限に生かしている。	.48	.23	.59	.35
私のしたことを(人が見たら)人ならもっとうまくできたのではないかと、決まり悪い思いをする。R	.64	.41	.60	.36
何かをやろうと思うと、私にはそれを始めるほどのエネルギーがない。R	.60	.36	.55	.30
私には能力がないので、人生で本当にしたいことができないような気がする。R	.78	.61	.74	.55
人生に望むものが定まらない。R	.67	.45	.74	.55
自分には能力があると思う。	.80	.64	.62	.38
私は、何かやり遂げられるような気がする。	.70	.49	.47	.22
	累積寄与率		45.58%	
			38.71%	

Table 2-1 S-ESDS 尺度の主成分分析の結果 (その2)

項目内容	青年		母親	
	主成分 荷量	共通 性	主成分 荷量	共通 性
Identity 達成	<i>a</i> =.78		<i>a</i> =.80	
私って本当はどんな人間なのかわからない。R	.67	.45	.79	.62
私は、自分に合った生き方をしていると思う。	.53	.28	.75	.56
私は、私であることに誇りを感じている。	.46	.21	.41	.17
私は、のけ者にされているように感じる。R	.41	.17	.80	.64
人生に望むものが定まらない。R	.66	.44	.77	.59
私のことを人がどう思っているか、よくわからない。R	.73	.53	.65	.42
私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。R	.55	.30	.80	.64
累積寄与率	34.00%		51.86%	
親密性	<i>a</i> =.77		<i>a</i> =.76	
本当の私のことを理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。R	.81	.66	.86	.74
私は人とプライベートなことを話すことがある。	.53	.28	.41	.17
私はこの世の中で、ひとりぼっちのように感じる。R	.65	.42	.81	.66
私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。	.52	.27	.43	.18
誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。R	.68	.46	.86	.74
人に自分のことをさらけ出すと、不安になることがある。R	.60	.36	.63	.40
素で(飾らないで)付き合える相手がいる。	.62	.38	.54	.29
累積寄与率	40.43%		45.43%	
生殖性	<i>a</i> =.70		<i>a</i> =.75	
結局のところ子育ては、楽しみよりもむしろ重荷だと思う。R	.54	.29	.87	.75
私は自分が死んだ後まで残るような事は、これまで何もしてこなかったと思う。R	.67	.45	.56	.31
私は、人が成長しようとしていることに役立つようにしている。	.55	.30	.49	.24
小さい子どもの世話は楽しい。	.48	.23	.36	.13
私は、人生を無益に過ごしていると感じる。R	.63	.40	.86	.74
私は、人により影響を与えている。	.74	.55	.45	.20
私は、将来まで残るような価値あることをしている。	.57	.32	.55	.30
累積寄与率	36.29%		38.29%	
社会的望ましさ	<i>a</i> =.79		<i>a</i> =.80	
私は、誰に対しても同じように丁寧に接している。	.69	.47	.72	.52
私は、誰か人を嫌いになることがある。R	.77	.59	.78	.61
私は人の陰口をいう。R	.68	.46	.73	.54
「あの人は自分より下だ(劣る)」と思うことがある。R	.43	.18	.52	.27
私は、誰に対しても親切的な配慮する。	.70	.49	.66	.44
私が失敗したことに誰かが成功すると、嫉妬を感じる。R	.70	.49	.71	.50
私は何かから逃れたくて、うそをつく。R	.53	.28	.42	.18
累積寄与率	42.29%		43.43%	

注. R は逆転項目を示す。

青年群と母親群の S-ESDS の記述統計量及び *t* 検定の結果

青年と母親用の S-ESDS の各下位尺度それぞれの記述統計量を算出し、各下位尺度においての母子間の *t* 検定を行った (Table 2- 2)。

Table 2-2 青年と母親用 S-ESDS の各下位尺度の記述統計量及び *t* 検定の結果

	青年		母親		<i>t</i> 値
	Mean	SD	Mean	SD	
基本的信頼感	18.05	2.92	18.87	2.67	-2.05**
自律性	16.20	3.71	18.11	3.49	-3.71**
主導性	18.75	3.63	16.97	2.89	3.79**
生産性	17.92	3.61	17.49	3.08	.89 <i>n.s.</i>
Identity 達成	17.46	3.15	18.65	3.47	-2.50*
親密性	20.70	3.45	20.42	3.48	.58 <i>n.s.</i>
生殖性	17.48	3.54	18.61	2.74	-2.74**

注. * $p < .05$, ** $p < .01$

その結果、「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」、「生殖性」において青年群の平均値が母親群よりも有意に低い ($t(102) = -2.05, p < .01$; $t(102) = -3.71, p < .01$; $t(102) = -2.50, p < .05$; $t(102) = -2.74, p < .01$) のに対し、「主導性」においてのみ、青年群の平均値が母親群よりも有意に高い ($t(102) = 3.79, p < .01$) ことがわかった。また、「社会的望ましさ」は、青年群の平均値が母親群よりも有意に低い ($t(102) = -3.25, p < .01$) ことが示された。なお、Ochse & Plug (1986) の研究では、「社会的望ましさ」を偏相関で統制する処理が行われているが、「社会的望ましさ」は今回の研究の直接的関心の外にあること、また、「社会的望ましさ」を統制した数値を検討した結果、本質的な構造には変化がなかったため、これ以降の分析では「社会的望ましさ」によって統制された数値は用いていない。

S-ESDS の各下位尺度の得点において、青年群の性差について検討するために *t* 検定を行ったが、男女間に有意な差異は見られなかった。このため、以下の分析は男女合わせて行った。

青年群及び母親群の S-ESDS の各下位尺度間の相関

青年群と母親群それぞれにおいて、S-ESDS の各下位尺度得点間の相関を算出した (Table 2-3)。その結果、青年群では「主導性」と「親密性」の相関が比較的低い ($r=.18, p<.10$) 以外、他の相関はみな有意であることに対して、母親群は「自律性」と「主導性」の相関が比較的低い ($r=.19, p<.10$) 以外、他の相関がすべて有意であることが認められた。この結果によって、青年群と母親群のいずれも個人内に各主題の間に高い相関が見られ、仮説 1 が支持された。

Table 2-3 S-ESDS における母子両方の内部相関の分析結果

	1	2	3	4	5	6	7
1. 基本的信頼感		.51**	.31**	.54**	.54**	.49**	.63**
2. 自律性	.36**		.19 [†]	.68**	.72**	.63**	.51**
3. 主導性	.26*	.44**		.50**	.30**	.21**	.30**
4. 生産性	.46**	.68**	.70**		.67**	.57**	.61**
5. Identity 達成	.61**	.49**	.33**	.54**		.74**	.67**
6. 親密性	.48**	.38**	.18 [†]	.36**	.49**		.60**
7. 生殖性	.59**	.21*	.28**	.45**	.53**	.35**	

注. 上部は母親の相関結果、下部は青年の相関結果。

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$.

青年群と母親群の間の相関分析結果

漸成発達理論の各主題において青年と母親の間の関連性を検討するために、青年群と母親群の S-ESDS の各下位尺度得点の相関係数を算出した (Table 2-4)。青年群の「基本的信頼感」の得点は母親群の「基本的信頼感」の得点との間に有意な正の相関関係 ($r=.25, p<.05$) があり、さらに母親群の「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」及び「生殖性」の得点との間にも有意な正の相関があった ($r=.32, p<.01$; $r=.22, p<.05$; $r=.26, p<.05$; $r=.24, p<.05$)。また青年群の「自律性」の得点は母親群の「自律性」の得点との間に有意な正の相関が示された ($r=.21, p<.05$)。さらに青年群の「アイデンティティ達成」の得点と母親群の「基本的信頼感」及び「自律性」との間にも有意な正の相関があることが示された ($r=.25, p<.05$; $r=.23$,

$p<.05$).

Table 2-4 S-ESDS 各下位尺度における母子間の相関分析結果

	青 年	1	2	3	4	5	6	7
母 親								
1.基本的信頼感		.25*	.17	.02	.04	.25*	.15	.14
2.自律性		.32**	.21*	.03	.13	.23*	.13	.09
3.主導性		.01	.19	.05	.05	.14	.07	.06
4.生産性		.20	.09	.15	.03	.14	.12	.06
5.Identity 達成		.22*	.03	.06	.04	.07	.05	.06
6.親密性		.26*	.03	.06	.04	.15	.11	.01
7.生殖性		.24*	.08	.01	.03	.01	.08	.05

注. * $p<.05$, ** $p<.01$

以下では、本研究の目的に合わせ、対応する主題に相関が示された「基本的信頼感」と「自律性」の母子間の関連の高さと、青年の「アイデンティティ達成」と相関のあった母親の「基本的信頼感」と「自律性」との関係について集中して分析を行う。

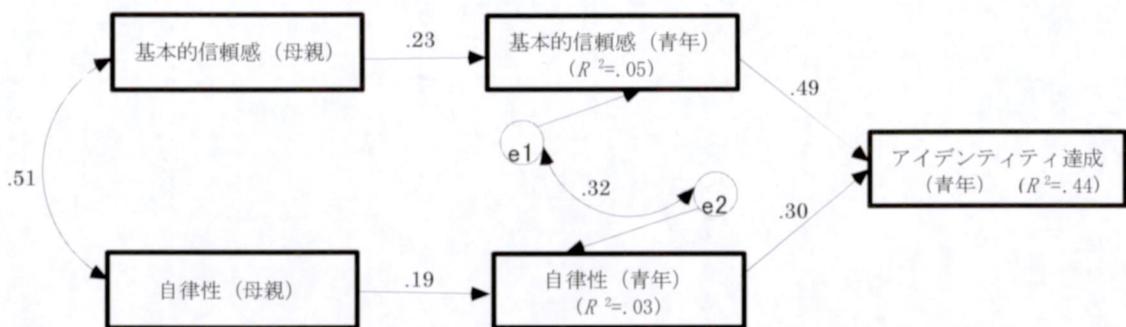
母親群の主題の獲得と青年群の「アイデンティティ達成」との関連

青年群と母親群の間の相関分析結果(Table 2-4)に示されたように、母親群の「基本的信頼感」及び「自律性」尺度の得点は青年の「アイデンティティ達成」尺度の得点との間に有意な正の相関がある($r=.25, p<.05$; $r=.23, p<.05$)。ところが、母親の他の主題の獲得は青年の「アイデンティティ達成」との間に有意な相関がみられなかった。すなわち、母親の「基本的信頼感」と「自律性」は青年の「アイデンティティ達成」と関連していることが示唆された。この結果は、仮説3を部分的に支持したと言える。

母親の主題の獲得と青年の「アイデンティティ達成」との関係プロセスについての検討

ここまでの分析で青年と母親の「基本的信頼感」と「自律性」には相関があることと、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の獲得が青年の「アイデンティティ達成」と相関が高いことが明らかにされた。そこでここでは、母親の主題の獲得が青年の「アイデンティティ達成

成」に影響するプロセスにおいて、青年の主題の獲得が媒介変数としている機能しているという仮説(仮説 4)について検討する。具体的には、母親の「基本的信頼感」と「自律性」が青年の「基本的信頼感」と「自律性」に影響し、青年の「基本的信頼感」と「自律性」が媒介変数として青年の「アイデンティティ達成」に影響するというモデルを仮定し、その妥当性について検討する。



$$\chi^2(2)=1.14, p=.57, CFI=1.00, RMSEA=.00$$

Figure 2-1 母親の「基本的信頼感」、「自律性」と青年の「アイデンティティ達成」の関係モデル (10%水準で有意差が認められなかったパスは省略。「アイデンティティ達成」への誤差変数は省略。)

このため、上述したことをモデル化してパス解析を行った(Figure 2-1)。その結果、モデルの適合度指標について、 $\chi^2(2, N=104)=1.14, p=.57, CFI=1.00, RMSEA=.00$ と十分な値が示された。母親の「基本的信頼感」の青年の「基本的信頼感」に対する正の影響($\beta=.23, p<.05$)が、また母親の「自律性」の青年の「自律性」に対する正の有意傾向($\beta=.19, p<.10$)も算出された。加えて青年の「基本的信頼感」の「アイデンティティ達成」に対する正の影響($\beta=.49, p<.05$)と、「自律性」に対する正の影響が算出された($\beta=.30, p<.05$)。さらに、上述した相関分析の結果では有意な正の相関がみられた母親の「基本的信頼感」と「自律性」からの青年の「アイデンティティ達成」へのパス係数は有意ではなくなった($\beta=.09, n.s.; \beta=.07, n.s.$)。すなわち、母親の「基本的信頼感」及び「自律性」と青年の「アイデンティティ達成」との

間に青年の「基本的信頼感」と「自律性」という2つの変数を導入することにより、本来、有意であった相関関係が見られなくなった。さらに導入した変数への対応する母親の「基本的信頼感」及び「自律性」からのパス係数が有意である同時に、青年の「アイデンティティ達成」へのパス係数も有意である。このように、ある変数を2つの相関している変数の間に導入することによって、三者間のパス係数がこのような変化を引き起こすことがあれば、導入された変数は媒介変数であると認められる (Baron & Kenny, 1986)。すなわち、これらの結果によって、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の獲得が青年の「アイデンティティ達成」に影響するプロセスにおいて、青年の「基本的信頼感」と「自律性」の主題の獲得は媒介変数としている機能していることが明らかになり、仮説4が支持された。

第4節 考 察

本研究の目的は、青年と母親の漸成発達理論の各主題の獲得状況を測定して、漸成発達の特徴及び母子間の関連性について検討することであった。本研究で明らかにされた結果は以下の通りである。第1は、主題の獲得状況の比較により、「生産性」と「親密性」以外の各主題の獲得において母子の間に有意な差異がある。第2は、母親と子どもの両方において各主題が互いに有意な関連がある。第3は、「基本的信頼感」と「自律性」において母子間に有意な正の相関がある。第4は、母親の「基本的信頼感」及び「自律性」の獲得は青年の「アイデンティティ達成」との間に有意な正の相関がある。さらに青年の「基本的信頼感」及び「自律性」はこのプロセスにおいて媒介変数として機能している。

1. 青年群と母親群の各主題の獲得状況の比較

母子間の各主題における t 検定結果に示されたように、母親群の「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」と「生殖性」の主題の得点は青年群より高いことが示された。

「基本的信頼感」とは自分及び他者を信頼できる感覚であり、人格発達における最初の主題

として人格発達全体の基盤である。さらに成長にしたがって人生の各発達段階においても重要な働きをしている。中年期の母親たちは、体力の低下や時間的展望のせばまりを感じるとともに、自己確信や安定感も増大していく(岡本, 1995)。さらに母親が青年期に入った子どもを信頼しながら新しい形の母子関係を築くことは、母親自身の人格発達主題の統合にとって重要な意味がある(Jung, 1969)。一方、青年の「基本的信頼感」は時間的展望と結びついているので、現代の社会状況の変動が青年の信頼感を低下させ不安感が引き起こされることも予想される(山田, 2005)。ちなみに近年の日本社会は、フリーター183万人(厚生労働省, 2010)と10年間で倍増し、若者の完全失業率は9.4%(厚生労働省, 2010)となっている現実状況に対して希望あるいは未来への確信が低くなると推測できる。このため、母親群の「基本的信頼感」の得点は青年群の得点より高いと考えることも可能である。

自律性は意志と自己統制の形成とにかかわって、人生の初期段階に達成され、生涯を通じて自己のあり方に影響しつづける。Fadjukoff & Pulkkinen (2006)によると、個体は発達に従って自己統制感が高くなる傾向があると述べられている。このことから母親群の「自律性」の得点が青年群より高いことが説明されると考えられる。

さらに、母親では「アイデンティティ達成」、「親密性」と「生殖性」の主題について、すでに優勢な発達段階を迎え、危機の解決による主題の獲得の程度が高いと考えられる。これに対して、青年では「アイデンティティ達成」の獲得がまだ進行中で、特に「親密性」と「生殖性」という主題の優勢な時期をまだ迎えておらず人格発達が相対的に進んでいないことが主な原因だと考えられる。

一方、青年の「主導性」の得点は母親より高いことが示された。これは「主導性」が青年期という発達段階にとって特別な重要性を持つことから解釈できる。青年期はもっとも激しく変動して自分の社会位置を見つけるために探索する段階である(Waterman, 1982)。青年はいろいろな試行を行わなければ、自分が将来どのような人間になれるかあるいはどの社会役割をすべきかについて決められないだろう。それに加えて、Erikson (1959, 1980)は「主導性」

の青年期における現れが「役割実験」だと主張した。青年はこの「役割実験」のような探索活動を通して、はじめて自分を取り巻く社会の中に位置付けて自己を定義することができる。このため、「役割実験」は「主導性」の青年期における現れとして青年の人格発達に不可欠なものであり、中年期の母親より青年期では「主導性」に関心が集中することの現れであるとも考えられる。

2. 各主題間の相互関連

本研究では、青年と母親の漸成発達の7つの主題の獲得状況を測定し、青年群、母親群のいずれにおいても主題間においてお互いに高い相関があることが確認され、仮説1が支持された。この点に関しては従来の研究において指摘されてきたが、本研究においても Erikson の漸成発達に関する知見を実証的に検証した。本研究の結果から、このような関連性があることが母子両方の異なる世代においても見いだされ、世代を超えた一般性と普遍性があることが示唆された。漸成発達理論では、各主題は個体の成熟と社会からの要請の相互作用により、段階特有な危機を解決することによって、人格を統合していくとされている。しかも各段階の主題は互いに関連しているとともに、それぞれの段階の前後の獲得状況ともかかわっているという特徴がある(Erikson, 1959, 1980)。すなわち、すべての主題は体系的に関連しあっており、特定の順序性をもって適切な発達段階に顕著に現れる。また前の段階に主題の獲得がうまく進行されない場合には、後の段階の主題の獲得が困難になる可能性が高い。Jacobson(1964)によれば、加齢とともに人格発達過程の構造化と複雑さが増大するとしても、各主題はどの発達段階でも連続性と一貫性を持って、全体の人格を維持している。本研究の結果では、年齢と世代が異なる青年群、母親群両方においても、それぞれ主題間の相関が高く、このような人格発達の特徴を検証したと言えるだろう。

3. 母子間の主題の獲得状況の関連性と青年の「アイデンティティ達成」との関係

問題で論じたように従来の研究によって漸成発達における世代間伝達がある可能性が示唆され、本研究ではこれまで行われてこなかった母子のデータについて実証的な検討を行った。

その結果、「母子間で対応する主題との間には有意な正の相関がある」という仮説 2 に関して、「基本的信頼感」と「自律性」において母親と青年の間に正の相関があることを明らかにした。このことから仮説 2 は、「基本的信頼感」及び「自律性」に関してのみ支持された。この二つの主題に母子間の相関が算出された原因としては、これらが理論的に発達初期に形成される人格の基礎部分の主題であるため、その影響力が大きく青年期にまでおよぶ可能性が考えられる。同じ主題について母子間の主題の間に有意な正の相関があるという結果から、その二つの主題に関しての世代間伝達が推測されるが、本研究の結果はあくまで傍証的な知見である。また、これ以外の主題について母子間に相関が示されない理由としては、その形成される時期が遅く、環境要因も多様化、複雑化し、母親以外の多数の影響要因、たとえば、人間関係では、親以外の家族の成員、仲間、先輩、教師、師匠などが関係するためであることが考えられる。このことが母子間の「基本的信頼感」及び「自律性」以外の主題には、青年期において関連性が見られなかった原因とも考えることができる。

ちなみに、母親の漸成発達の多くの主題の獲得は青年の「基本的信頼感」の達成と緊密な関連があることが見られた。このことについてさらに検討する可能性が示唆されたが、この点に関しては今後の課題としたい。

また、本研究は、母親の各主題の獲得と青年の「アイデンティティ達成」との関係についても検討した。母親群の「基本的信頼感」および「自律性」と青年の「アイデンティティ達成」との間に有意な正の相関が示され、「母親のすべてもしくは一部の主題の獲得は青年の「アイデンティティ達成」と直接的であれ、間接的であれ有意な正の相関があると考えられる」という仮説 3 が部分的に支持された。さらにこの分析結果を踏まえて、母親の「基本的信頼感」及び「自律性」の獲得と、青年の対応する主題の獲得、青年の「アイデンティティ達成」の三者関係についての分析を行い、「母親の各主題の獲得が直接、青年の「アイデンティティ達成」に影響するのではなく、母親の各主題の獲得が青年の青年期以前のそれに対応する主題に強い影響を与えて、青年自身のそれらの主題が「アイデンティティ達成」に影響を与え

る」という仮説 4 が支持された。具体的には、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の獲得が青年の「基本的信頼感」と「自律性」に影響を与え、それらが「アイデンティティ達成」に影響するというプロセスが明らかにされた。

これらの結果は、母親の主題の獲得が子どもの発達初期における主題の形成の主な影響要因として働き、さらに子どもの青年期の「アイデンティティの達成」にも間接的に影響していることを示している。母親の主題の獲得の状態が、子どもが青年期に至ってさえ、母親の人格から間接的であるにせよ影響されるという関連の大きさを示していると同時に、青年期では、母親の直接の影響より青年本人の中に形成された主題の獲得状況の方がより直接的に「アイデンティティの達成」に影響するということも示している。

子どもの信頼感を形成する重要な環境は、母親であり、子どもの自律性を形成する重要な環境は、両親であるとする Erikson の漸成発達理論から考えると、以下のようなプロセスが考えられる。母親が誕生から子どもの生理的要求と心理的要求を満足させることは、子どもが「基本的信頼感」を獲得するための基本的な条件である。母親は外部社会への信頼と自分が信頼に足る人間であるという確かな感覚—「基本的信頼感」を子どもに示すことにより、子どもは基本的信頼感を形成する。また、子どもは「自律性」を獲得する段階においても、母親自身の「自律性」の現れである意志や自己統制を参照しながら「自律性」を形成し始める。すなわち、母親の「基本的信頼感」及び「自律性」の獲得が子どもに伝えられ、子どもが母親を信頼しながら自分が信頼されている感覚を得て、しかも意志の主張や自己統制の感覚を獲得することによって母親の主題の獲得状況が子どもの人格発達に影響すると考えられる。このような影響を受けて子どもの「基本的信頼感」と「自律性」が形成され、それを基礎として青年期の人格発達においても「アイデンティティの達成」の獲得が促進される。こうしたプロセスの中で、間接的であれ母親の人格が子どもの青年期までの自我発達に及ぼす影響の大きさは注目に値する。

さらに、上述の点に加えて、本研究では青年群の「基本的信頼感」の得点と母親群の「基

本的信頼感」,「自律性」,「アイデンティティ達成」,「親密性」及び「生殖性」の得点との間にも有意な正の相関が見いだされた。この点に関しては本研究では詳細な分析はできなかったが,人格の重要な基礎である「基本的信頼感」と,母親のほぼ生涯にわたる主題との間に有意な相関があるという知見についての子ども的人格形成に及ぼす母親の生涯発達の見地からの今後の検討は意味のあるものであろう。

一方,母親の「基本的信頼感」及び「自律性」の獲得と,青年の対応する主題の獲得,青年の「アイデンティティ達成」の三者関係について分析を行うと,青年期における「アイデンティティ達成」には,母親の「基本的信頼感」及び「自律性」よりも青年自身の「基本的信頼感」及び「自律性」が直接影響を及ぼしていることが明らかになった。

このことは,「アイデンティティ達成」が青年の内的なプロセスであり,青年期の1次,2次,3次の心理的離乳により,親の影響から脱し,主体的な自我を確立するという理論(西平直喜,1990)とも関連性が高いであろう。また,上述のように青年期の間関係の変化について,友情や同年代の仲間との関係が人間関係の主要な関心事になり,加えて家族との関係も新たなものになる(Akers, Jones & Coyl, 1998; Coleman, 1974)と指摘されている。

本研究から得られた知見は以下のようにまとめられる。青年の「アイデンティティ達成」に関しては,まず発達初期の母親の「基本的信頼感」と「自律性」の影響により「基本的信頼感」と「自律性」が形成される。このプロセスにおいて母親の影響は大きい。また,一方で青年期に至ってまさに「アイデンティティ達成」の主題を解決するためには,青年自身の中に形成された「基本的信頼感」と「自律性」が直接影響し,母親からの影響は相対的に小さくなるという複雑なプロセスが示された。また,「基本的信頼感」及び「自律性」という主題の獲得状況に関しては母子間に関連性があり,これらの主題における世代間伝達という現象の存在が示唆されるが,この点に関して説得力あるデータにより実証するためには,幼少期からの縦断的研究などの方法を用いる必要がある。

今後の課題

残された課題として特に以下の2点について、今後の検討を行いたい。

本研究では青年群と母親群の間の相関分析結果について分析を行い、「基本的信頼感」及び「自律性」において母子の間に有意な正の相関があるという結果を得た。しかし、青年群と母親群の間の相関分析結果により、青年の「基本的信頼感」の獲得は母親の「基本的信頼感」以外の主題「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」と「生殖性」との間にも有意な相関が見られた。青年の「基本的信頼感」の獲得に母親の「基本的信頼感」以外の主題の獲得がどう影響するのか、それとも「基本的信頼感」の高い子どもを育てるプロセスにおいて母親の「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」と「生殖性」が高くなるという母子の相互作用の結果であるというような可能性も考えられるが、具体的な影響変数の確定とプロセスに関しては今後の課題としてさらなるデータ収集と厳密な分析が必要であろう。

さらに、考察の部分において子どもにとって母親以外の重要人物は青年の人格発達に対しても重要な役割があると述べた。この問題をめぐって、青年の漸成発達各主題の発達は親たち以外の重要人物からどのように影響を受けるのかといった点を明らかにしていく必要もあるだろう。

第3章 大学寮生活の雰囲気は青年期におけるアイデンティティ形成に及ぼす影響

アイデンティティの形成に影響を及ぼす要因が様々であり、第1章に論じた母親のような特別な意味を持つ人物はもちろん、その後の人生で出会う友人、学校の教員、配偶者などの人物からの影響も無視することができない。さらに、人間からの影響だけではなく、環境もアイデンティティの形成過程において重要な影響要因である。

大学の寮は大学生にとって最も身近な環境であり、最も重要な生活空間である。したがって、このような環境において過ごす4年間は、青年期のアイデンティティの形成過程の重要な時期である。本章では、この問題をめぐって、漸成発達理論の視点から、寮生活の雰囲気はどのように青年期のアイデンティティ形成に影響を及ぼすことについて検討しようとする。

第1節 問題

アイデンティティの形成は青年期の人格発達において最も重要である(Erikson,1968)。近年、この形成過程においてアイデンティティがいかに変化するか検討するために、時間的要素を導入する縦断的研究が増えている。ところが、その中のほとんどは Marcia(1966)が提唱した概念に基づいて調査を行っているが、理論上に問題があると指摘されている(Matteson, 1977)。このため、本研究の第一の目的としては、漸成発達理論の立場からアイデンティティの各構成要素が青年期においてどのように変化するかを明らかにし、青年期のアイデンティティ形成（以下アイデンティティ形成）を検討する。

また、アイデンティティ形成は心理-社会的相互作用によるものであり、外部環境からの影響を受けつつ統合していく(Erikson, 1950, 1963)。青年期のある一定期間の環境がアイデンティティ形成にどのように影響するかについての検討はとても意味深いものである。本研究の第二の目的としては、大学生の寮生活をこのような外部環境の典型と考え、アイデンティティ形成への影響について検討する。

青年期は、世界観や価値観が変化し(大野, 2010)、人格を再構成し、アイデンティティを形成する時期である。Erikson(1968)は、「アイデンティティとは、パーソナリティ特性とか、または、何か静態的で不変なもの形をした『成果』として『達成』されるようなものでは、決してないからである。」と述べた(『アイデンティティ：青年と危機』, 1968, p.17)。このため、いくつかの先行研究では縦断的調査を行って、青年期にあるアイデンティティの状況の変動について検討した。これらの研究のほとんどはアイデンティティの形成状況を測定するために、Marcia (1966) による ISI (Identity status interview) 尺度を用いた。しかし、このような行動指向及び意思決定レベルの分析視点から作った尺度はアイデンティティの形成状況を判断することに役に立つが、アイデンティティ形成がどのようなプロセスとたどって変化していくかについて有益な情報をもたらす難しいと指摘された (Matteson, 1977)。そのゆえ、アイデンティティ形成の時間的変化を考察する際に、より適切な理論な立場からデータ

収集する必要がある。

さらに、Erikson (1968) は、「人格的アイデンティティを持っているという意識的な感覚」というものは、二つの同時存在的な観察に基づいている。時間—空間における自分の存在の斉一性 (sameness) と連続性の自覚、及び、他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚、である」とも述べた(同上, p.55~56)。ところが、ここで時間的次元における「不変性」と「連続性」という感覚の獲得はある発達段階に急に獲得するものではなく、むしろ生涯の一連の発達段階にわたって各段階にある特有な主題を解決することによって累積されるものであると考えられる。

一方、漸成発達理論は生涯発達を 8 つの段階に分け、各段階に特有な発達主題、すなわち基本的信頼感、自律性、主導性、生産性、アイデンティティ達成、親密性、生殖性と統合性があると仮定する。さらにすべての主題は体系的に関連しあっており、特定の順序性があるとともに、各主題はそれが顕著に現れる段階の前後の段階にもその影響は存在しており、生涯にわたって一貫した影響がある(Erikson, 1968)。すなわち、これらの主題の時間的な持続や変化する過程について考察することによって、アイデンティティの形成をより全面的に把握できると考えられる。このため、本研究はまずアイデンティティの各構成要素の青年期における変化について検討する。

また、Erikson (1968) はアイデンティティの形成は心理—生物学的発達と外部環境の相互作用で決まると強調した。青年期は、生涯における環境の変動が一番大きく不安定な時期である(Rindfuss, 1991; Waterman, 1982)。よい環境の中では青年は人格発達において主題を達成しやすく、次の段階の主題の達成にも堅実な土台を作りあげられる。さらに、個体は一つの発達段階において一つの主要な主題を解決すると同時に、ほかの七つの主題でも再調整を行っている(Marcia, 2007)。すなわち、外部環境がどのようにアイデンティティの形成に影響を及ぼすのかについての検討はとても意味があると考えられる。

外部環境について、Bronfenbrenner (1979) はマクロレベル環境(macro-level)とマイクロ

レベル環境(micro-level)を細かく分類した。マクロレベル環境とは主にある文化や下位文化に共通している社会的制度の体系やイデオロギーを橋渡しするようなパターンを指している。それに対して、マイクロレベル環境とは主に直接的な行動場面の中で起こる複雑な相互関係であることと指している。すなわち、マイクロレベルすなわち日常生活場面はアイデンティティの発達主題の達成にもっとも緊密な関係を持ち、直接に影響を与える外部要因である。このため、アイデンティティの形成を検討する際に、マクロレベル環境の差異からの影響を抑えながら、マイクロレベル環境からの影響の効果を追及した方がより適切である(Lichtwarck-Aschoff, Geert, Bosma, & Kunnen, 2008)。

近年、マイクロレベル環境である大学の寮に関する研究への注目が集まっている。先行研究によって以下のことが明らかにされている。大学の寮生活は青年の学業成績、対人関係とかかわって、さらに飲酒問題や麻薬乱用などの社会問題にも関連がある(Flanagan, Schulenberg, & Fuligni, 1993; Pascarella, Bohr, Nora, Zusman, Inman, & Desler, 1993; Valliant & Scanlan, 1996)。さらに Jordyn & Byrd (2003) は通学、寮生活と一人暮らしの大学生を比較して、大学の寮生活とアイデンティティ形成との関連について研究を行った。その結果、寮生活をする大学生の方がよりアイデンティティ達成レベルが高く、自我コントロール能力も強くて、大学寮生活とアイデンティティ形成の間に有意な関連があることを明らかにした。ところが、この研究は上述した行動指向及び意思決定レベルの分析視点から作った尺度を用いた問題があるほか、アイデンティティ形成の時間的変化についての検討も行わなかった。そのため、本研究のもう一つの目的は大学寮生活をこのようなマイクロレベル環境としてアイデンティティ形成への影響を検討しようとする。

本研究の目的を達成するため、中国大学生を調査対象とし、大学数年間のアイデンティティ形成を調べ、さらに寮生活の雰囲気マイクロレベル環境の典型例として、アイデンティティ形成への影響を検討する。その理由としては、まず中国の大学では授業の開始時間が早く(1限は朝8時から開始される)、実家からの交通が不便であり、加えて安全面と経済面か

らの原因で、90%以上の学生は寮生活を選ぶ。このため、縦断研究が必要なサンプル数が確保できる。また、中国の大学では新入生は入寮から寮のメンバーがほとんど変わらずに卒業まで一緒に暮らす。このために、寮生活雰囲気はメンバーの変動によるもたらす影響が最小限に抑えられて、雰囲気の安定性を保証できる。

第2節 方法

調査対象

中国の地方国立の中核としての総合大学である S 大学、地方国立の理科系大学である T 大学、地方国立の農業系の SN 大学の大学生を調査対象とした。2007 年、2008 年と 2010 年の 3 回の調査を実施し、その参加者人数と年齢については Table 3-1 に示した。

Table 3-1 本研究の参加者人数、年齢と損失率

	参加人数(男性/女性)	平均年齢(SD)	損失率
Time1(2007)	627(358/269)	19.40(0.87)	—
Time2(2008)	426(222/204)	21.31(0.85)	16.16%
Time3(2010)	337(177/160)	22.64(0.60)	44.66%

測定尺度

CS-ESDS 尺度 (Erikson and Social Desirability Scale の中国語版)

アイデンティティの発達主題を測定する尺度として、Erikson の記述に基づいて数多くの尺度が作成されている (Darling-Fisher & Leidy, 1988; Demino & Affonso, 1990; Rasmussen, 1964; 谷, 2001 など)。上述したように、本研究の目的から考えるとより多くの主題が包括され、しかも日常生活場面レベルについての尺度が本研究にとってより適切である。Ochse & Plug (1986) は Erikson の概念を十分に検討し、各主題の概念を日常レベルで具体的かつ明確にとらえた質問項目作成を行った。その上で幅広い年齢やさまざまな人種の人々を対象として大規模な調査を行い、汎用性の高い尺度である ESDS (Erikson and Social

Desirability Scale) を作成した。この尺度は高い信頼性と妥当性を持つことが示されている。そこで日本では三好ほか(2003)はこの尺度を日本語に翻訳した。日本で調査の結果によって同様に高い信頼性と妥当性のあることを示した。

本研究は三好ほか(2003)と同様の方法で、ESDS 英語版から中国版に翻訳して、予備調査で因子負荷量が低い項目を削除して、短縮した。最後に第 8 段階以外の発達主題 7 項目で 49 項目になった。これによって中国版の ESDS すなわち CS-ESDS 尺度を作成した。または、言語と文化背景の差異を配慮して、正式調査を実施する前に山西大学外国語学院の英語専攻 4 年生 51 人の協力を得て 2 回の調査を実施した。第 1 回目は英語版で、2 週間後第 2 回目で中国語版の同じ 49 項目の質問紙調査を実施した。相関係数は .76 ($p<.01$)だった。

CS-ESDS はそれぞれの主題につき 7 項目、計 49 項目から構成されている。回答者は、各項目について、“全く当てはまらない=1”、“あまり当てはまらない=2”、“やや当てはまる=3”、“非常に当てはまる=4”の 4 件法で評定を行った。

「中国大学生寮生活雰囲気」尺度

予備調査で、上述した S 大学の大学生 31 名を調査協力者として自由記述法を実施し、寮生活の雰囲気についての記述を収集し、さらに類似の内容をまとめて整理し、42 項目を作成した。次に、これらの項目による尺度を用いて、117 名(男性 54 名、女性 63 名)の S 大学の大学生に対して質問紙調査を行った。収集したデータに基づいて主因子法の因子分析を実施し、「交流」、「友愛」と「一致」の 3 つの因子を抽出した。さらに各因子において、因子負荷量が低い項目を削除し、最終的に 20 項目の「中国大学生寮生活雰囲気」尺度を作成した。

各項目について、“全く当てはまらない=1”、“あまり当てはまらない=2”、“どちらでもない=3”、“やや当てはまる=4”、“非常に当てはまる=5”の 5 段階評定となる。

調査期間・手続き

2006 年 3 月、項目リストを収集して、予備調査によって CS-ESDS と大学寮生活雰囲気尺度を作成して信頼性と妥当性を確認する。

2007年9月に2007年度新入生を研究対象として第1回目のCS-ESDS質問紙調査を実施して、その後2008年6月と2010年5月に追跡調査をおこなった。さらに、2008年の調査ではCS-ESDS質問紙調査に加え、大学生寮生活雰囲気尺度も実施した。調査は、大学の授業時間中に集団実施した。

統計パッケージ

以下の分析に、SPSS15.0 for Windows と Amos18.0 を用いた。

第3節 結 果

「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の検討

「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の信頼性と弁別的妥当性を検討するため、2008年度に収集したデータについて主因子法の因子分析を行った。Table 3-2 に示したように、プロマックス回転後、「交流」因子では $\alpha = .86$ 、因子負荷量.80 から.38、「友愛」因子では $\alpha = .82$ 、因子負荷量.77 から.49、「一致」因子では $\alpha = .78$ 、因子負荷量は .67 から.51である。また、3つの下位因子間には、やや低い相関があった。このことから、この尺度は適度な信頼性と弁別的妥当性を持つことが示された。

CS-ESDS 尺度の検討

2007年、2008年、2010年に行った3回調査による得たデータを基づいてCS-ESDS尺度の信頼性と弁別的妥当性を分析した。Table 3-3 にまとめた結果によって、各下位尺度は適度な信頼性と弁別的妥当性を持つことが明らかになった。

Table 3-2 中国大学生寮生活雰囲気尺度の因子分析の結果

項目内容	因子負荷量			共通性
	1	2	3	
第1因子：交流 $\alpha=.86$ 寄与率=35.20%				
寮のメンバーたちはよく交流する。	.80	-.07	.11	.66
寮では、あることに対して討論する際、他のメンバーの意見を尊敬しながら順番に発言する。	.80	.01	.18	.65
他の寮と比べて、われわれの寮のメンバー間には交流が少ないと感じる。R	.75	.14	-.20	.49
寮のメンバーたちと話したいとは思わない。R	.71	.16	-.14	.69
寮では、他のメンバーの考え方を認めて互いに理解しようとする。	.66	.16	-.06	.44
寮内に問題があった時、みな積極的に解決の方法を探す。	.59	.41	.06	.54
寮のメンバー間に問題が起こった時、ほとんどの場合、解決されずに終わる。R	.57	.49	.07	.39
寮のメンバーは、日頃からおしゃべりを楽しんでいる。	.49	.29	-.03	.53
寮のメンバーの考えることを理解できないと感じている。R	.38	.26	-.10	.66
第2因子：友愛 $\alpha=.82$ 寄与率=11.11%				
寮のメンバーは互いに友情で結ばれている。	.19	.77	.07	.60
寮のメンバーのだれかが困っていると、みんなが助けてくる。	.10	.72	-.00	.44
友愛・協力は、寮の生活雰囲気の特徴である。	.29	.71	.01	.63
掃除のような共同活動をする際、寮のメンバーはよく協働している。	.26	.66	-.17	.37
寮では何かトラブルがあった際、双方で自分の誤りを認め、積極的に問題を解決する。	.22	.61	.14	.60
寮のメンバーは、日頃から互いに励んでいる。	.17	.51	.18	.51
寮のメンバーは、自分の事だけに興味を持つ。R	.39	.49	.21	.60
第3因子：一致 $\alpha=.78$ 寄与率=7.72%				
同じ寮に住んでいるので、寮のメンバーは似たような好み・興味関心になってくる。	.29	-.18	.67	.43
寮のメンバー間で、考え方と考える内容は基本的に異なっている。R	.19	.21	.60	.68
寮では自分と他のメンバーとの考え方は一致しており、大きな違いはないと思う。	-.26	.36	.54	.31
寮の雰囲気のおかげで、寮のメンバーはみな進歩した。	.13	.37	.51	.59
1	—	.44	.32	
2		—	.24	
3			—	

注. Rは逆転項目を表す。

Table 3-3 3回調査における CS-ESDS 尺度の信頼性と因子負荷量

	2007		2008		2010	
	α 係数	因子負荷量	α 係数	因子負荷量	α 係数	因子負荷量
基本的信頼感	.72	.70~.36	.69	.72~.40	.69	.73~.40
自律性	.70	.78~.33	.71	.71~.31	.70	.72~.36
主導性	.69	.71~.30	.68	.70~.37	.70	.62~.41
生産性	.71	.69~.30	.63	.63~.31	.67	.69~.23
アイデンティティ達成	.75	.68~.40	.76	.70~.32	.70	.75~.30
親密性	.74	.73~.35	.70	.70~.33	.71	.70~.31
生殖性	.73	.72~.30	.70	.68~.25	.75	.70~.31

Table 3-4 CS-ESDS 3回調査の記述分析結果

		2007(1)		2008(2)		2010(3)		F 値	多重比較
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
基本的信頼感	男性	22.11	3.08	21.15	3.27	20.21	2.66	3.72*	1>2,1>3
	女性	22.13	2.65	21.30	2.89	20.10	2.93	3.41*	1>3,2>3
自律性	男性	17.32	2.35	19.04	2.27	19.10	2.55	11.14**	3>1,2>1
	女性	17.41	3.02	18.93	2.74	19.17	2.68	11.07**	3>1,2>1
主導性	男性	20.01	2.80	19.88	2.86	19.41	3.00	1.54 <i>n.s.</i>	
	女性	20.22	2.21	20.02	3.01	19.64	2.91	1.55 <i>n.s.</i>	
生産性	男性	19.88	2.39	20.04	2.81	19.74	2.98	.75 <i>n.s.</i>	
	女性	20.06	2.87	20.10	2.65	20.01	2.51	.61 <i>n.s.</i>	
アイデンティティ達成	男性	19.60	2.56	20.76	3.01	21.27	2.81	10.03**	3>1,2>1
	女性	20.02	2.87	21.07	2.64	21.44	2.93	9.76**	3>1,2>1
親密性	男性	19.75	2.78	20.59	3.00	21.00	2.66	3.23*	3>1,2>1
	女性	20.60	3.01	21.16	2.45	21.68	2.80	3.81*	3>1,2>1
生殖性	男性	19.87	2.84	19.76	2.67	20.08	2.99	1.52 <i>n.s.</i>	
	女性	20.19	3.02	20.00	2.98	20.11	2.85	1.70 <i>n.s.</i>	

注. * $p<.05$, ** $p<.01$

2007年,2008年,2010年のCS-ESDSの記述統計量と分散分析の結果

2007年,2008年,2010年に実施したCS-ESDSの調査結果の記述統計量を男女別で算出し,さらに各年度間の平均値の比較も行った(Table 3-4)。その結果,男女のいずれも「基本的信

「信頼感」の得点は3年間にわたって減少する傾向があり、平均値間に有意な差が見られた($F(2,174)=3.72, p<.05$; $F(2,157)=3.41, p<.05$)。「自律性」の得点は男女とも上昇する傾向が見られた($F(2,174)=11.14, p<.01$; $F(2,157)=11.07, p<.01$)。「アイデンティティ達成」の得点も男女とも上昇する傾向がある($F(2,174)=10.03, p<.01$; $F(2,157)=9.76, p<.01$)。また、「親密性」の得点も男女とも上昇する傾向が示された($F(2,174)=3.23, p<.05$; $F(2,157)=3.81, p<.05$)。

ちなみに、各下位尺度の得点の男女差についても分析したが、有意な性差が見られなかった。このため、以下の分析は男女合わせて実施した。

CS-ESDS と「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の相関

CS-ESDS と「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の関連性を検討するため、2008年、2010年に収集したデータに基づいて分析した(Table 3-5)。結果は、2008年と2010年の「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の得点のいずれも「基本的信頼感」($r_{2008}=.31, p<.01$; $r_{2010}=.31, p<.01$)、「自律性」($r_{2008}=.24, p<.01$; $r_{2010}=.25, p<.01$)、「アイデンティティ達成」($r_{2008}=.44, p<.01$; $r_{2010}=.30, p<.01$)、「親密性」($r_{2008}=.35, p<.01$; $r_{2010}=.25, p<.01$)の得点と有意な正の相関が見られた。また、2010年の「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の得点と「生殖性」の得点の間にも有意な正の相関が見られた($r_{2010}=.18, p<.05$)。すなわち、寮生活の雰囲気が良いほど「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」の形成は順調に進むことが示唆された。

Table 3-5 大学生寮生活雰囲気と CS-ESDS との相関

寮生活雰囲気 CS-ESDS 尺度	2008年		2010年	
	<i>M</i> =69.492	<i>SD</i> =10.236	<i>M</i> =71.336	<i>SD</i> =8.514
基本的信頼感	.31**		.31**	
自律性	.24**		.25**	
主導性	.01		.10	
生産性	.10		.16	
アイデンティティ達成	.44**		.30**	
親密性	.35**		.25**	
生殖性	.17		.18*	

注. * $p<.05$, ** $p<.01$

寮生活の雰囲気からアイデンティティ形成への影響に関する潜在曲線モデル

寮生活の雰囲気が CS-ESDS の下位尺度の時間的変化に如何に影響するのかを検討するために、相関分析を通して得た寮生活の雰囲気と有意な相関がある CS-ESDS の下位尺度、「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」の得点変化に、「中国大学生寮生活雰囲気」尺度得点が及ぼす影響について、潜在曲線モデルを用いて分析を行った (Figure 3-1)。ここで、大学生の第 1, 2 年の変化が大きいため、傾きすなわち成長率から 2007 年度へのパス係数を 0 に、2008 年度へのパス係数を 1 に設定した。第 3, 4 年の変化が相対的に小さいので、2010 年へのパス係数を 2 に設定した。各下位尺度と「中国大学生寮生活雰囲気」の潜在曲線モデルの適合度についての分析結果は Table 3-6 に示した。

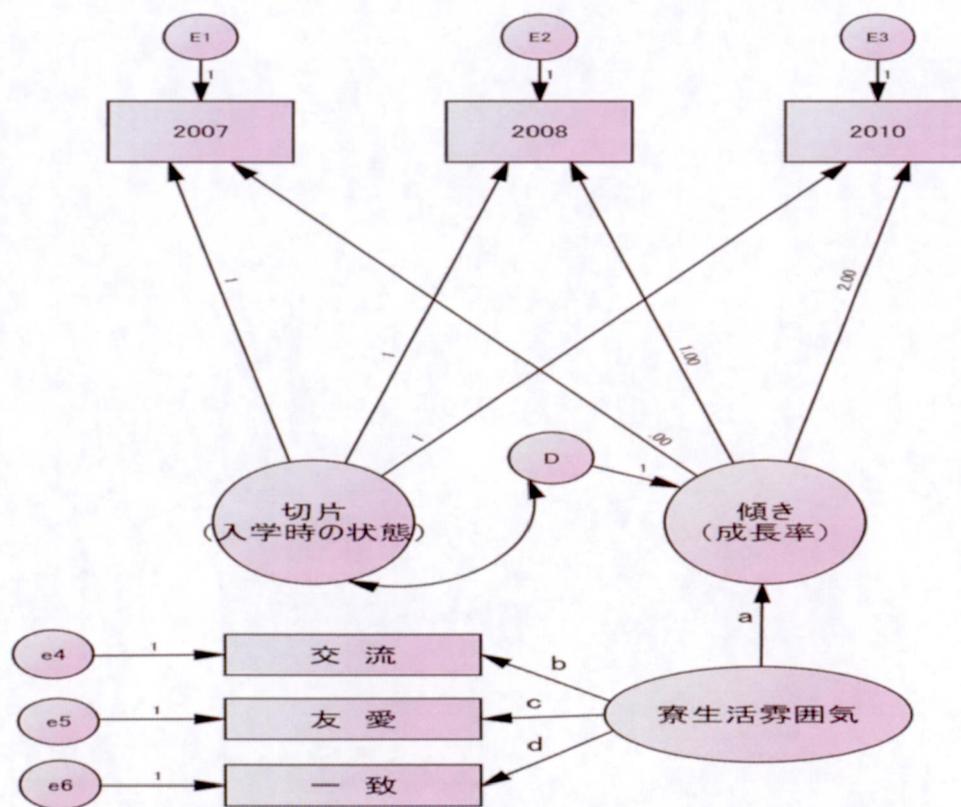


Figure 3-1 寮生活雰囲気と青年期アイデンティティ形成との潜在曲線モデル

Table 3-6 Figure1 モデルの適合度とパス係数

	χ^2	<i>df</i>	<i>p</i>	<i>GFI</i>	<i>CFI</i>	<i>RMSEA</i>	<i>a</i>
基本的信頼感	34.56	9	.00	.95	.93	.07	.11
自律性	14.05	9	.16	.97	.96	.04	.30**
アイデンティティ達成	19.08	9	.03	.98	.96	.05	.20*
親密性	51.27	9	.00	.96	.94	.06	.20*
生殖性	70.07	9	.00	.88	.87	.12	.07

注. * $p<.05$, ** $p<.01$

パス係数 *b, c, d* は全て 5% レベル以上有意である。表記は省略した。

その結果、「基本的信頼感」と「中国大学生寮生活雰囲気」のモデルは、適当な適合度を持つと同時に、寮生活の雰囲気から「基本的信頼感」の切片へのパス係数は有意ではないことが明らかにした($a=.11, n.s.$)。すなわち、「中国大学生寮生活雰囲気」は「基本的信頼感」の変化には有意な影響を与えないことが明らかになった。一方、「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」と「中国大学生寮生活雰囲気」の各モデルにおいて、「中国大学生寮生活雰囲気」はこれらの下位尺度の時間的変化に有意な影響を及ぼすことがわかった($a=.30, p<.01$; $a=.20, p<.05$; $a=.20, p<.05$)。すなわち、大学3年間においてこれらの漸成発達の各主題の時間的変化は大学の「中国大学生寮生活雰囲気」から影響を受けていることがわかる。しかし、「生殖性」と「中国大学生寮生活雰囲気」のモデルにおいては有意な影響がみられなかった($a=.07, n.s.$)。すなわち、上述した分析において両者の間には有意な相関が見られたが、「中国大学生寮生活雰囲気」は「生殖性」の時間的変化に強い影響を与えていなかった。

第4節 考 察

本研究は中国の大学生を調査対象として、入学から3年間にアイデンティティ形成における各主題の時間的変化に対して、縦断的研究手法で調査を行った。さらに寮生活の雰囲気を外部環境の要因としてこれらの構成要素の時間的変化への影響についても検討した。

分析結果に示されたように、「自律性」、「アイデンティティ達成」と「親密性」の平均得点は時間とともに高くなる傾向がある。さらに、「中国大学生寮生活雰囲気」はこれらの時間的

変化に有意な影響を与えることを明らかにした。

「自律性」は意志と自己統制の形成を反映し、人生の経歴や社会的経験とかかわって、個体の発達とともに高くなる傾向がある(Fadjukoff & Pulkkinen, 2006)。初めて親から離れる中国の大学の新生にとって、寮生活を始めることは、かなり困難な状況である。寮という物理的、心理的に狭い生活空間において様々な日常生活の些細なことに自ら対応しなければならない。これらの寮生活経験によって自己コントロール能力が向上する(Jordyn & Byrd, 2003)。さらに寮生活においてよく交流し、友愛な雰囲気の中で、この能力の達成が促されることがある (Hawken, Duran, & Kelly, 1991)。

また、「アイデンティティ達成」の得点は時間とともに増加する傾向が見られた。このような結果は大学の寮生活に関連すると考えられる。「アイデンティティ達成」するために、生まれ育った家族から離れて自分の居場所を作ることはアイデンティティを確立する過程の一環である(Astin, 1973; Adams, Ryan, & Keating, 2000)。これは重要な一歩で、成人期の開始の象徴と見られる(Chickering, 1974)。実家から離れた青年はそうではない青年より人格発達においてより高いレベルを達成するという指摘もある(Valliant & Scanlan, 1996)。さらに、「アイデンティティ達成」において、家庭環境からのサポートも非常に重要である(Grotevant & Cooper, 1986)。寮というところは、実家から離れた大学生が一時的に家庭の役割としての心理的サポートを求める場所である(Goldscheider & Goldscheider, 1999)。このため、「交流的」、「友愛」的で、しかも思考傾向や行動傾向が同調的という意味で、「一致」している寮生活の雰囲気において、「アイデンティティ達成」が促されることが考えられる。

さらに、本研究における「親密性」の得点も年齢とともに増加して、「中国大学生寮生活雰囲気」から有意な強い影響を与えることがわかった。中国の大学生の多数は 90 年代前後の生まれで、中国の「生育計画政策」によって一人っ子が多数である。大学寮生活は彼らにとって初めて親から離れ、他人と一緒に生活することの開始である。加えて、寮の各宿舎のメンバーの大多数は同じ学部の同級生であり、4 年間に毎日の授業、食事やスポーツなど活動を

集団で行う。このような過度の接触において個人のプライベートがないという欠点があると同時に、メンバー間でお互いに影響しあい、親密な関係を形成しやすい。むしろ、大学の寮は中国の大学生が家庭の中心である「小皇帝」から社会的人間関係を熟知して、周りに認められる一人の大人へと変身する洗礼所であると言える。もちろん、互いに友愛的感情を感じられる雰囲気環境は、他人を信頼して心理的接近ができるという親密な関係の形成を促進すると推測される。

一方、本研究の結果では、「基本的信頼感」は予測と異なり、時間の経過とともに減少する傾向が見られた。その理由としては、「基本的信頼感」は青年期において主に未来への時間的展望と緊密にかかわっている(Erikson, 1950, 1963)。このため、「基本的信頼感」の得点の変化は個体が大学在学中に未来への期待や希望の変化を反映していると考えられる。中国の大学生の場合には、入学時は新しい環境への新鮮感や好奇心、さらに未来への憧れを持つために、時間的展望が強くなる(張・胡・呂, 2005)。しかし、大学生活に慣れるとともに多くの大学生は「しらけ」を感じながら、大学生活を退屈なものと感じてくる(Li & Lin, 2003)。さらに、3年生の後期に入り、卒業が近づいて、社会に踏み出す圧迫感や恐怖感を体験し同時に、近年続いている低い就職率の現実と直面しなければならない。これらの原因を重ねて、「基本的信頼感」の得点が減少することとなったのではないかと考えられる。

ちなみに、本研究の結果によって、「主導性」、「生産性」の平均得点は3年間に大きな変化が起こらないことが明らかにされた。これらの発達主題は、学齢期から比較的安定な状態になり、青年期に入っても大きな変化が起きないと考えられる。一方「生殖性」の得点については、青年期は「生殖性」の達成の優勢の時期ではないために、時間的変化が見られなかった原因と考えられる。しかし成人期とその以後に入ると、著しい変化が発生する可能性がある。

また、本研究において有意な性差が見られなかった。その原因は、中国の一人っ子政策によって、一つの家庭において、家族からのすべての関心や支援が一人の子どもに集中してい

ることが考えられる。さらに多くの家庭では6対1(父母とそれぞれの祖父母 対 一人の子ども)の状態である。加えて、社会の進歩や収入の増加により、昔のような男女に関する伝統的な観念が希薄化し、子どもに対して性別を問わずに、できるかぎりの教育チャンスを与えるという新しい教育への理念が主流となる。それとともに、親や学校からの子どもに対する要求は性別意識が薄まり、差異が減少する傾向である(答, 2002)。このような家庭や教育環境下に成長した子どもは、漸成発達理論の各主題においても男女いずれも同じような達成状況となるのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究は主に中国の大学生の入学から3年生までのアイデンティティ形成と寮生活の雰囲気からの影響について検討したが、今後の課題として、以下に述べるいくつかの点が考えられる。

まず、寮生活の雰囲気からの影響について、先行研究や本研究の結果によって示唆されたが、寮生活をする大学生グループと自宅から通学する大学生グループの間のアイデンティティの形成に関する両者の差異を検討することは、今後の一つの研究課題とする必要がある。

また、本研究の調査対象は中国の大学生である。しかし研究結果の生態的妥当性をより検討する必要がある。すなわち本研究の結果で得られた外部環境の重要性や交流、友愛などの要因は日本青年のアイデンティティ発達研究においても有効であるか否か、さらには、アイデンティティ形成において日中青年の間にどのような異同があるか、これらの問題について、今後文化間の比較研究を一つの課題として研究を行う必要があると考えられる。

第4章 青年期の愛着行動の特徴と漸成発達の親密性の 達成との関連

第2章と第3章において、母親のアイデンティティの形成状況と、寮生活の雰囲気は外部からの要因として、いかに青年期のアイデンティティの形成に影響を及ぼすかについて、漸成発達理論の立場から検討した。ところが、外部からの要因以外、個体自身の行動の特徴もアイデンティティの形成に影響を及ぼす可能性がある。特に、漸成発達の主題とかかわっている行動や活動ならば、このような影響があると考えられる。

本章では、青年期の愛着行動が、漸成発達理論の立場から、親密性やアイデンティティの形成にどのようなプロセスで影響するかについて検討する。

本章の内容は、『立教大学心理学研究』第53号（2011年，p.17~28）に掲載された原著論文を加筆したものである。

第1節 問題

青年期が終わり成人期に至ると、漸成発達第6段階「親密性 対 孤立」に入り、「親密性」が発達の主題となる (Erikson, 1950, 1963)。これは単に異性と結婚して自分の家庭を持つことだけでなく、親密な仲間関係を作ることも意味している。しかし、人を拒絶したり、距離を設けたりすることや、人との親密関係のため自分自身が巻き込まれて自我の喪失の恐れ不安感を強く感じる場合、親密性の対極である「孤立」に偏ることとなる。この状態に陥ると、自分のことのみで夢中になり本当の親密な関係をつくりあげられなくなる (Erikson, 1959, 1980)。

一方、近年同じように青年期の親密な関係を主な研究テーマとする成人愛着理論が注目されている。成人愛着理論の基本的な観点は、幼少期において養育者との愛着経験によって形成された内的作業モデルが、青年期や成人期における親密な関係にも働いて大きな影響を及ぼすことにある (Shaver & Hazan, 1987)。Bartholomew & Horowitz (1991) は成人愛着行動の特徴をとらえるため、因子分析の結果にもとづいて「不安」と「回避」の2因子構造を見出している。不安と回避の両方が低い場合には、安定型愛着行動の特徴であり、反対に不安と回避のどちらか高い場合は不安定型愛着行動の傾向があるといえる。不安定型愛着行動の中で、さらに不安因子の得点が高いとらわれ型と回避因子の得点が高い愛着軽視型に分けられる。

先行研究によると、成人愛着行動の特徴と青年期の親密関係については諸方面と関連がある。たとえば、不安定型愛着行動の傾向がある人は進行中の恋愛関係についてより不満を感じている (Elizur & Mintzer, 2001; Ridge & Feeney, 1998)。さらに、人格特性、自信、性役割などのような心理的、社会的な要因をコントロールしても、この関連性は依然として有意である (Carnelley, Pietromonaco, & Jaffe, 1994; Jones & Cunningham, 1996; Nofhle & Shaver, 2006; Shaver & Brennan, 1992; Whisman & Allan, 1996)。

また、不安定型愛着行動の特徴がある人の場合には、恋愛関係を持続する時期がより短く

(Hazan & Shaver, 1987), 離婚率がより高い(Birnbaum, Orr, Mikulincer, & Florian, 1997; Doherty, Hatfield, Thompson, & Choo, 1994; Feeney & Noller, 1990)。さらにこの問題についての縦断研究の結果においても同じ結論が得られた。すなわち, 不安定型愛着行動の特徴がある人は恋愛関係における安定性や持続性が崩れやすい (Duemmler & Kobak, 2001; Kirkpatrick & Hazan, 1994; Shaver & Brennan, 1992)。

Feeney(1996)は恋愛関係における依存感と独立感について研究するため, 調査対象者の恋愛の感想に対して内容分析を行った。その結果, 愛着軽視型の人には恋愛関係における独立性を強調するのに対して, とらわれ型の人には依存性を重視している。それとは対照的に, 安定型の人には依存性と独立性との間のバランスを慎重に取ることが非常に重要だと指摘した。さらに, Treboux, Crowell, & Waters (2004) は恋愛相手に対する関心の程度について検討した。その結果, 不安定型の人には相手への関心の程度が低かったが, 安定型の人にはこの現象はみられなかった。

また, 青年の愛着行動と友人関係との間の関連性を検討した研究もある。安定型愛着行動の特徴の人にはより仲間を信頼し, 自我を開放して積極的に相互作用を進める(Furman, Simon, Shaffe, & Bouchey, 2002; Grabill & Kerns, 2000; Mayselless, 1993)。Black & McCartney (1997) は実験室に仲間との交流と協力場面を作って人間関係の円滑さを観察した。その結果, 二人の仲間がみな安定型愛着行動の特徴を持つ場合には人間関係が円滑に進むのに対して, 二人のうち一人が不安定型愛着行動の特徴の人がいると人間関係の円滑さが低下する。

これらの研究結果をまとめると, 不安定型愛着行動の特徴は親密関係の達成を妨げ, 不安や回避が高いほど親密性が低いと推測される。すなわち, 不安も回避も親密性との間に負の相関があると考えられる (仮説1)。

ところが, Erikson(1968)は他人と本物の親密関係を結ぶことはアイデンティティの確立の結果であり, 親密性を獲得するためにはまずアイデンティティを確立しなければならない

と指摘した。したがって、青年期の愛着を通して自分のアイデンティティを他者からの評価によって定義付け、補強する「アイデンティティのための恋愛」(大野, 1995)という現象も起こる。もしこのような愛着に失敗すると、「自分自身を孤立させ、非常に規格化された形式的な人間関係しか見出さないこととなる」(Erikson, 1959, 1980, p.120)。つまり他人を信頼し、不安感が低く、自らが人に接近することができるような安定した愛着行動の特徴はアイデンティティの達成を促進するとともに、アイデンティティ達成の程度が高いほど、自分自身を信じて他人と本物の「かかわりあい」を結ぶこともできる。そこで青年期の愛着行動における不安と回避は、アイデンティティ達成の程度との間に負の相関があると考えられる(仮説2)。

さらに、Davila & Bradbury (2001) は4年間にわたって172組の新婚夫婦に対して縦断研究を行った。その結果、調査参加者の結婚前の愛着行動の特徴が結婚後の生活満足感、不愉快感や離婚可能性などを予測できることが示された。しかもこの結果は他の縦断研究で得られた結論と一致している(Cobb, Davila, J., & Bradbury, 2001; Feeney, Noller, & Callan, 1994; Klohnen & Bera, 1998)。これらの縦断研究は、成人愛着行動の特徴から成人期の親密関係の形成と維持に影響を与えることを示した。ところが、Collins & Read(1990)によると、カップルにおいてとらわれ型の女性と愛着軽視型の男性がいれば、男性の方は恋愛関係に対してより多くの不満感を抱く。Kirkpatrick & Davis (1994)の縦断研究においても、とらわれ型女性の恋愛相手と愛着軽視型男性の恋愛相手は、恋愛関係についてよりネガティブに評価することが示され、同様の結果はSimpson (1990) の研究においても明らかにされている。

これらの研究結果から、女性の不安と男性の回避という愛着行動の特徴は、親密関係に強く影響を及ぼすことが推測される。つまり青年期の愛着行動の特徴と成人期の親密性の因果モデルにおいて、女性の場合には不安が回避より親密性に影響するのに対して、男性の場合には回避が不安より親密性に影響を与えると考えられる(仮説3)。

第2節 方 法

調査参加者

首都圏4年制私立大学の大学生229名のうち、質問項目「あなたは、過去又は現在において恋愛経験があるか？」に対して「ある」と答えた男性64名(平均年齢20.02歳, $SD=1.09$)及び女性108名(平均年齢19.82歳, $SD=1.24$)を分析対象とした(性別不詳の1名は分析から除外した)。

調査内容

ECR-R (Revised Experiences in Close Relationships) 尺度日本語版 この尺度は英語版 (Fraley, Waller, & Brennan, 2000) から、英語に堪能な心理学専攻大学院生3人と青年心理学専門の研究科教員1名によって共同で翻訳したものである。英語版尺度は高い信頼性と妥当性があることが既に実証された (Fraley, Waller & Brennan, 2000; Sibely, Fischer & Liu, 2005)。本尺度は「不安」と「回避」の2つの下位尺度で構成されている。「不安」下位尺度は18項目(例えば、「彼/彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる」)、「回避」下位尺度は18項目(例えば、「彼・彼女は私が怒っているときにだけ、私に関心を向けるようにみえる」)であり、7段階評定によって回答を求める。得点が高ければ不安あるいは回避の傾向が高いことを示している。

アイデンティティ達成・親密性尺度 本尺度はS-ESDS質問紙(三好ほか, 2003)からアイデンティティの達成と親密性に応じた項目を抽出して再構成したものである。S-ESDS質問紙はOchse & Plug (1986)がEriksonの漸成発達理論に基づいて作成した英語版質問紙の日本語短縮版で、信頼性、妥当性ともに高い質問紙である。本尺度は、アイデンティティの達成を測定する7項目(例えば、「自分の人生において、すべきことがはっきりわかっている」)と、親密性を測定する7項目(例えば、「私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる」)の合計14項目からなっており、4段階評定によって回答を求める。得点が高ければアイデンティティの達成あるいは親密性が高いことを示している。

手続き

2008年5月～6月にかけて大学において授業時間を利用して質問紙調査を実施した。

統計パッケージ

以下の分析に、SPSS15.0 for Windows と Amos18.0 を用いた。

第3節 結 果

ECR-R 尺度の信頼性と構成概念妥当性

ECR-R 尺度の信頼係数を算出した結果、「不安」尺度は $\alpha=.86$ 、「回避」尺度は $\alpha=.86$ と高い値が得られた。主因子法の因子分析を行い (Table 4-1), 因子負荷量が.40 に満たない項目は削除した。その結果, プロマックス回転後の「不安」因子における 14 項目の因子負荷量は.73～.41 であり, 「回避」因子における 13 項目の因子負荷量は.72～.43 となった。さらに, ECR-R 尺度の構成概念妥当性について検討を加えるため, 確認的因子分析を行い, モデル適合度は満足できるものであった ($\chi^2(8, N=172)=7.38, p >.05; GFI=.98, CFI=.97, RMSEA=.001$)。なお, 因子間相関係数は $r=.17$ だった。これらの分析結果から, ECR-R 尺度は適度な信頼性と妥当性を持つことが示された。

アイデンティティ達成・親密性尺度の信頼性と弁別的妥当性

アイデンティティの達成を測定する 7 項目の信頼性係数は $\alpha=.70$, 親密性を測定する 7 項目の信頼係数は $\alpha=.75$ と適当な値が得られた。主成分分析の結果, 「アイデンティティ達成」下位尺度の各項目の主成分得点は.71～.32 であり, 「親密性」下位尺度の各項目の因子負荷量は.75～.50 であった (Table 4-2)。これらの分析結果によって本尺度の信頼性と弁別的妥当性が示された。

基本統計量

ECR-R 尺度とアイデンティティ達成・親密性尺度の下位尺度の平均値, 標準偏差を算出した (Table 4-3)。 t 検定の結果, 各下位尺度において男女の間に有意な差異はみられなかった。

Table 4-1 ECR-R 尺度の各項目の因子負荷量

項目内容	因子負荷量	共通性
「不安」因子 寄与率=19.60%		
私は彼/彼女が私といっしょに居(い)たくないのではないかとよく心配になる。	.75	.58
彼/彼女に自分の愛情を表しても、相手が同じように私を好きと思ってはくれないかもしれないと思う。	.72	.40
私は、彼/彼女が私のことを実際には愛していないのではないかとよく心配する。	.71	.53
彼/彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる。	.70	.50
私が彼/彼女の事を考えているほど、彼/彼女が私の事を考えていないような気がする。	.70	.48
彼/彼女と離れていると、私は彼/彼女が誰か他の人に関心をもつようになるかもしれないと心配する。	.60	.40
彼/彼女が原因で私は疑い深くなってしまう。	.53	.30
私は彼/彼女に捨てられることをほとんど心配しない。R	.51	.29
私は自分が他人にかなわないのではないかと心配する。	.49	.34
彼/彼女は私が望むほどは親密になりたくないようだ。	.46	.32
しばしば、私が想っている程強く、彼/彼女が私のことを好きでいて欲しいと思う。	.45	.24
一旦彼/彼女が私の本当のことを分かってしまうと、私のことを好きではなくなるのではないと思う。	.44	.26
私は彼/彼女と別れることをめったに心配しない。R	.41	.21
私が必要とする愛情と支え(サポート)を彼/彼女から得られないことは私を苛立たせる。	.40	.18
私は自分の人間関係でとても悩んでいる。	.37	.17
彼/彼女は私が怒っているときにだけ、私に関心に向けてるようにみえる。	.32	.18
「回避」因子 寄与率=13.65%		
とても困っている時彼/彼女に頼ることは私にとって助けになる。R	.70	.50
彼/彼女に頼ることは心地よい。R	.70	.51
私は彼/彼女に対して心を開くことを心地よく思わない。	.65	.45
私は彼/彼女と色々な事を話し合う。R	.65	.49
私はどんな事でも彼/彼女に話す。R	.59	.39
私は彼/彼女に頼ることができない。	.58	.41
私にとって彼/彼女に頼ることは気安いことだと思う。R	.58	.27
私は、普段から彼/彼女と私の悩み事と関心事についてよく話し合う。R	.56	.41
彼/彼女と親密になることは私にとってとても心地よい。R	.55	.34
私は彼/彼女とあまりにも親密になりたくない。	.55	.34
彼/彼女は、私のことや私の必要としていることを本当に理解している。R	.48	.34
彼/彼女がすごく近づこうとすると気詰まりになる。	.45	.24
自分のプライベートな考えや感情を彼/彼女と共有できると安心だ。R	.43	.28
彼/彼女に近づくことは、私にとって割と気安いことだ。R	.35	.25
彼/彼女と親密になることは私にとって難しいことではない。R	.33	.35
私は自分が心の底でどのように感じているかを彼氏/彼女に見せたくない。	.32	.19

注. R 印がある項目は逆転項目。

Table 4-2 アイデンティティ達成・親密性尺度における下位尺度の主成分分析の結果

項目内容	因子負荷量	共通性
アイデンティティ達成		
私は、のけ者にされているように感じる。R	.71	.50
私は、私であることに誇りを感じている。	.68	.47
人生に望むものが定まらない。R	.68	.46
私のことを人がどう思っているか、よくわからない。R	.68	.46
私って本当はどんな人間なのかわからない。R	.59	.35
私は、自分に合った生き方をしていると思う。	.46	.21
私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。R	.32	.11
親密性		
私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。	.75	.56
誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。R	.72	.52
本当の私のことを理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。R	.67	.49
素で（飾らないで）付き合える相手がいる。	.67	.45
私はこの世の中で、ひとりぼっちのように感じる。R	.61	.37
私は人とプライベートなことを話すことがある。	.50	.25
人に自分のことをさらけ出すと、「不安」になることがある。R	.50	.25

注. R 印がある項目は逆転項目。

Table 4-3 アイデンティティ達成・親密性尺度の基本記述統計量

	男性 (N=64)		女性 (N=108)		t 値
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	
ECR-R					
「不安」	72.89	(17.04)	74.62	(15.27)	0.74 <i>n.s.</i>
「回避」	60.22	(13.79)	60.08	(16.33)	0.07 <i>n.s.</i>
S-ESDS					
アイデンティティ達成	17.45	(3.83)	17.58	(3.76)	0.24 <i>n.s.</i>
親密性	21.04	(4.21)	21.46	(4.04)	0.87 <i>n.s.</i>

ECR-R 尺度とアイデンティティ達成・親密性尺度との相関

青年の愛着行動の特徴と漸成発達のプロセスとの関係について検討するため、ECR-R 尺度における「不安」と「回避」の下位尺度とアイデンティティ達成・親密性尺度における「アイ

デンティティ達成」, 「親密性」との相関係数を男女別に算出した (Table 4-4)。男性の場合, 「親密性」は「不安」との間に $r = -.51, p < .01$, 「回避」との間に $r = -.45, p < .01$ という有意な相関があった。一方女性の場合, 「親密性」と「不安」との相関が $r = -.37, p < .01$ であり, 男性の値に近かったが, 「回避」との相関が $r = -.27, p < .01$ であり男性より低かった。しかし男女とも「不安」と「回避」は「親密性」との間に有意な負の相関を示し仮説1が支持された。また, 「アイデンティティ達成」と青年の愛着行動の特徴との関連について, 男性の場合, 「アイデンティティ達成」と「不安」との相関は $r = -.57, p < .01$, 「回避」との相関は $r = -.53, p < .01$ だった。それに対して女性の場合, 「アイデンティティ達成」と「不安」との相関は $r = -.52, p < .01$, 「回避」との相関は $r = -.37, p < .01$ だった。したがって, 男女ともに「アイデンティティ達成」と「不安」, 「回避」との間には負の相関があり, 仮説2が支持された。

ちなみに, 男女いずれの場合にも, 「アイデンティティ達成」と「親密性」の間に有意な正の相関を示している (男性 $r = .60, p < .01$; 女性 $r = .70, p < .01$)。この結果はアイデンティティを達成することにより, その次の段階にある親密性の形成が促進されるという漸成発達理論を支持するものである。

Table 4-4 ECR-R 尺度とアイデンティティ達成・親密性尺度との相関係数 (男女別)

	1	2	3	4
1. 「不安」		.31**	-.52**	-.37**
2. 「回避」	.16		-.37**	-.27**
3. アイデンティティ達成	-.57**	-.53**		.70**
4. 親密性	-.51**	-.45**	.60**	

注. 行列上三角部は女性(N=108)の結果, 下三角部は男性(N=64)の結果。

* $p < .05$, ** $p < .01$

さらに, 青年期の愛着行動の特徴と親密性との関係をより深く検討するために, 因果モデ

ルを構成し、共分散構造分析を行って男女別にモデルの適合度とパス係数を求めた(Figure 4-1)。ここでモデルを簡略化するために、Byrne(2001)に推薦された方法を採用した。すなわち、モデルにある ANX1 は「不安」因子における因子負荷量のもっとも高い変数ともっとも低い変数の得点を合計したものとなり、ANX2 は次に高い変数と低い変数の得点を合計したもの、ANX3 はその次に高い変数と低い変数の得点を合計したものである。それ以外の中程度の因子負荷量である変数は除外している。AVO1~3, INT1~3 も同様の処置を施した。

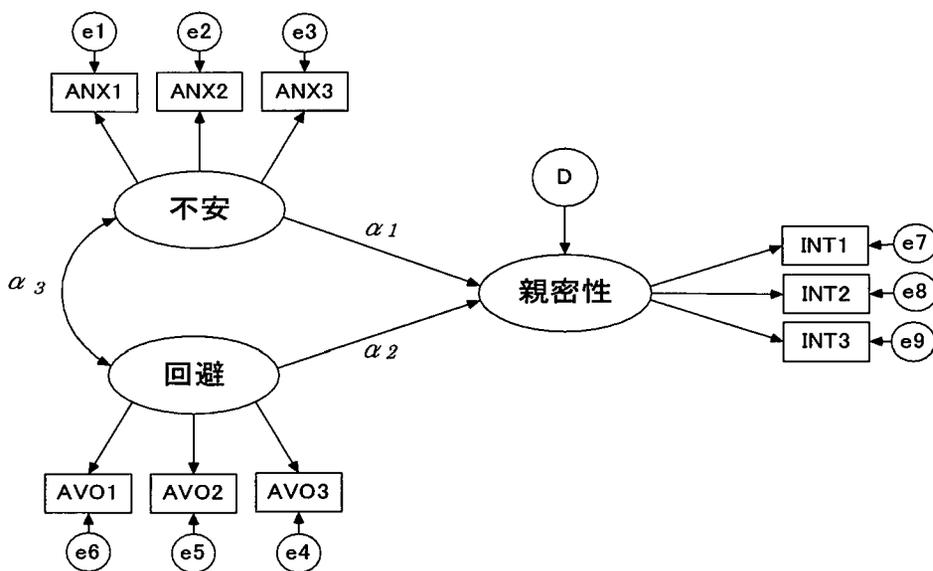


Figure 4-1 成人愛着行動特徴から親密性への因果モデル

分析結果は、男性の場合に、モデル適合度は $\chi^2(24, N=64)=20.09, p>.05; GFI=.94, CFI=1.00, RMSEA=.00$ である。「不安」から「親密性」へのパス係数が $-.26$ で有意ではないのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数は $-.70$ という高い値で有意だった。さらにパス係数 α_1 と α_2 の差を検定した結果は $-2.02 (p<.05)$ で、「回避」から「親密性」に与える影響は「不安」からのより強いことが分かった。一方女性の場合、モデル適合度は $\chi^2(24, N=64)=30.98, p>.05; GFI=.94, CFI=.96, RMSEA=.04$ である。「不安」から「親密性」へのパス係数が $-.40$ で有意だったのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数が $-.16$ で有意ではなくなった。さらにパス係数 α_1 と α_2 の差を検定した結果は $1.72 (p<.10)$ で、「不

安」から「親密性」に与える影響は「回避」からのより強いことが分かった(Table 4-5)。すなわち、これらの結果による男女両方とも仮説 3 を支持した。

Table 4-5 Figure 1 のモデル適合度と構成概念間のパス係数

		男性(N=64)	女性(N=108)
モデル適合度	χ^2	20.09	36.83
	<i>df</i>	24	24
	<i>p</i>	.69	.05
	<i>GFI</i>	.94	.94
	<i>CFI</i>	1.00	.96
	<i>RMSEA</i>	.00	.04
	構成概念間のパス係数	α_1	-.26
α_2		-.70**	-.16
α_3		.45*	.38*
α_1 と α_2 の差の検定値		-2.02*	1.72 [†]

注. (1) [†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

(2) 構成概念と観測変数の間のパス係数はすべて5%水準で有意である。

(3) パス係数は標準化されている値を用いた。

第4節 考察

本研究では、青年期における愛着行動の特徴と漸成発達理論における親密性の関係について検討した。まず、不安定な愛着行動の特徴は親密関係の達成を妨げ、不安や回避の傾向が高いほど親密性が低いと推測し、「不安も回避も親密性との間に負の相関がある」という仮説1を検討した。相関分析の結果により仮説1が支持された。男性の場合、「親密性」は「不安」との間に $r = -.51, p < .01$ 、「回避」との間に $r = -.45, p < .01$ の有意な相関があった。女性の場合、「親密性」は「不安」との間の相関が $r = -.52, p < .01$ であり、「回避」との相関が $r = -.27, p < .01$ だった。すなわち、男女ともに青年期の愛着行動において不安あるいは回避の傾向が強い人は漸成発達における親密性の発達も困難になることが明らかになった。

漸成発達理論によって親密性とは二つの側面から構成される。一つは他者との親密さであ

り、もう一つは自分自身との親密さである(Erikson, 1959, 1980)。前者は他人を信頼して接近するか、それとも他人の存在は自分にとって危険なものだと警戒して距離を置くかといった人間関係における態度や能力とかかわっており、外部指向の側面である。一方後者は、自分自身を信頼することができるか、自分は人に愛される価値があるのかといった親密関係の中で自我を失う恐れのないような自己指向の側面である。しかし、この二つの側面は相互に独立しているわけではない。対人関係を通して自我像を確立し、より自分を信ずるとともに、自信が高まるため、さらに他人と親密に付き合うことができるようになる。すなわちこの二つの側面が互いに相互作用することは、親密性を十分に達成させる不可欠な条件だと考えられる。

一方、成人愛着行動に関する先行研究の結果によると、回避型の方は冷たい態度をとり、不信感が高く、情緒的反応が少ないといった対人行動特徴がある(Guerrero, 1996; Le Poire, Shepard, & Duggan, 1999; Tucker & Anders, 1998)。不安型の方は自己評価が低く、一人で生活する能力に疑いを持ち自信がないため、相手に過度に依存したり、迎合したり、逆に相手をコントロールしたりする傾向がある(Bartholomew & Horowitz, 1991; Bookwala & Zdaniuk, 1998; Chen & Bradburg, 1999; Davila & Bradburg, 2001)。安定な愛着行動の特徴の方は他人に対する信頼感が高く(Collins & Read, 1990)、対人活動能力がより備わっている(Noller, 2005; Schachner, Shaver, & Mikulincer, 2005)。それゆえ、愛着行動における不安の傾向は、漸成発達における親密性の自己指向——自分自身との親密さの形成を妨げ、回避の傾向は親密性の外部指向——対人関係へネガティブな影響を及ぼすと考えられる。つまり本研究では、青年期の愛着行動における不安あるいは回避の傾向は、親密性の発達を妨げることを明らかにした。

次に、「青年期の愛着行動における不安と回避は、アイデンティティ達成の程度との間に負の相関がある」という仮説2について検討した。Table 4-4に示されたように、男性の場合には「アイデンティティ達成」と「不安」との間の相関は $r = -.57, p < .01$ 、「回避」との相関

は $r = -.53, p < .01$ であった。それに対して女性の場合、「アイデンティティ達成」と「不安」との間の相関は $r = -.52, p < .01$ 、「回避」との相関は $r = -.37, p < .01$ であった。男女いずれも愛着行動における「不安」と「回避」は、「アイデンティティ達成」の程度との間に有意な負の相関を示し、仮説 2 が支持された。

漸成発達理論によると、青年期における愛着はアイデンティティの感覚を確立させ、次の段階の親密性を達成するための一つの試みでもある。アイデンティティの感覚とは、要するに「自覚、自信、自尊心、責任感、使命感」である(大野, 2010)。ところが、これらの心理要素は愛着行動の特徴とも緊密に関連している。たとえば、安定型愛着行動の特徴を持つ人は自信が高く(Feeney & Noller, 1990; Kobak & Sceery, 1988; Lopez & Gormley, 2002)、自尊心も高い(Bylsma, Cozzarelli, & Summer, 1997; Collins, & Read, 1990; Feeney & Noller, 1990)。さらに人間関係において責任感が強い(Sörensen, Webster, & Roggman, 2002)。すなわち、アイデンティティの感覚を確立するとともに、青年期の愛着行動において、安定した行動の特徴がより多く現れることとなる。このような関連の原因については、漸成発達理論も成人愛着理論も、すべては人生の初期段階における信頼感の獲得が人間発達にとってもっとも重要な基礎であることを認めている。

Fonagy (2001) は信頼感の経験の由来、信頼感の失敗(不信感の形成)、心的表象の整合一貫性、母親の感受性と相互同期性から論証して、漸成発達理論と愛着理論とは理論上、最も近いものであることを指摘している。人生の初期段階で形成された信頼感や青年期とそれ以降においての人格発達にも影響を及ぼすと同時に、愛着行動における「内的作業モデル」の形成にも大きな要因として作用している。このため、信頼感を十分に獲得した人は青年期に至り、アイデンティティの確立が順調に進む。しかも信頼感の獲得過程によって得られた良い経験は、「内的作業モデル」に安定な愛着意識を植付け、成人期になると安定した愛着行動の特徴を持つようになる。

最後に「青年期の愛着行動の特徴と成人期の親密性達成の因果モデルにおいて、女性の場

合には不安が回避よりも親密性の達成に影響するのに対して、男性の場合には回避が不安よりも親密性の達成に影響を与える」という仮説を検討した。Table 4-5 の共分散構造分析の結果によると男性の場合は、「不安」から「親密性」へのパス係数 $\alpha_1 = -.26$ で有意ではないのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数 $\alpha_2 = -.70$ で有意であり、しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は -2.02 ($p < .05$) であった。一方女性の場合は、「不安」から「親密性」へのパス係数が $\alpha_1 = -.40$ で有意だったのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数が $\alpha_2 = -.16$ で有意ではなく、しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は 1.72 ($p < .10$) であった。これらの分析結果は仮説 3 を支持した。すなわち、男性の方は愛着行動における回避は親密性の達成に影響するのに対して、女性の方は逆に不安が親密性の達成により影響を与えていることが明らかになった。理由としては、まず女性は社会的性役割や経済生活における不平等が原因となり、男性に比べて感情的、心理的依存度が相対的に強い (Montgomery & Sorrell, 1998)。このため、依存してくる相手をふるか、自分が捨てられてしまうかのような恐れによって、不安を感じやすい傾向がある (Mikulincer & Shaver, 2007)。また女性は、人間関係の中で自我の感覚を確立するという特徴があるので、それを維持するために、人間関係に対して高い敏感性が要求される (Surrey, 1991)。このような高い敏感性の形成によって、女性は青年期の愛着において不安も感じやすい。これらの不安こそ女性の親密性の達成を妨げるのではないだろうか。

一方男性の場合には、「理性」、「独立」のような社会的性役割が要求され、感情に左右されないことが求められるため、親密関係においても相対的に独立して、相手から親密を求められることを回避する。この傾向によって親密性の達成にネガティブな影響を及ぼすと考えられる。さらに男性の場合は、他者からの心理的離乳と自我概念の形成とが結びついており、独立性を保持することが重要である (Hatfield, 1982)。しかし青年期の男性は独立性を求めるため、人間関係において距離を過度に設けたり、人の接近を拒絶したりして、結果的に親密性の対極である「孤立」に偏る可能性もあるだろう。

本研究では青年期の愛着行動の特徴と漸成発達における親密性の達成に関して検討した。しかし、今後検討すべき問題が残されている。一つは、本研究においてアイデンティティ達成状況と青年期の愛着行動の特徴との間に相関関係があることを明らかにしたが、Eriksonによって強調された因果関係についてはまだ検討されていない。もう一つは青年期の愛着行動が親密性の達成に影響するメカニズムを明確にするため、今後はこの点に関して縦断研究により、さらに深く検討する必要がある。

第5章 青年期における恋愛相手の選択基準と漸成発達 各主題の形成状況との関係

本論文の第1章の第3節ですでに論じたように、アイデンティティの形成は青年期の行動や活動と関連する、あるいは影響することがある。しかし、これらのほとんどの先行研究の場合は、アイデンティティ・ステータス理論の視点からこの問題を検討した。もし漸成発達理論を導入すれば、このようなプロセスに対して、どんな新しい知見をもたらすのか。本章と次章はこの目的を持つ試みである。

本章では、青年期の最も代表的な行動様式—恋愛活動を典型例として、相手を選択する基準とアイデンティティとの関連性について検討する。

本章の内容は『立教大学心理学研究』の第51号（2009年, p.131~142）に掲載された内容に基づいて加筆したものである。

第1節 問題

恋愛は青年期に入った個体にとって重大な課題である。恋愛行動の第一歩——恋愛相手の選択 mate choice (以下「選択」と略称する)は恋愛関係の形成, 保持あるいは別れの前提条件と考えられる (Stenberg & Barnes, 1988)。選択の問題を巡って数多くの研究が行われ, 様々な観点もしくは理論が提出された。例えば, 社会心理学において身体的魅力 (Hatfield & Sprecher, 1986; 松井, 1985; 奥田, 1990; Walstere, Aronson, Abrahms, & Rottman 1966), 場所と地理上の接近性 (Festinger, Schachter, & Back, 1950) と相似性 (Simpson & Harris, 1994) は主な条件として強調されている。さらに近年に注目を浴びる進化心理学は選択について最も独自な見解——性淘汰の論説を主張している (Buss & Schmitt, 1993)。

一方, 選択に関する人格心理学における研究は Terman (1938) によって最初に発表された。Terman (1938) は恋愛と人格特性の関連について検討したが, それ以降様々な研究者によって 477 篇以上の論文が発表された (Cooper & Sheldon, 2002)。その中で, Rubin (1973) は性格上の「優しさ warmth」と「有能感 competence」がある人は, そうでない人より他人の好感を得やすいと指摘した。西平 (1981) は, 青年の恋愛に葛藤が生じやすい原因として嫉妬, 羞恥 激情, 固執, 悲哀, 感傷などを挙げている。また, 男女双方の性格上の相似性と相補性のどちらがより親密関係の達成を促すのかということについての論争が続いている (Byrne, 1971; Klohnen & Mendelsohn, 1998; Luo & Klohnen, 2005; Winch, 1958; Hinde, 1997 など)。

このように, 人格心理学の分野において各流派は恋愛あるいは選択活動について各自の理論的立場から検討してきた。その中で漸成発達理論はこの問題に対して次の 2 つの点で他の学説以上に貢献できる可能性を持っていると考えられる。

第 1 に, 漸成発達の各段階の発達主題の獲得状況と恋愛対象選択活動の形成要因との関連である。最初に明確にアイデンティティ及び漸成発達という概念を提出した著作『幼児期と社会』(Erikson, 1950, 1963) で人間の行動を正しく理解するため, その人の生物学的特徴,

その人独自の心理的欲求・関心や心理的防衛，その人が住む文化環境といった相互影響し合う3つの要素から，全体的に把握しなければならないと Erikson は強調した。

一方，青年期における恋愛あるいは選択活動も，一定の時期（思春期）に入ってから生理的变化とともに始まる活動である（Stenberg & Barroes, 1988）。それによって異性に対する恋が芽生える。同時に他人と交際して孤独感を排除し，一体になる心理的欲求がある（Fromm, 1956）。そして，繁殖するために独立して新たな家庭単位を作ることに対する社会的要求も同時に存在することである。

以上のことから，Erikson の漸成発達理論から恋愛あるいは選択活動を分析すればより全面的に説得力のある見解が得られると考えられる。

第2に，漸成発達理論は親密性の本質的な心理的特徴についての考察などより深く検討していると考えられる。Erikson（1968）は漸成発達に関する8段階のライフ・サイクル図式を提示し，生涯のそれぞれの段階で解決を要する重要な発達主題を示している。特に第6段階「親密性 対 孤立」では，専ら恋愛のことについて焦点をあてて論証した。さらにその時期だけではなく，親密性の形成経緯について最初の段階から全般的に説明した。他の人格理論が恋愛関係における二人の性格の異同しか論じないことに比べ，漸成発達理論はもっと深く検討していると考えられる。

アイデンティティ発達と恋愛活動との関連について若干の研究が既に行なわれてきた。Tesch & Whitbourne（1982）は48名の男性と44名の女性を調査対象として，職業，宗教，政治観点と性役割におけるアイデンティティの形成状況と親密性の達成状態を測定した。また，両者の相関と性差を分析した。結果はEriksonの理論をほとんど支持したが，職業アイデンティティの性差はみられなかった。つまりアイデンティティの形成がより発達している人ほど親密性の達成状態がよいのである。Sanderson & Cantor（1995）は2つの研究を通して青年男女の交際する目的（親密関係を求める目的と自信・自我探求の目的）とアイデンティティの形成とが関連することをあきらかにした。結果によるとアイデンティティ達成型

あるいはフォークロージャー型の人よりは親密関係（親密性）を求めるために交際する。それに対してアイデンティティ拡散型あるいはモラトリアム型の人よりは自信・自我探求（アイデンティティ）のために異性と交際する。また、前者は付き合う相手の人数が少なく関係が安定しており、後者は相手の人数が多くてパターンも多様であり、関係も不安定である。この結果も Erikson の理論と一致することが示された。Zimmer-Gembeck & Petherick (2006) は、242 人を調査して恋愛関係への満足度、デートの目的と職業アイデンティティ、性役割アイデンティティとの相関を検討した。結果は Sanderson たちの研究結果と同じく Erikson の理論を支持した。

さらに大野 (1995) は十数年間に収集した受講生のレポートを質的研究手法で Erikson 理論を用いた分析を行い、「アイデンティティのための恋愛」という知見を提出した。例えば、恋愛関係における「不安」と「回避」の傾向という現象に対して、「自分のアイデンティティの同一性と連続性を失うことへの恐れ」であると洞察した。

上述したことを統合して考察すると、恋愛行動はアイデンティティ発達の状況を反映していると考えられる。

一方、人間は社会的生物として覚醒した時間の殆どは他者と交際しているうちに過ごすものである。誰でも自分自身の中に様々な人々との様々な関係を抱えている (Mead, 1934)。それゆえ、個人の価値観、行動様態もしくはアイデンティティはみなその人を取り巻く社会的文脈の産物である。しかもある特有な社会文化の文脈において、その文脈にいる成員みんなに認められた選択基準が存在していると考えられる。この問題についてもいくつかの研究がある (Fletcher & Simpson, 1999; Regan, 1998 など)。Fletcher と Simpson の研究では、恋愛基準とその柔軟性が関係性の質にどのように関連しているかを検討した。個人が、暖かさ／頼もしさ、活発さ／魅力、地位／器量の 3 つの次元において、自分自身と理想の恋愛相手を評定した。その後、各次元で、彼らの理想がどのくらい柔軟か、現在の恋愛相手がどのくらい理想と一致しているかを評定した。各次元で自分を高く評定した人は、柔軟性に欠く

理想基準をもち、パートナーが理想に合致するほど、関係性の質を高く評定した。Howard, Philip, & Pepper (1987) の研究によって、女性は恋愛相手の選択活動を通して自分の社会的パワーの欠如を補うために、社会能力、経済力を重視している。一方、男性は自分にいい生活環境、食事を提供してもらうため、相手の女性の家事技能を重要な条件として考えていることが示された。

しかしながら、人が社会文化での役割を果たす上で恋愛に対する共通した選択基準の枠組みと同時に、恋愛相手を選択する際の個人的な選択傾向が存在すると考えられる。これは個人の生育環境、同化された価値観、人格特徴などと緊密なかかわりがある。例えば Campbell, Foster, & Finkel (2002) は自己愛の傾向がある人の恋愛活動の特徴を分析した。5つの研究から自己愛の人のラブスタイルを明らかにした。結果に示されたように自己愛の傾向がある人はルダスタイプと有意な相関があって恋愛をゲームのように楽しむことと捕らえ、相手に責任感が薄くて忠実感が少ない。Zayas & Shoda (2007) は65人の女子大学生と93人の男子大学生を研究対象として、親密関係において過去に心理的虐待を受けた経験と恋愛相手を再選択する際の選択傾向を研究した。予想に反して被虐待経験のある女性はまた心理的虐待の傾向の男性を選んだ。Simpson & Gangestad (1992) は252名の大学生を調査して社会—性的オリエンテーション (Sociosexual orientation) と選択傾向との関係を検討した。結果は社会—性的オリエンテーションにおいて要求が厳しい人が人格／養育能力のような選択基準を重視して、そうではない人が身体的魅力／社会知名度のような選択基準を大事にしていることを明らかにした。更に選択基準は選択する時の状況によっても変化が起こる。Regan (1998) は32名の男子大学生と40名の女子大学生を調査対象として選択基準と選択時の状況との関係を検討した。結果として男性も女性も偶然に会ったパートナーに対しては身体的、外的な要求が高いが、一方、結婚するつもりがあるパートナーには人格的なものをもっと要求した。また伝記研究によって、同じような生育環境においてもその個人や状況により、青年期および成人期における恋愛に関する行動や表現に大きな違いが現れることが明らかにさ

れた(三好, 2004, 2006; 茂垣, 2006; 西平, 1981, 1983, 1990, 1996, 2004; 大野, 1995, 1996; 内島, 2006)。

先述した漸成発達理論について, Erikson (1968) はアイデンティティの形成そのものは一生涯続くものだが, その基本的な確立は子ども時代の最終段階である青年期に達成されるべき心理社会的な主題だとした。その最大の契機となるのが思春期において身体内部で必然的に生じる第二性徴による身体的変化と, 性衝動への気付きであり, それが自己の身体イメージを不安定にし, 自己の内的な連続性や不変性をも脅かし, 自己意識の混乱や動揺を引き起こすことになる。これが「自分で自分が分からない」というようなアイデンティティ拡散の危機をもたらす。この危機の中で, 自分自身を見つめ自問自答しながら, 「自分は何者か」「自分はこれからどうなるのか」といった問いに対して自分なりの解答を見つけようと模索し, 悪戦苦闘する。つまり, 真の自分を見出し, 自分の生き方を見つけるという, 心理社会的な課題に関わるさまざまな葛藤を経験しながらアイデンティティを確立することになる。この確立の過程中, 同時に起きる恋愛活動においてもその確立の程度の差異が反映されると思われる。つまり選択傾向における個人差を通して, 漸成発達の各発達主題の差異を読み取ることができるようである。したがって本研究では, 選択傾向と漸成発達の各発達主題の形成状況との関連について検討する。

本研究の目的は, 第 1, 日本の男女青年の恋愛相手の選択基準を明らかにする。第 2, 選択基準の中に潜在している構成因子を解析して, 選択傾向を見出す。第 3, 選択の傾向が違う青年の漸成発達の各段階における発達主題の形成状態を比較して, 差異を検討することである。

第 2 節 方 法

第 1 回目の調査

首都圏 4 年制大学大学生 104 名。男性 22 名, 平均年齢 20.21 歳 ($SD=1.10$); 女性 82 名,

平均年齢 19.97 歳 ($SD=0.96$)。

質問「あなたは、恋愛相手を選択する場合に、どのような特徴を持っている相手がよいと思いますか？」に対して、自由記述で回答を求めた。

第 2 回目の調査

首都圏 4 年制大学大学生 132 名。男性 71 名（その中の 3 名の質問紙が無効になった）、平均年齢 20.29 歳 ($SD=0.89$)；女性 61 名，平均年齢 20.18 歳 ($SD=1.20$)。

第 1 回目の調査結果から作成した「恋愛相手の選択する選好度」質問紙（二者択一式）と ESDS (Erikson and Social-Desirability Scale) の日本語短縮版 S-ESDS (三好ほか, 2003) を共に実施した。

「恋愛相手選択する選好度」質問紙とは、恋愛相手を選択する時に 2 つの項目の中で、より重視している項目を選ぶというものであり、対象者の選択基準の選好度を調べるための質問紙である。質問紙の作成手順としてはまず、第 1 回目の調査結果から整理して恋愛相手の選択基準として挙げられた頻度の多い順によって、「恋愛相手の選択基準」の順位を決める (Table5-1 参照)。その順位の中から 2 項目ずつ抽出し、A と B の 2 つの選択肢として並べた (岡太, 今泉, 1994)。本研究の第 1 回目の調査結果からは 10 位までの選択基準が得られたので、「恋愛相手の選択する選好度」質問紙は 45 の組み合わせによって構成されている。なお教示は「あなたが恋愛相手を選択する場合、並んでいる A と B の項目のうちより重要だと思う項目に○印をつけてください。」とした。

S-ESDS (三好ほか, 2003) とは、Ochse & Plug (1986) が Erikson の漸成発達理論を基として作成した英語版質問紙の日本語短縮版である。S-ESDS は漸成発達理論の各段階につき 7 項目、全 49 項目で構成されており、信頼性、妥当性ともに高い質問紙である。

本調査は、2006 年 9 月～11 月にかけて大学において授業時間を利用して質問紙調査を実施した。

統計分析方法

多次元尺度構成法（MDS：Multi Dimensional Scaling）を用いた。

第3節 結果

選択基準

第1回目の調査（自由記述）によって得られたデータを男女に分けて分析を行った。なお、分析は心理学専攻の院生3名によって行われた。青年男性，女性それぞれにおいて，恋愛相手の選択基準として挙げられた頻度の多い順に，10位までをTable 5-1に示した。

Table 5-1 恋愛相手の選択基準10位までの結果

	男 性	女 性
1	顔がかawaii (10)	背が自分より高い (40)
2	性格が優しい (8)	優しい (35)
3	背が自分より低い (7)	思いやりがある (29)
4	笑うと魅力的な人 (6)	スポーツができる (27)
5	明るい性格 (6)	価値観が同じ (26)
6	精神的自立している (5)	顔がかっこいい (23)
7	共通の興味がある人 (5)	友達も家族も大切にしている人 (21)
8	話して面白い，楽しい (5)	頭がいい，賢い (20)
9	一緒にリラックスできること (5)	何か一生懸命頑張っている (17)
10	家事ができる (5)	誠実，真面目な人 (17)

注.()内は上げられた頻度。

結果から見ると，今回調査の対象者は男女いずれも外観のことを非常に重要な選択基準としていることが分かった。また，性格のやさしさも重要な選択基準だと男女両方において認められた。松井・山本（1985）は，80年代の男性大学生の選択基準をまとめて主に4つの因子を示した。1，家庭的印象；2，外見的美しさ；3，活発さ；4，しっかりさである。本研究の結果と比べると，外見的，家庭的という選択基準がまだ重視されており，この2つの選択基準の安定性が示された。これは社会文化上の固有観念だと考えられる。しかし，今回の調査結果によって男性の選択基準において，「笑顔が魅力的な人（4位）」，「話して楽し

い(8位)」、「一緒にいてリラックスできること(9位)」のような「楽しさ」と見られる選択基準も目立っている。現代男性青年は二人が一緒にいる時の雰囲気も重視しており、恋愛相手と一緒にいることで自分が楽しいということも大切だと判断していることが明らかになった。

多次元尺度構成法による分析結果

多次元尺度構成法を利用して、第2回目調査「恋愛相手の選択する選好度」質問紙で収集したデータを分析した。次元空間を決める要素：布置の解釈可能性；ストレスの大きさ；何種類かの初期布置をもちいるなど(岡太, 今泉, 1994), 総合的に検討し, 特に VAF 比(平均)について, 男性の場合には, VAF 比は第1次元で 0.873, 第2次元では 0.951 まで上昇した後, 第3次元でも 0.967 とほぼ改善が見られないため, 第2次元までを取り上げた。女性の場合には, VAF 比は第1次元で 0.885, 第2次元では 0.974 まで上昇した後, 第3次元を導入すると 0.982 となってほぼ改善が見られないため, 第2次元までを取り上げた。その結果, 男性と女性の選択基準の布置空間を2次元空間とした。選択基準の2次元空間布置は Figure 5-1 (男性) と Figure 5-2 (女性) に示した。Figure 5-1 の男性の選択基準の布置では, 次元1(水平軸)の左端は「性格が優しい」(第2位), 「話していて面白い」(第8位), 「一緒にいてリラックスできる」(第9位)があるので, 恋愛相手と一緒に楽しむという共有, 平等な感じが強いだろう。右端は「背が自分より低い」(第3位), 「家事ができる」(第10位)があるので, 伝統的な男女役割を読み取ることができるだろう。それ故, 次元1は「現代的な女性役割 対 伝統的な女性役割」と命名した。一方, 次元2(垂直軸)の上端は「精神的に自立している」(第6位)が最上端にあるので, 恋愛相手のしっかりさが要求されることに対して, 下端は「顔が可愛い」(第1位)が最下端にあるので, 恋愛相手の外見的楽しさを重視していると考えられる。そのため次元2は「楽しさ 対 しっかりさ」と名をつけた。

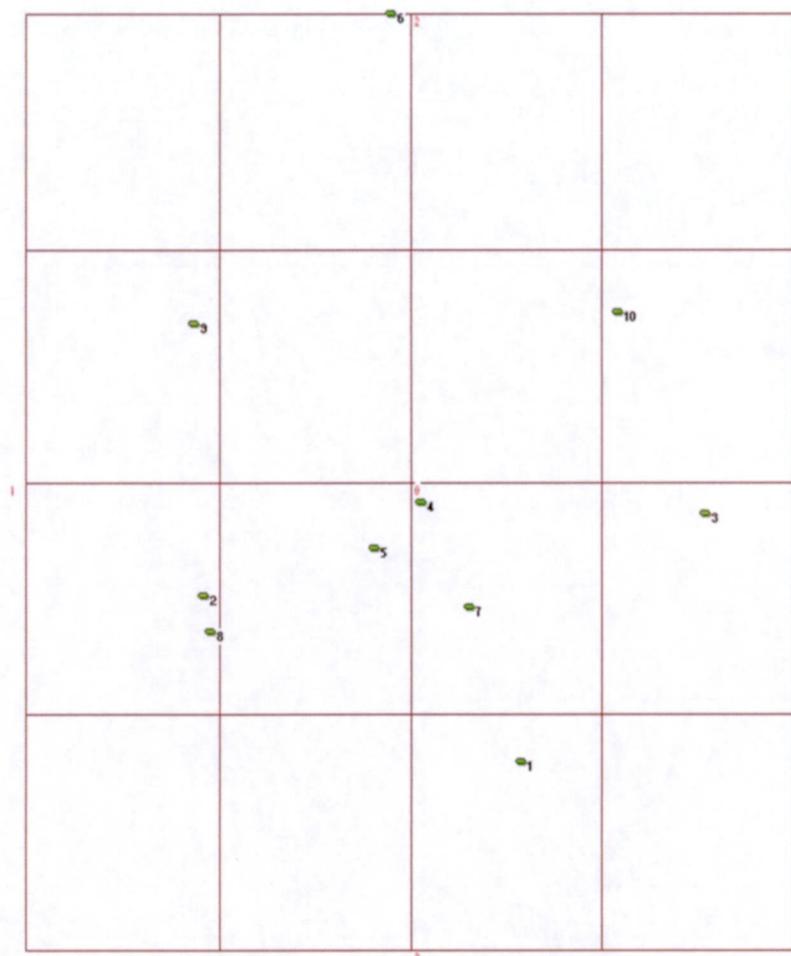


Figure 5-1 選択基準の2次元空間布置 (男性)

注：男性選択基準

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. 顔が可愛い | 6. 精神的に自立している |
| 2. 性格が優しい | 7. 共通の趣味がある人 |
| 3. 背が自分より低い | 8. 話していて面白い, 楽しい |
| 4. 笑うと魅力的な人 | 9. 一緒にいてリラックスできること |
| 5. 明るい性格 | 10. 家事が出来る |

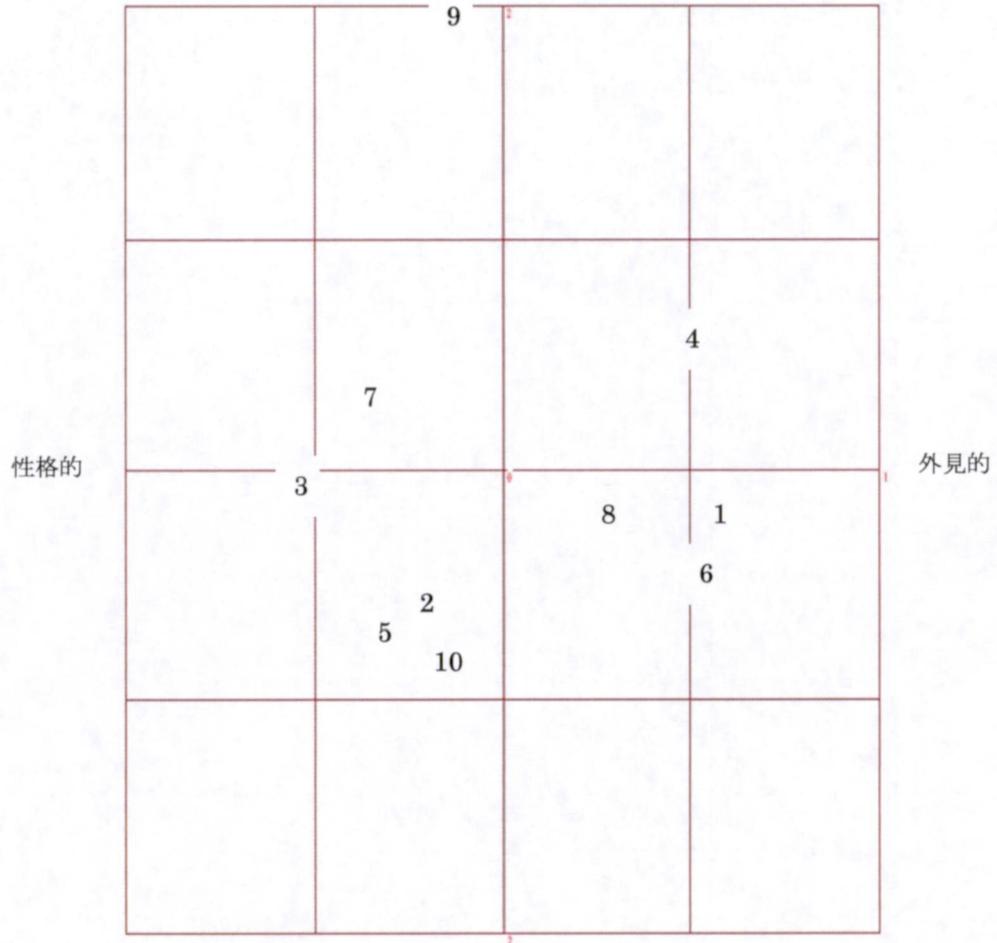


Figure 5-2 選択基準の2次元空間布置 (女性)

注：女性選択基準

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. 背が自分より高い | 6. 顔がかっこいい |
| 2. 優しい | 7. 友達も、家族も大切にしている人 |
| 3. 思いやりがある | 8. 頭がいい <賢い> |
| 4. スポーツが出来る | 9. 何か一生懸命頑張っている、努力家 |
| 5. 価値観が同じ | 10. 誠実、真面目な人 |

Figure 5-2 の女性の選択基準の布置では、次元 1（水平軸）の左端は「思いやりがある」（第 3 位）、「価値観が同じ」（第 5 位）、「友たちも家族も大切にする」（第 7 位）、「優しい」（第 2 位）があり、性格の優しさが要求されている。それに対して右端は「背が自分より高い」（第 1 位）、「スポーツができる」（第 4 位）があるので外見的、生得的な基準だと考えられる。そのため次元 1 は「性格的 対 外見的」と命名した。次元 2 では上端に「何か一生懸命頑張っている」（第 9 位）があるが、下端の方に「誠実、真面目な人」がある。上、下端の選択基準は殆ど同じであるので、この次元は因子構造における意味がないと推定できる。すなわち女性の選択基準は性格か外見かという 1 次元だと考えられる。しかし対象者の分布を分析しやすいように、次元 2 を除去しないで保留することにした。

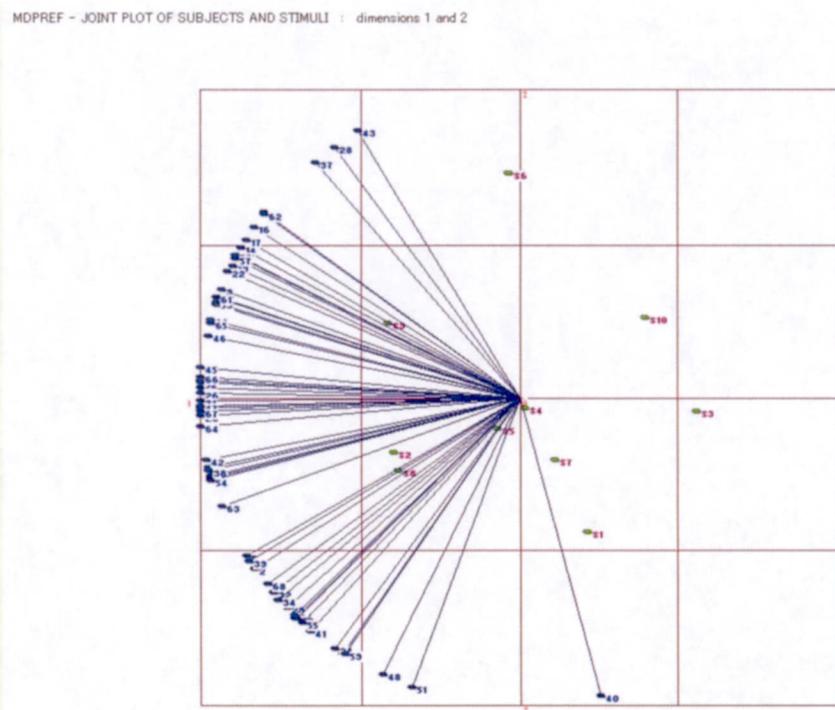


Figure 5-3 調査対象者の 2 次元空間における布置 (男性)

Figure 5-3 は男性の 2 次元（「現代的な女性役割 対 伝統的な女性役割」と「楽しさ 対 しっかりさ」）空間の分布である。Figure 5-3 に示したように、男性は次元 1 において左端

に集中している。すなわち今回の調査における男性対象者は、「伝統的女性役割」より「現代的女性役割」を選択する傾向が強かった。しかし次元2において差異がみられる。「楽しさ」より「しっかりさ」を重視するグループと、「しっかりさ」より「楽しさ」を大事にするグループの存在が明らかになった。

MDPREF - JOINT PLOT OF SUBJECTS AND STIMULI : dimensions 1 and 2

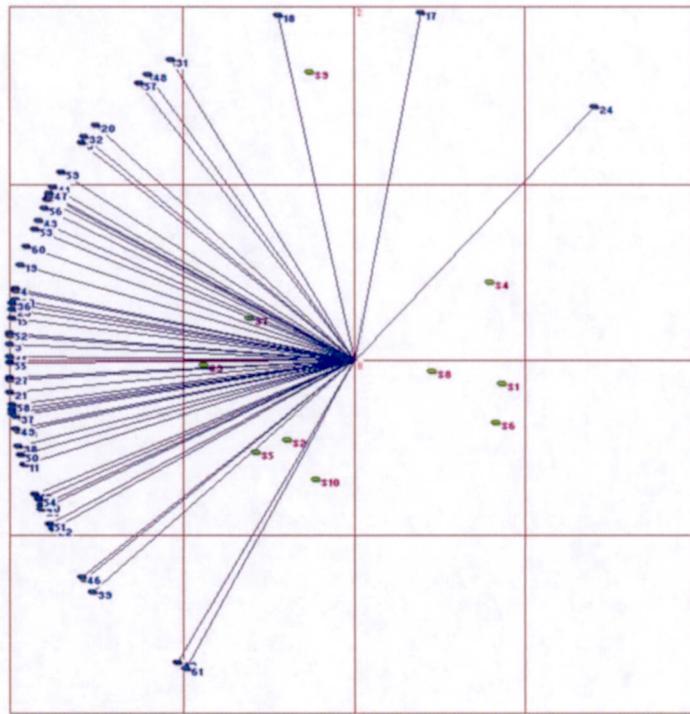


Figure 5-4 調査対象者の2次元空間における布置 (女性)

Figure 5-4 は女性の2次元空間の分布である。女性は次元1「性格的 対 外見的」においてみんな左端に集中している。即ち今回の調査における女性対象者は、恋愛相手を選択する際に「外見的」という基準より「性格的」な優しさや思いやりを重視する傾向が強かった。

漸成発達各段階得点の比較

選択基準において選好度が違うことに関する人格上の原因を探る為に、選択基準が違う調査対象者の間で漸成発達の各発達主題の得点を比較した。まず調査対象者を分類する。Figure

5-3の左上区域に分布している調査対象者、つまり「楽しさ」より「しっかりさ」をより重視している31名の男性はグループ1と命名して、左下区域に分布している調査対象者、つまり「楽しさ」をより大事にしている36名の男性は、グループ2に分類される。女性の場合も、上述の分け方と同じように、左上区域の調査対象者はグループ1と命名して、左下区域の調査対象者はグループ2と命名する。

Table 5-2 2つのグループのS-ESDS下位尺度得点のt検定結果(男性)

	グループ1 (N=30)		グループ2 (N=36)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第I段階: 基本的信頼感	19.58	3.03	17.28	3.57	2.82**
第II段階: 自律性	17.97	4.04	15.44	4.37	2.44*
第III段階: 主導性	19.58	3.26	18.81	3.32	0.96 n.s.
第IV段階: 生産性	19.29	3.67	16.94	3.46	2.69**
第V段階: アイデンティティ達成	19.13	4.08	16.31	3.44	3.07**
第VI段階: 親密性	19.52	2.38	19.03	2.46	0.82 n.s.
第VII段階: 生殖性	19.00	4.27	17.53	3.35	1.58 n.s.

注 * $p < .05$ ** $p < .01$

Table 5-3 2つのグループのS-ESDS下位尺度得点のt検定結果(女性)

	グループ1 (N=30)		グループ2 (N=36)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
第I段階: 基本的信頼感	19.33	3.04	19.03	4.51	0.30 n.s.
第II段階: 自律性	17.83	3.61	17.59	4.27	0.24 n.s.
第III段階: 主導性	18.47	3.64	18.66	3.75	-0.20 n.s.
第IV段階: 生産性	18.70	3.36	18.34	4.33	0.35 n.s.
第V段階: アイデンティティ達成	19.03	3.01	18.76	4.71	0.27 n.s.
第VI段階: 親密性	22.77	3.74	22.03	4.06	0.72 n.s.
第VII段階: 生殖性	19.07	3.67	19.41	4.07	-0.34 n.s.

Table 5-2は男性調査対象者の2グループの比較結果である。各段階の中で「基本的信頼感」、「自律性」、「生産性」とアイデンティティにおいて有意な差異が見られた。「主導性」、「親密性」と「生殖性」の段階には有意な差異が見られなかった。

Table 5-3 は女性調査対象者の 2 グループの S-ESDS 各段階得点の比較結果である。各段階において有意な差異は見られなかった。

第 4 節 考 察

本研究の結果から見ると、男性の方は女性より選択基準がより複雑なことが判明した。女性は「性格的 対 外見的」を主な選択基準として男性を選択するが、男性は「現代的女性役割 対 伝統的女性役割」と「楽しさ 対 しっかりさ」という 2 つの次元から女性を選択する。

この違いは男女青年の親密性における発達の違いが違ふ（「親密性」得点，女性，平均値=22.34， $SD=3.84$ ，男性，平均値=19.26， $SD=2.40$ $t=5.52$ ， $p<.01$ からだと解釈できる。Erikson (1968) はアイデンティティの男女性差に関して生理的な違いから心理的差異について、次のように述べた。「男性的空間は、高さや瓦解，急速な動きや交通整理というものによって支配されており，女性的空間は，開いたままかもしくは簡単なかきねをつけただけの，平和的で，すぐにでも侵入されやすいつくりの静態的な室内によって支配されていたのである。」(p.383-384)。女性はアイデンティティの発達と親密性の発達が同時平行的で両者のずれが少ない。男性はアイデンティティの発達後に親密性の発達に移行する。即ち，男性の親密性はアイデンティティの発達を前提にしており，アイデンティティがある程度，獲得されていないと親密性の発達が起こらないのに対して，女性の場合，アイデンティティと親密性の発達が同時平行して進むと考えられる。いくつかの実証的研究 (Blyth, Simmons, & Zakin, 1985; Gilligan, 1982; Miller, 1991; Noddings, 1983) は Erikson のこの理論を支持した。勿論，他の若干の研究 (Archer, 1982, 1989; Gilligan, 1979; Gilligan, Ward, Taylor & Bardige, 1988) は Erikson の見解と違って男女のアイデンティティ発達が同じであると指摘したが，男女の間に幾つかの面において発達の差異が存在することは否定していない。例えば，Archer (1989) はアイデンティティ発達の性差を検討するため，3 つの次元から男女のアイデンティティ発

達を比較した。その結果、男女間の有意な差異は無いが、女性が家庭の役割の形成、アイデンティティの達成において男性より早いことが明らかになった。また、他の領域の研究でも男女青年は異性との関係あるいは親密関係において違いが存在することを論証した (Camerena, Sargiani, & Petersen, 1990; Sharabany, Gershoni, & Hofman, 1981; Shulman, Laursen, Kalman, & Karpovsky, 1997)。これらの研究はみな女性の方が男性よりも親密性が高く、自我開放の程度が大きいと結論づけている。男性は女性よりも親密性の発達が遅く、青年後期においてもまだアイデンティティの形成のために探索している (Adams & Archer, 1994; Cooper & Grotevant, 1987; Craig-Bray, Adams, & Doboson, 1988; Erikson, 1950, 1968; Youniss & Smollar, 1985 など)。その故に男性の方はアイデンティティの形成を通して親密性の段階に進む過程を取ろうとするため、結果として恋愛パターン、あるいは選択基準が複雑になると考えられる。即ち恋愛行動が親密性の発達の結果ではなく、自らのアイデンティティの自信を得るための「アイデンティティのための恋愛」(大野, 1995)になると推測される。つまり、アイデンティティの自信を形成するためには、様々な女性と付き合いが求められ、そのために選択基準も複雑になると考えられる。このような現象は Sanderson & Cantor (1995) の研究結果でも示唆された。

また、今回の研究において女性の方は外見より性格のことを重視していることがわかった。進化心理学の観点からみると、女性は将来の家庭のよい雰囲気形成して、子供にとって安心感のある生育環境をつくるためには、男性の性格の優しさが外見より最も重要だと判断するのだと考えられる (Buss & Schmitt, 1993)。

また、本研究の男性調査対象群において、グループ1はグループ2より「しっかきさ」を重視して、選択傾向の差異が存在していることが示した。しかも両グループの漸成発達のいくつかの段階において有意な差があることも見られた。グループ1の男性はS-ESDSの4つの段階において得点が高い。すなわち女性の「しっかきさ」を重視して性格特性を求める男性は、よりアイデンティティの達成がなされていると解釈できる。このような特徴が持つて

いる男性はアイデンティティが相対的に達成している人ともいえるだろう。一方、例えば顔などの女性の外的魅力や面白さといった「楽しさ」を大事にしているグループ2の男性はS-ESDSの4つの段階において得点が低い、アイデンティティが相対的に達成していないと考えられる。この結果はSanderson & Cantor (1995, 2001)の、アイデンティティの達成状況において得点が高いほど、親密関係において心理的コミュニケーション、性格上の開放性、互いに依頼する欲求が強くなり、相手の成熟性を重視するという結果と一致している。

アイデンティティが相対的に達成されている人は、Eriksonの漸成発達理論図のより初期の発達段階の主題においても、基本的信頼感や自律性、主導性も相対的に発達していると理論的に考えられる。また当然、アイデンティティの感覚としての、「私は私である」のような一貫性と連続性の感覚が強く、それ故日常的なアイデンティティの感覚としての自覚、自信、自尊心、責任感、使命感、生きがい感(大野, 1995)をより持っていると考えられる。このような人は、親密関係においても相手の人格上の独立性を重視することができるだろう。先に、青年期の恋愛関係における、交際相手を自分を投射する鏡として自らのアイデンティティ形成を促進する傾向(Erikson, 1968)について述べたが、その点についても、相手の独立性ある人格に自分のアイデンティティを反射することで自分のアイデンティティの統合をより確立することができるかと推測されるだろう。その他の恋愛に関する理論からみると、人格上の相似性がより親密関係の達成を促し、満足度がより高い恋愛関係をつくりやすくなることが指摘されている(Byrne, 1971; Luo & Klohnen, 2005)。そのため、アイデンティティの達成状況が相似している人どうしが互いを選択する可能性がある。たとえば、基本的信頼感が高い人は同じレベルの異性に好感を持ちやすいのである。

今後の課題

本研究は主に大学生を研究対象として実施したものである。今後もっと広い範囲からサンプルを取って分析してより代表性がある選択基準を検討する必要がある。また、女性の選択傾向と漸成発達の各段階の発達状態との関連についても深く検討する必要がある。

さらに青年後期以後の初期成人期に入った男性の親密性の発達にはどのような特徴があるか、その段階の男性は青年期から選択基準の変化が起こるかどうか、また親密性の達成程度と選択基準との間にはどのような関連があるか、などの問題についても、課題として研究する必要がある。

第6章 漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係

漸成発達理論により、人生の初期段階における人格発達はその後の各段階における主題の発達の基礎であり、それらの主題の達成状況に大きな影響を及ぼしている。したがって、初期段階の発達主題の達成によって獲得した信頼感や自己コントロールという感覚は、その後の人間関係においても不可欠な重要なものである。すなわち、漸成発達の初期段階の主題の達成はいかに青年の行動や活動に影響するのかについての検討はとても意味があると考えられる。このため、本章では、青年期の特殊な人間関係—恋愛関係における愛着行動をターゲットとして、漸成発達の初期段階の主題の達成状況がいかに影響するかについて検討する。

本章の内容は、『立教大学心理学研究』第54号（2012年，p.21~34）に掲載された原著論文に基づいて加筆したものである。

第1節 問 題

Erikson (1950, 1963) は漸成発達の初期段階における「基本的信頼感」と「自律性」が十分に形成されると、その後のパーソナリティ発達の基盤になって生涯のその後の各発達段階に影響を及ぼすと指摘した。また、青年期に入るとともに、恋愛行動は次第に重要な対人行動になり (Collins & Sroufe, 1999; Winstead, Derlega, & Rose, 1997), しかもそれは幼少期において形成された内的作業モデルによる青年期の愛着行動とみられている (Shaver & Hazan, 1987)。本研究では、漸成発達の初期段階の基本的信頼感と自律性という人格発達の結果としての青年期における現れ(以下, 初期段階の人格発達)と青年期の愛着行動との関係について検討する。

Erikson (1968) は漸成発達の初期段階の人格発達を十分に解決できていない人は不信や回避のような対人行動特徴を形成しやすく、このような人は青年期および成人期においても、自分の中に引きこもり他人と本当の親密関係を築くことができないと述べている。

漸成発達の第I段階(乳児期)では、生後1歳半までの間、主に基本的信頼感の発達が主題となる。子どもは、ものを取り入れる様式を通して、自分と母親など外部世界の相互作用によって信頼を確立する。基本的信頼感とは、「自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚、ならびに、他人も本質的には信頼してもよいのだと言う感覚を意味する」(Erikson, 1968, p.120)とともに、健全なパーソナリティの基礎であると Erikson (1968) は強調した。逆にそれが不十分な場合には、その対極である基本的不信が優勢になり、青年期に入ると疎外という特殊な形態により、他人と接近することを拒否し、自分のなかに閉じ籠ることになると述べている (Erikson, 1968)。

第II段階(早期幼児期)である1歳から3歳までの発達主題は自律性である。自律性を発達させるためには、子どもの自尊心を失わずに自己コントロール感を獲得させることが重要である。他人に対して敵意に満ちた姿勢もしくは期待や態度は、この段階において形成される。さらに、自律性の発達が不十分の子どもは、青年期に入ると、いつも恥を感じながら、

他人を回避する傾向がある (Erikson, 1968)。

つまり Erikson は、この最初の 2 つの段階における母子関係が、基本的信頼感と自律性を獲得する為にもっとも重要な要因であることを強調している。母親は子どもの個々の要求に応じて適切に世話をし、子どもの心の中に信頼というものを植え付ける。さらに、母親はただ物質的栄養物を提供するだけでなく、子どもが不安や見棄てられたといったマイナスの感覚を体験しないように、精神的サポート機能も持つ。もしこの段階において母親の対応が不十分だったり、突然子どもから離れたりすると、子どもは急性抑うつ状態に陥る場合があり、後にパーソナリティの発達を深く傷つけることがある (Erikson, 1959, 1980)。すなわち、生後から 3 歳にかけて母子間の相互作用によって基本的信頼感と自律性という人格特徴を獲得することは、今後の発達段階における危機を解決するための前提条件となる。そのため、基本的信頼感と自律性を獲得した子どもは、十分に獲得できなかった子どもに比べて、青年期の恋愛関係においても、相手を信頼して接近できるような行動特徴があると推測することができる。

こうした基本的信頼感や自律性はそれが形成された幼少期にさかのぼって直接測定することは不可能であるが、漸成発達理論から、当然青年期に影響を与え、人格的特徴として現れていることが推測される。本研究では、この初期段階の人格発達、厳密にはその青年期における現れを測定し、検討する。

一方、恋愛の行動特徴の研究において Shaver & Hazan (1987) は、母子間の結びつきが子どもの将来の人間関係や社会発達にとって決定的な要因であることを強調した Bowlby (1969, 1973, 1980) の愛着理論を発展させ、青年期の恋愛行動は人生初期における親子の愛着行動と同じ特徴を持つ成人愛着行動であると論じた。つまり、幼少期の愛着経験によって形成された「内的作業モデル」が青年期あるいは成人期の愛着行動に大きな影響を与えている (Shaver & Hazan, 1987)。さらに、Bartholomew & Horowitz (1991) は成人の愛着行動をとらえるため、因子分析の結果に基づいて不安と回避の 2 因子構造を見出している。不

不安は恋愛関係において相手に見捨てられることへの恐れであり、回避は親密関係や依存性への不快感である。この領域における他の先行研究の結果によると、不安は信頼と他人から認められることとの負の相関を示しており、回避は親密感と負の相関で、独立感と正の相関を示した(Brennan & Shaver,1995; Collin, Ford, Guichard, & Feeney, 2006; Simpson,1990)。

漸成発達理論と愛着理論とを比較すると、前者が人格特徴の形成に焦点を当てているのに対して、後者は内的作業モデルという認知構造の生成に焦点を当てている。しかし Bowlby は精神分析家の資格も取得しており、愛着に関する言及には精神分析理論からも多分に影響を受けている(金政, 2003)。したがって正統派の精神分析学派である Erikson が提唱した漸成発達理論と愛着理論との共通点は多く、特に生後から3歳までの発達段階を重視している。さらに、Fonagy (2001) は『愛着理論と精神分析』において精神分析の各流派の論説を検討して、Erikson の漸成発達理論と愛着理論とは理論上、最も近いものであることを指摘した。その中で、基本的信頼感の経験の由来、基本的信頼感の失敗、心的表象の整合一貫性、母親の感受性と相互同期性から、漸成発達の初期段階におけるアイデンティティ発達と愛着スタイルの関係を論証した。久保田(1995)は「物語的自己同一性」という概念をあげ、愛着行動とアイデンティティの統合状態との間に関連性があることを指摘している。Kroger (2000)も、青年期から成人期までのアイデンティティ発達に関する考察を行い、安全な愛着感覚と、より高いレベルのアイデンティティ達成との間に重要な関連があると結論づけた。

ちなみに、青年期における愛着行動は早期経験によって形成された内的作業モデルから大きな影響を受けているが、唯一の影響要因とはいえない。Waters, Merrick, Treboux, Crowell, & Albersheim (2000)は60人の12ヵ月の乳児を調査対象として20年にわたり愛着に関する縦断研究を行った。その結果、早期の愛着スタイルと成人期の愛着行動との間に関連があるとともに、人生の重要な転機やネガティブな生活事件といった他の面からも影響を受けることが明らかになった。また、Bartholomew & Horowitz (1991), Feeney, Noller, & Roberts (2000)および金政(2003)の研究においても同様の指摘がなされている。この点は十分に考慮

する必要はあるが、本研究では初期段階の人格発達と青年期の愛着行動の基本的な関係を理解するためにこの2つに焦点を当てる。

これらのことから本研究では、初期段階の人格発達と青年期における愛着行動との関係について、以下の3つの仮説を検証する。基本的信頼感を十分に獲得した人は恋愛相手を信頼でき、見捨てられる恐れや不安の感覚が少ない。さらに、自律性の発達によって他人に対する敵意が少なく、自ら他人と積極的にかかわることができると考えられる。逆に基本的信頼感と自律性の達成が不十分な人は不安の感覚が強く、他人を回避する傾向があることが予測される。それゆえ、初期段階の人格発達である基本的信頼感と自律性は、いずれも青年期における愛着行動の不安と回避へ負の影響を及ぼすと考えられる。(仮説1)

Bartholomew & Horowitz(1991)による成人愛着行動モデルにおいては、不安と回避が直交関係であり、両因子間に相関関係がないことが示されている。不安と回避とを分けて他の変数との関係を検討する研究は多いが、しかしこの両因子間に相関関係がないことに関して、詳細に検討している研究はほとんどない。一方、Brennan, Clark & Shaver(1998)は、不安が成人愛着行動における感情的な部分を表現していることに対して、回避は他人に接近する行動を反映していると考えている。この考えに基づくと、恋愛関係の中で傷つき不安が高まるにつれ、他人に接近できず、回避行動をとる可能性がある。反対に、何かの原因で回避行動の傾向が強くなり、感情的に不安感が高まる可能性もある。したがって初期段階の人格発達の青年期における現れと青年期の愛着行動の関係モデルにおいて、不安と回避との間には中程度の有意な正の相関関係があるのではないかと予測される(仮説2)。

さらに、多くの先行研究は成人愛着における男女の差異にも注目している。例えば、男性は回避の得点が不安の得点より高いのに対して、女性は不安の得点が回避の得点より高い(Bartholomew & Horowitz, 1991; Del Giudice, 2011)。また、回避傾向の強い男性と不安感の高い女性は、デートにおいて相手との関係をより否定的に評価することが顕著だった(Collins & Read, 1990; Simpson, 1990)。すなわち、青年期の愛着行動において、男性はよ

り回避する傾向が強いことに対して、女性は回避よりさらに不安になりやすい傾向がある。このような男女の差異の形成要因について先行研究には次のような解釈がある。人格発達の初期段階において、親側からの世話が不十分であったり、親たちの夫婦関係の悪さなどが原因で、子どもが持続的な心理的圧力を経験し、これによって子どもは他人に対する不信感が高まり不安全な愛着行動が形成される(Belsky, Steinberg, & Draper, 1991; Draper & Harpending, 1982)。さらにこのような不安全な愛着行動が男女における漸成発達の順序の差異による分化されていく(大野, 2010)。すなわち、男性はアイデンティティの達成が親密性より先行し、エネルギーのほとんどをまずアイデンティティの確立に費やす。この時期に恋愛活動があるとしても他人を通して自分のアイデンティティの達成を確認するための手段にすぎない。そのため、男性はアイデンティティの問題を解決してからでなければ親密性の段階に移行することができず、結果として相対的に男性は恋愛関係から逃避あるいは回避する傾向が強い。女性のアイデンティティの達成は親密性と並行にして進行するため、恋愛活動を重視し、破局に対する不安を感じやすい。このことから、初期段階の人格発達からの影響は、男性の場合には不安への影響が回避への影響より小さいのに対して、女性の場合には不安への影響が回避への影響より大きいと考えられる(仮説3)。

また、青年期の愛着行動を測定する方法として、類型論と次元論の2つが存在する。類型論はおもにAAI(Adult Attachment Interview)(George, Kaplan, & Main, 1985)尺度を代表として半構造質問項目で回答を求めて、多数の採点者の合意による3つの愛着タイプに分類する。次元論の代表的尺度はECR(Experiences in Close Relationships) (Bartholomew & Horowitz, 1991)とECR-R(Experiences in Close Relationships- Revised) (Fraley, Waller & Brennan, 2000)尺度であり、愛着行動を不安と回避という2つの次元で解釈するものである。本研究は初期段階の人格発達状況と成人愛着行動を検討する目的のために、次元論方法の方が検討する方法として適していると考えられている。ECR尺度はもともと最初の323項目から抽出された36項目で構成されている。Fraley et al. (2000)は項目反応理論から ECR

尺度を再検討して、若干の問題点を指摘して、最初の 323 項目から改めて 36 項目を抽出して ECR-R 尺度を作成した。項目反応理論による分析結果が示したように、ECR-R 尺度は ECR 尺度より情報量が多く、妥当性が高いという利点を持っている。さらに Sibley, Fischer, & Liu(2005)の研究結果により、ECR-R 尺度は信頼性と妥当性の高いことも示された。以上の理由により、本研究は ECR-R 尺度をして用いた。

第 2 節 方 法

調査協力者

首都圏 4 年制私立大学の大学生 229 名のうち、質問項目「あなたは、過去又は現在において恋愛経験があるか？」に対して「ある」と答えた 172 名(男性 64 名(平均年齢 20.02 歳, $SD=1.09$)及び女性 108 名((平均年齢 19.82 歳, $SD=1.24$))を分析対象とした(性別不詳の 1 名は分析から除外した)。

ちなみに、本研究の調査協力者は、本論文の第 4 章の調査協力者と同一である。

調査内容

ECR-R (Revised Experiences in Close Relationships) 尺度日本語版 この尺度は英語版 (Fraley et al, 2000)から、英語に堪能な心理学専攻大学院生 3 人と専門の心理学研究科教員 1 人によって共同で翻訳されたものである。英語版尺度は高い信頼性と妥当性があることが既実証されている (Fraley et al, 2000; Sibley et al, 2005)。本尺度は「不安」と「回避」の 2 つの下位尺度で構成されている。「不安」下位尺度は、例えば「彼／彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる」、「回避」下位尺度は「彼／彼女は私が怒っているときにだけ、私に関心を向けるようにみえる」という内容で各 18 項目の合計 36 項目から構成されており、7 段階評定によって回答を求める。得点が高いほど不安あるいは回避の傾向が高いことを示している。

青年期における基本的信頼感・自律性尺度 本尺度は S-ESDS 質問紙 (三好ほか, 2003)

から基本的信頼感と自律性に応じた項目を抽出して再構成したものである。S-ESDS 質問紙は Ochse & Plug (1986) が Erikson の漸成発達理論に基づいて作成した英語版質問紙の日本語短縮版で、信頼性、妥当性ともに高い質問紙である。S-ESDS 質問紙は現在の青年期における人格特徴を測定しているが、その内容は、それと対応している人生の初期段階において達成された程度を反映していると考えられる。本尺度には基本的信頼感の項目(例えば、「人は信用できるものだ」)が7項目、自律性の項目(例えば、「私は意志が強い」)が7項目の、全14項目からなっている。4段階評定によって回答を求め、得点が高いほど各段階の発達の程度が高いことを示している。

手続き

2008年5月から6月にかけて都内4年制私立大学において授業時間を利用して質問紙調査を実施した。

統計パッケージ

以下の分析に、SPSS15.0 for Windows と Amos18.0 を用いた。

第3節 結果：分析1

ここでは、主に実施された尺度の信頼性と妥当性を検討して、各尺度における基本統計量を算出する。さらに、変数間の関係を検討するため、相関分析と偏相関分析も行う。

ECR-R 尺度の信頼性と弁別的妥当性

ECR-R 尺度の信頼係数を算出した結果、「不安」下位尺度は $\alpha=.86$ 、「回避」下位尺度は $\alpha=.86$ と高い値が得られた。尺度の弁別的妥当性は探索的因子分析(EFA)によって検討した。プロマックス回転後に「不安」因子の因子負荷量は.73 から.31 で、「回避」因子の因子負荷量は.72 から.34 だった。さらに、ECR-R 尺度の構成概念妥当性については、確認的因子分析を行い、モデル適合度が良いことを確認した ($\chi^2(8, N=172)=7.38, p<.05$; $CFI=0.965, RMSEA=0.009$)。これらの分析結果により、ECR-R 尺度は適度な信頼性と構成

概念妥当性を持つことが示された。

また、性差について検討するために、両尺度において男女における平均値の差の検定を行った(Table 6-1)。その結果、各下位尺度の平均値において有意な性差はみられなかった。

Table 6-1 ECR-R尺度と青年期における基本的信頼感・自律性尺度の記述統計量と性差

	総 計		男 性 (N=64)		女 性 (N=107)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
ECR-R							
「不安」	74.45	16.08	73.11	17.08	74.89	15.32	.74 <i>n.s.</i>
「回避」	60.42	15.30	60.34	14.13	60.51	16.08	.07 <i>n.s.</i>
青年期における基本的信頼感・自律性尺度							
基本的信頼感	17.88	3.88	17.52	3.96	18.18	3.77	1.09 <i>n.s.</i>
自律性	16.25	3.96	16.17	3.67	16.03	4.16	.22 <i>n.s.</i>

青年期における基本的信頼感・自律性尺度の信頼性と弁別的妥当性

基本的信頼感を測定する7項目の信頼係数は $\alpha=.73$ 、自律性を測定する7項目の信頼係数は $\alpha=.70$ と適当な値が得られた。主成分分析の結果、「基本的信頼感」下位尺度の各項目の主成分得点は.74から.46であり、「自律性」下位尺度の各項目の主成分得点は.74から.33だった。これらの分析結果によって本尺度は適度な信頼性と弁別的妥当性を持つことが示された。

ECR-R 尺度と基本的信頼感・自律性尺度間の相関と偏相関

成人愛着行動と初期段階の人格発達との関連について検討するため、「基本的信頼感」、「自律性」と ECR-R 尺度における「不安」と「回避」の下位尺度との相関係数を男女別に算出した (Table 6-2)。

Table 6-2 ECR-R 尺度と青年期における基本信頼感・自律性尺度との相関分析
および偏相関分析の結果(男女分け)

	1	2	3	4
1. 「不安」		.31**	-.47**(-.43**)	-.42**(-.37**)
2. 「回避」	.16		-.27**(-.14)	-.22*(-.10)
3. 基本的信頼感	-.54**(-.53**)	-.42**(-.41**)		.68**
4. 自律性	-.55**(-.53**)	-.23*(-.21*)	.51**	

注. 1. 行列上三角部は女性の結果, 下三角部は男性の結果。

2. ()内は偏相関分析の結果。

3. * $p < .05$, ** $p < .01$

男性の場合、「不安」は「基本的信頼感」との間に $r = -.54, p < .01$ 、「自律性」との間に $r = -.55, p < .01$ という比較的高い相関があり、「回避」は「基本的信頼感」との間に $r = -.42, p < .01$ 、「自律性」との間に $r = -.23, p < .01$ という中程度の相関が示された。女性の場合、「不安」は「基本的信頼感」との相関が $r = -.47, p < .01$ 、「自律性」との相関が $r = -.42, p < .01$ であり、「回避」は「基本的信頼感」との相関が $r = -.27, p < .01$ 、「自律性」との相関が $r = -.22, p < .05$ であり、男女とも同様の相関パターンを示した。しかし「不安」と「回避」との関連について、男性においては相関が認められなかったのに対して($r = .16, n.s.$)、女性においては中程度の有意な正の相関があり($r = .31, p < .01$)、女性の場合のみで仮説 2 が支持された。すなわち、初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルにおいて、男性の場合には「不安」と「回避」の間に相関がない可能性が示された。

さらに、青年期における「基本的信頼感」と「自律性」の達成状況と青年期の愛着行動の「不安」と「回避」との間の関係についてより深く検討するために、偏相関分析を行った。つまり、「不安」と「回避」のうちの一つの変数を制御して他の一つの変数と「基本的信頼感」および「自律性」との間の相関係数を求めた(Table 6-2)。その結果、男性の場合、「不安」と「回避」のいずれを制御しても相応な変数間の相関係数が依然として有意である。しかし女性の場合には、「回避」を制御すると、「不安」と「基本的信頼感」および「自律性」との相

関係数は有意であるのに対して、「不安」を制御すると、「回避」と「基本的信頼感」との関係数($r = -.14, n.s.$)も、「回避」と「自律性」との関係数も有意ではなくなった($r = -.10, n.s.$)。これらの分析結果によって、女性の場合において、「不安」は「基本的信頼感」および「自律性」と「回避」との間の媒介変数である可能性が示された。

分析1の結果から、以下のことが明らかになった。まず ECR-R 尺度と青年期における「基本的信頼感」と「自律性」尺度はみな適度な信頼性と弁別的妥当性を持つ。そして、ECR-R 尺度の「不安」と「回避」との間の関係数において男女の差異が見られた。つまり男性の場合には初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルにおいて、「不安」と「回避」との間に相関がない可能性が示された。一方女性の場合には、「不安」と「回避」との間の相関が有意であり仮説2が支持され、さらに「不安」は初期段階の人格発達と「回避」との間の媒介変数である可能性がある。そこでその可能性を検討するために、分析2において共分散構造分析を用いて初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルを検討する。

第4節 結果：分析2

ここでは主に結果分析1の結果によって推測された内容、すなわち、初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルにおいて、男性の場合には「不安」と「回避」の間に相関がないこと、女性の場合には「不安」が初期段階の人格発達と「回避」の間の媒介変数である可能性について検討する。

初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルにおける男女の比較

Table 6-2 に示されたように、男女ともに「基本的信頼感」と「自律性」との間に有意な相関がある。また漸成発達理論で強調されたように、基本的信頼感と自律性の獲得の前提条件である。さらに基本的信頼感と自律性を形成する期間—生後から3歳までは愛着の形成にとっても最も重要な時期である。これらの原因を統合して考慮すると、「基本的信頼感」と「自律性」を1つの潜在変数「初期段階の人格発達」として、青年期における愛着行動への影響

を検討することがより合理的であると考えられる。そこで分析 1 の結果に基づいて、「初期段階の人格発達」が「不安」と「回避」に影響を与えるが、「不安」と「回避」の間に相関がないモデル 1 (Figure 6-1)と、「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であるモデル 2 (Figure 6-2)の 2 つのモデルを作成した。共分散構造分析を行い、男女のデータを 2 つのモデルで検討し、モデルの適合度を比較した (Table 6-3)。その結果、男性の場合は「不安」と「回避」の間に相関がないと設定されたモデル 1 と「不安」から「回避」にパスを引くモデル 2 とを比べると、モデル 2 の方が *AGFI* の値が大きく、*AIC* の値が小さかった。したがって男性のデータには、モデル 1 が適合することが判明し、男性においては「不安」と「回避」の間の相関が非常に弱いということが確認された。一方、女性の場合にはモデル 1 とモデル 2 を比べると、モデル 1 の方が *GFI* と *AGFI* の値が小さく、*RMSEA* と *AIC* の値が大きかった。つまり女性のデータには、モデル 2 が適合すると考えられる (小塩, 2005; 豊田, 2007)。また、モデル 2 において、「不安」から「回避」へのパス係数 $\alpha_3 = -.36, p < .05$ は、「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であることを示している。

初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルにおけるパス係数の差の検定

さらにモデル 1 とモデル 2 における「初期段階の人格発達」と「不安」及び「回避」とのパス係数 α_1 と α_2 を求めた (Table 6-3)。その結果、モデル 1 とモデル 2 のいずれも「初期段階の人格発達」は「不安」と「回避」に対して負の影響を与えていることが示され (モデル 1: $\alpha_F = -.63, p < .01$; $\alpha_S = -.72, p < .01$; モデル 2: $\alpha_F = -.41, p < .01$; $\alpha_S = -.12, n.s.$), 仮説 1 が支持された。

また、モデル 1 とモデル 2 におけるパス係数 α_1 と α_2 の差についての比較検定を行った (Table 6-3)。その結果、男性のモデル 1 において、 $d = -1.71, p < .10$ であり、「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は「回避」への影響より 10%水準で有意に小さい傾向が示された。それに対して女性のモデル 2 の場合には $d = 1.93, p < .10$ であり、「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は「回避」への影響より 10%レベルで有意に大きい傾向が示さ

れ、仮説 3 を支持する方向の結果が得られた。

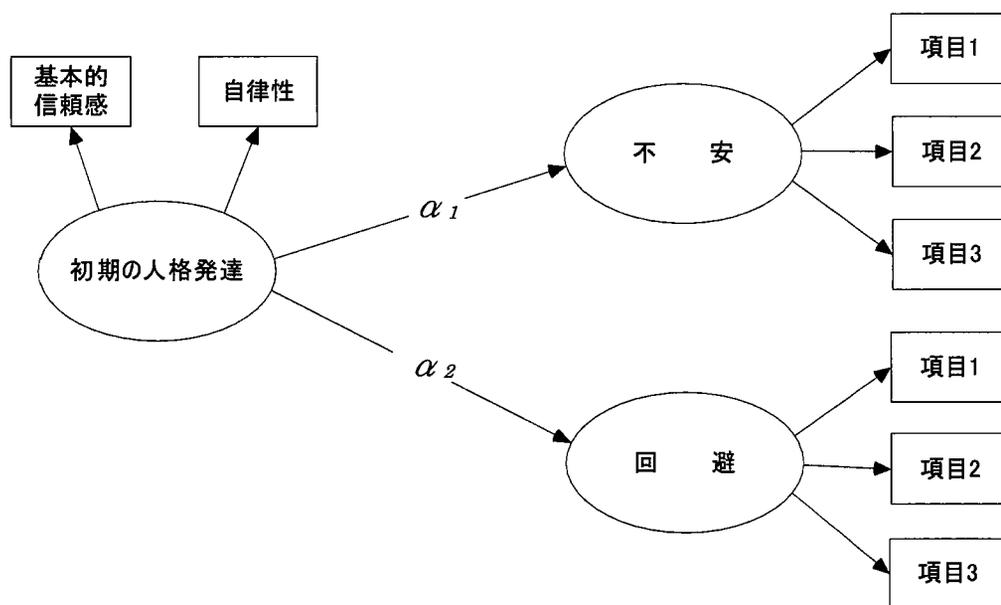


Figure 6-1 モデル 1

注) 四角は観測変数を，楕円は潜在変数を意味する。潜在変数から観測変数へのパス係数は男女データのいずれも 5% レベル以上有意である。誤差変数の図示は省略した。

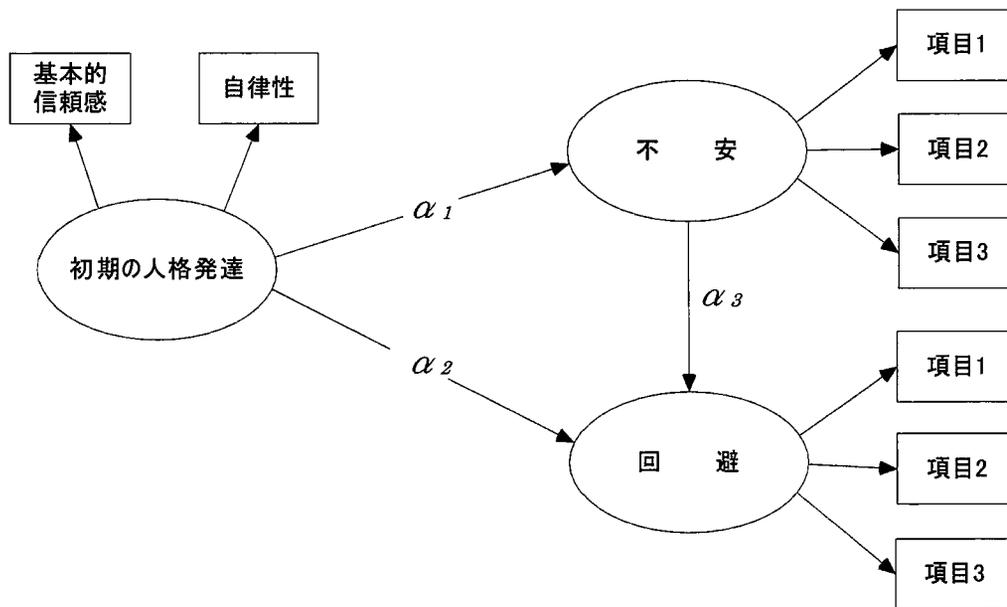


Figure 6-2 モデル2

注) 四角は観測変数を，楕円は潜在変数を意味する。潜在変数から観測変数へのパス係数は男女データのいずれも5%レベル以上有意である。誤差変数の図示は省略した。

Table 6-3 モデル1 とモデル2 の適合度指標，パス係数およびd値

		男性 (N=64)		女性 (N=104)	
		モデル1	モデル2	モデル1	モデル2
	χ^2	13.35	13.31	33.43	26.76
適	df	18	17	18	17
合	p	.77	.72	.02	.06
度	GFI	.95	.95	.93	.95
指	$AGFI$.91	.90	.87	.89
標	$RMSEA$.00	.00	.09	.07
	AIC	49.35	51.31	69.43	64.76
パ					
ス	α_1	-.63**			-.41**
係	α_2	-.72**			-.12
数	α_3	-			-.36**
	d		-1.71 [†]		1.93 [†]

注. $d = \alpha_1$ と α_2 の差の検定値。

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

分析 2 では以下のことを明らかにした。分析 1 において推測された初期段階の人格発達と青年期の愛着行動との関係モデルを検討した結果、男性のモデルでは「不安」と「回避」の間が無相関であり、女性のモデルでは「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であることが判明した。そしてパス係数間の差の検定によって、仮説 1 が支持され、さらに仮説 3 を支持する方向の結果が得られた。

第 5 節 考 察

問題部分で指摘したように、青年期の愛着行動への影響は内的作業モデル以外にも様々な要因があるであろう。漸成発達の各段階の形成状況からの影響も当然考えられる。人格発達において、基本的信頼感と自律性は、その後の人格や人間関係に影響を及ぼしていると考えられる。このため、本研究では初期段階の人格発達と青年の愛着行動における不安と回避との関係について検討した。

まず、「初期段階の人格発達が男女ともに青年の愛着行動における不安と回避へ負の影響を及ぼす」という仮説 1 を検討した。「初期段階の人格発達」から「不安」と「回避」への影響モデル(Figure 6-1 と Figure 6-2)について、男女別の分析結果により仮説 1 が支持された。男性の場合には、「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は $-.63(p < .01)$ 、「回避」への影響は $-.72(p < .01)$ であり、女性の場合には、「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は $-.41(p < .01)$ 、「回避」への影響は $-.12(n.s.)$ だった。すなわち、男女ともに青年期における基本的信頼感と自律性が十分な青年は恋愛相手に対する不安感が少なく、自ら接近することができる。逆に不十分な青年は、恋愛関係においても不安感が高く、回避する傾向が強いことが明らかになった。

漸成発達とは生涯に渡って最終的に「統合した自我」という感覚を確立していく過程である。Erikson(1968)は、この目標を達成するために、人生の初期段階において基本的信頼感と自律性を形成しなければならないと述べている。一方、成人愛着行動のメカニズムとする

「内的作業モデル」に含まれる中核要素である信頼も、漸成発達理論における基本的信頼感と本質的には同質なものであるという指摘がある(Fonagy, 2001)。基本的信頼感とは「他人に関しては一般に筋の通った信頼を意味するようなものを、そして自分自身に関しては信頼に値するという単純な感覚」(Erikson, 1959, 1980, p.61)である。つまり、漸成発達理論における基本的信頼感は人格発達の最も基礎にあり、単に次の発達段階における主題の解決に影響を及ぼすだけでなく、人間関係における出会いの際に引き起こされる心理活動や行動様式にも影響を与えると考えられる。さらにErikson (1968) は第Ⅱ段階の主題である自律性の感覚の欠如のために「本当は何物をもうまくできない」(Erikson, 1968, p.142)という危機感をもたらすことを指摘している。このような危機感成人愛着行動における不安と回避の形成の重要な原因になると考えられる。また、自律性の達成による意志力や自我コントロールは成人愛着行動と負の相関関係があることも先行研究によって明らかにされている(Field, 1987; Kobak, Cole, Ferenz-Gillies, Fleming, & Gamble, 1993)。以上のことから、初期段階の人格発達が青年期における愛着行動の不安因子と回避因子に負の影響を及ぼすことは妥当な結果だと考えられる。

次に、「不安と回避の間には中程度の有意な正の相関関係がある」という仮説 2 について検討した。Table 6-2 に示されたように、女性の場合には「不安」と「回避」との間に有意な正の相関があり仮説 2 が支持されたが、男性の場合には有意な正の相関は認められなかった。すなわち、青年の愛着行動において男性の場合は「不安」と「回避」とが互いに独立して直交状態であるのに対して、女性の場合は「不安」と「回避」とが強く関連して斜交状態となっていた。さらに初期段階の人格発達と青年期における愛着行動との関係モデルについて、男女別のモデルを比較分析した。その結果、男性のモデルでは「不安」と「回避」との間が無相関であるのに対して、女性のモデルでは「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であることを明らかにした。つまり、「初期段階の人格発達」と青年期の愛着行動との関係モデルにおいて、男女の間に大きな違いがある。男性の場合には、愛着行動

の「不安」と「回避」が同時に「初期段階の人格発達」から影響を受けているが、互いに相関がない。ところが、女性の場合には、「初期段階の人格発達」がまず愛着行動の「不安」に影響し、さらにその「不安」が「回避」に影響していることが示された。

最後に、仮説3として、「初期段階の人格発達からの影響は、男性の場合には不安への影響が回避への影響より小さく、女性の場合には不安への影響が回避への影響より大きい」ということを検討した。Table 6-3 に示された分析結果によって、仮説3が支持された。すなわち男性の場合には、「初期段階の人格発達」から「不安」へのパス係数 α_1 が「回避」へのパス係数 α_2 より小さい傾向が示された。一方、女性の場合には「初期段階の人格発達」から「不安」へのパス係数 α_1 が「回避」へのパス係数 α_2 より大きい傾向があった。

女性は生後から長期間にわたり母親との相互作用を通して母子関係の中で「自我」という感覚を確立させる。さらに人との関係を維持するために、人間関係に対する高い感性が要求される (Surrey, 1991)。または社会生活や経済生活における不平等が原因で、女性は男性より感情的、心理的親密感を求める (Montgomery & Sorrell, 1998)。これらのことによって、初期段階の人格発達が不十分な女性は青年期の恋愛活動をする際に、まず引き起こされるのは強い不安感ではないだろうか。さらに、女性のアイデンティティは母親との関係の中で形成され社会化されていき、その過程で感情的絆の感覚 (a sense of emotional connection) も定着する。つまり、女性の自我感覚 (自信、自我同一感など) は人間関係の中での感情に基づいて生成される。また、「感傷的」、「多感的」といった社会的性役割を要求され、感情面から行動面への影響が大きい (Marcia, 1993b)。このため、初期段階の人格発達は感情とかわる不安を通して行動傾向とかわる回避に影響を与えることとなるのだと考えられる。

しかしながら男性の場合は、初期段階の人格発達が阻害されると、青年期の恋愛活動において相手からの接近を断って回避する傾向がある (Brassard, Shaver, & Lussier, 2007; Brennan, Clark, & Shaver, 1998; Del Giudice, 2009; Kirkpatrick, 1998; Scharfe & Bartholomew, 1994)。本研究でも同じような結果が得られた。男性は、人生の初期段階にお

いて母親に対するエディプスコンプレックスにより、感情的に母親に近づきたいという動機から依頼的、親密な母子関係を求める。ところが、同性の父親に同一視をして父親のような独立や我慢のような男性的行動をまねるべきだという社会的要求を求められている。そのため、子どもは感情と行動が一致せず、両者の間の関連性が弱くなる(Miller, 1991)。また、「理性」、「立身出世」、「独立」のような社会的性役割が要求され、感情に左右されないことが求められるため、行動面が相対的に独立しており、不安と回避の間の関連が弱いと考えられる。

以上の考察の結果、初期段階の人格発達と青年の愛着行動との関係モデルにおいて男女の間に大きな差異が存在していることが明らかになった。すなわち、男性の場合には、不安と回避が相互に独立して、しかも回避が不安より初期段階の人格発達の青年期における現れから相対的に強い影響を受けている。しかし、女性の場合には不安が回避より初期段階の人格発達の青年期における現れからの影響を相対的に強く受けると同時に、媒介変数としてこの影響を回避に伝えていると考えられる。

今後の課題

本研究では初期段階の人格発達から青年の愛着行動への影響および性差に関して検討した。しかし、サンプル数が相対的に少ないという問題点もある。今後は、縦断研究によりさらに深く検討する必要がある。

第Ⅲ部

総論

第7章 総論

本論文は漸成発達理論を枠組みとして、青年期のアイデンティティ形成へのアプローチにおいて、典型的な影響要因である母親のアイデンティティ形成状況、大学の寮生活の雰囲気または青年の愛着行動の特徴からアイデンティティ形成への影響について3つの実証的研究を通して検討した。さらに、アイデンティティの形成状況により、青年期の代表的な行動である恋愛活動において、恋愛対象に対する選択基準と恋愛対象への愛着行動の傾向について2つの研究を通して検討した。本章では、この5つの実証的研究の結果をまとめ、総合的考察を行う。まだ、本論文においての残された課題を検討し、さらに将来の課題についても論じる。

第1節 本論文の成果のまとめ

1. 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響

第2章では、母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響について検討した。

生涯発達心理学における課題は、個人の発達過程の研究だけでは十分でなく、異なるライフサイクルの時期にある世代間の相互作用についての検討が必要であるという主張がある(平石, 2000; Lerner & Busch-Rossnagle, 1981; Newman & Newman, 2005)。漸成発達理論の研究において、このような検討によって、青年期の心理発達がより深く理解されるだけでなく、人間の生涯発達に関する探究にも有益である。そこで本研究では第2章において、青年と母親の漸成発達理論に示された主題の獲得状況を測定し、その特徴と母子間の関連性から世代間伝達の可能性と、それが青年のアイデンティティ形成に及ぼす影響について検討を行った。

第1節には、理論的検討に基づいて4つの仮説を提出した。すなわち、第1、人格発達の各主題において、個人内における各主題の得点の間には高い相関がある。第2、漸成発達理論の各主題の間にある母子間で対応する主題との間には有意な正の相関がある。第3、母親のすべてもし

くは一部の主題の獲得は青年の「アイデンティティ達成」と直接的であれ、間接的であれ有意な正の相関がある。第4、青年のアイデンティティ形成は、母親からの直接の影響ではなく、青年自身が獲得したより初期の人格発達の主題がより強く影響していることになる。

第2節では、以上の仮説を検討するために、104組の学生と母親のデータを分析の対象として、S-ESDS 尺度を用い、青年とその母親両方の漸成発達の各主題の獲得状況を測定し、漸成発達の特徴と母子間の関連性について検討した。

その結果、まず青年群では「主導性」と「親密性」の相関が比較的低い($r=.18, p<.10$)以外、他の相関はみな有意であるのに対して、母親群は「自律性」と「主導性」の相関が比較的低い($r=.19, p<.10$)以外、他の相関がすべて有意であることが認められた(Table 2-3)。すなわち仮説1が支持された。次に、青年群の「基本的信頼感」の得点と母親群の「基本的信頼感」の得点との間に有意な正の相関関係($r=.25, p<.05$)があり、青年群の「自律性」の得点と母親群の「自律性」の得点との間に有意な正の相関が示された($r=.21, p<.05$)。すなわち、仮説2を部分的に支持した。また、青年群と母親群の間の相関分析結果(Table 2-4)に示されたように、母親群の「基本的信頼感」及び「自律性」尺度の得点と青年の「アイデンティティ達成」尺度の得点との間に有意な正の相関がある($r=.25, p<.05; r=.23, p<.05$)。ところが、母親の他の主題の獲得と青年の「アイデンティティ達成」との間に有意な相関がみられなかった。すなわち、母親の「基本的信頼感」と「自律性」は青年の「アイデンティティ達成」と関連していることが示唆され、仮説3を部分的に支持した。最後に、仮説3についての検討結果に基づいて、パス分析を行い、母親の「基本的信頼感」と「自律性」が青年の「基本的信頼感」と「自律性」に影響し、青年の「基本的信頼感」と「自律性」が媒介変数として青年の「アイデンティティ達成」に影響するというモデルの妥当性について検討した。その結果は、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の獲得が青年の「アイデンティティ達成」に影響するプロセスにおいて、青年の「基本的信頼感」と「自律性」の主題の獲得は媒介変数としている機能していることが明らかになり、仮説4が支持された。

この分析の結果、漸成発達の主題の形成過程において、母子の世代間伝達の現象があり、さ

らに母親の「基本的信頼感」と「自律性」の形成状況は直接、青年の「アイデンティティ達成」に影響を及ぼすわけではなく、青年の「基本的信頼感」と「自律性」の形成を通して、間接的に影響を与えることがわかった。すなわち、青年の「基本的信頼感」と「自律性」は、青年のアイデンティティの達成における母親の影響のプロセスにおいて、媒介変数として働き、青年期では、母親からの影響に対して能動的に受け入れる可能性が示唆された。

2. 大学寮生活の雰囲気は青年期におけるアイデンティティ形成に及ぼす影響

第3章では、大学寮生活の雰囲気が青年期におけるアイデンティティ形成に及ぼす影響について検討した。

アイデンティティの形成は青年期の人格発達において最も重要である(Erikson, 1968)。近年、この形成過程においてアイデンティティがいかに変化するか検討するために、時間的要素を導入する縦断的研究が増えている。ところが、その中のほとんどは Marcia(1963)が提唱したアイデンティティ・ステータス理論に基づいて調査を行っているが、理論上に問題があると指摘されている(Matteson, 1977)。このため、本研究の第一の目的としては、漸成発達理論の立場からアイデンティティの各構成要素が青年期においてどのように変化するかを明らかにし、青年期のアイデンティティ形成について検討する。

また、アイデンティティ形成は心理-社会的相互作用によるものであり、外部環境からの影響を受けつつ統合していく(Erikson, 1950, 1963)。青年期のある一定期間の環境がアイデンティティ形成にどのように影響するかについての検討はとても意味深いものである。一方、近年、マイクロレベル環境である大学の寮に関する研究への注目が集まっている。先行研究により、大学の寮生活は青年の学業成績、対人関係とかかわって、さらに飲酒問題や麻薬乱用などの社会問題にも関連があることが示されている。そのため、本研究の第二の目的としては、大学生の寮生活をこのような外部環境の典型と考え、入学から3年間にわたってアイデンティティ形成への時間的な影響について縦断的研究を行った。

第2節では、これらの目的に合わせ、さらに縦断研究に必要なサンプル数の確保が可能であり、

かつ、寮の同室の成員が固定されていることで寮生活の雰囲気に対する成員の変動による影響が最小限に抑えられるために、本研究は中国の大学生を研究対象とした。中国の地方国立の中核としての総合大学である S 大学，地方国立の理科系大学である T 大学，地方国立の農業系の SN 大学の大学生(627 人_{2007年}～337 人_{2010年})を調査対象として，2007 年，2008 年，2010 年に 3 回の質問紙調査を実施した。測定尺度は ESDS の中国語版と本研究で作成した「中国の大学生の寮生活雰囲気」尺度である。研究結果から以下のことが明らかになった。

まず，男女のいずれも「基本的信頼感」の得点は 3 年間にわたって減少する傾向があり，平均値間に有意な差が見られた($F(2,174)=3.72, p<.05$; $F(2,157)=3.41, p<.05$)。「自律性」の得点は男女とも上昇する傾向が見られた($F(2,174)=11.14, p<.01$; $F(2,157)=11.07, p<.01$)。「アイデンティティ達成」の得点も男女とも上昇する傾向がある($F(2,174)=10.03, p<.01$; $F(2,157)=9.76, p<.01$)。

また，「親密性」の得点も男女とも上昇する傾向が示された($F(2,174)=3.23, p<.05$; $F(2,157)=3.81, p<.05$)。次に，2008 年と 2010 年の「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の得点のいずれも「基本的信頼感」($r_{2008}=.31, p<.01$; $r_{2010}=.31, p<.01$)，「自律性」($r_{2008}=.24, p<.01$; $r_{2010}=.25, p<.01$)，「アイデンティティ達成」($r_{2008}=.44, p<.01$; $r_{2010}=.30, p<.01$)，「親密性」($r_{2008}=.35, p<.01$; $r_{2010}=.25, p<.01$)の得点と有意な正の相関が見られた。また，2010 年の「中国大学生寮生活雰囲気」尺度の得点と「生殖性」の得点の間にも有意な正の相関が見られた($r_{2010}=.18, p<.05$)。すなわち，寮生活の雰囲気が良いほど「基本的信頼感」，「自律性」，「アイデンティティ達成」と「親密性」の形成は順調に進むことが示唆された。

さらに，潜在曲線モデルの分析により，「中国大学生寮生活雰囲気」は「基本的信頼感」の変化には有意な影響を与えないことが明らかになった。一方，「中国大学生寮生活雰囲気」は「自律性」，「アイデンティティ達成」と「親密性」の時間的変化に有意なプロセスな影響を及ぼすことがわかった。

この結果，良い寮生活の雰囲気は青年の「自律性」，「アイデンティティ達成」，「親密性」に関する 3 年間の時間的変化に肯定的な影響を及ぼすが，「基本的信頼感」の変化には有意な影響を及

ぼしてないことが明らかになった。すなわち、青年期の漸成発達において、身近な環境からの影響によって達成が促進される発達主題があることが示された。

3. 青年期の愛着行動の特徴と漸成発達の親密性の達成との関連

第4章では、青年期の愛着行動の特徴と漸成発達の親密性の達成との関連について検討した。

青年期が終わり初期成人期に至ると、漸成発達の第VI段階「親密性 対 孤立」に入り、「親密性」が発達の主題となる (Erikson, 1950, 1963)。これは単に異性と結婚して自分の家庭を持つことだけでなく、親密な人間関係を作ることも意味している。しかし、人を拒絶したり、距離を設けたりすることや、人との親密な関係のため自分自身が巻き込まれて自我の喪失の恐れ、不安感を強く感じる場合、親密性の対極である「孤立」に偏ることとなる。この状態に陥ると、自分のことのみで夢中になり本当の親密な関係をつくりあげられなくなる (Erikson, 1959, 1980)。

一方、近年同じように青年期の親密な関係を主な研究テーマとする成人愛着理論が注目されている。成人愛着理論の基本的な観点は、幼少期において養育者との愛着経験によって形成された内的作業モデルが、青年期や成人期における親密な関係にも大きな影響を及ぼすことにある (Shaver & Hazan, 1987)。

本研究はこの2つの理論についての検討に基づいて、青年期の愛着行動の特徴は漸成発達の親密性の達成状況と関連すると推測して、以下の仮説を提出する。第1、愛着行動における不安次元も回避次元も、漸成発達の親密性との間に負の相関があると考えられる。第2、青年期の愛着行動における不安と回避は、親密性の達成と緊密な関係があるアイデンティティ達成の程度との間に負の相関があると考えられる。第3、青年期の愛着行動の特徴と成人期の親密性の因果モデルにおいて、女性の場合には不安が回避より親密性に影響するのに対して、男性の場合には回避が不安より親密性に影響を与えられとされる。

これらの仮説を検討するために、ECR-R尺度の日本語版とアイデンティティ達成・親密性尺度を用い、172名(男性64名、女性108名)の恋愛経験がある大学生を調査対象として質問紙調査を実施した。

結果は、まず、相関分析により、男性の場合、「親密性」は「不安」との間に $r = -.51, p < .01$, 「回避」との間に $r = -.45, p < .01$ の有意な相関があった。女性の場合、「親密性」は「不安」との間の相関が $r = -.37, p < .01$ であり、「回避」との相関が $r = -.27, p < .01$ だった。すなわち、男女ともに青年期の愛着行動において不安あるいは回避傾向が強い人は漸成発達における親密性の発達も困難になることが明らかになり、仮説 1 が支持された。

また、Table 4-4 に示されたように、男性の場合には「アイデンティティ達成」と不安との間の相関は $r = -.57, p < .01$, 「回避」との「相関」は $r = -.53, p < .01$ であった。それに対して女性の場合、「アイデンティティ達成」と「不安」との間の相関は $r = -.52, p < .01$, 「回避」との相関は $r = -.37, p < .01$ であった。男女いずれも愛着行動における不安と回避は、アイデンティティ達成の程度との間に有意な負の相関を示し、仮説 2 が支持された。

さらに、Table 4-5 の共分散構造分析の結果によると、男性の場合は、「不安」から「親密性」へのパス係数 $\alpha_1 = -.26$ で有意ではないのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数 $\alpha_2 = -.70$ と有意であり、しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は $-2.02 (p < .05)$ であった。一方、女性の場合は、「不安」から「親密性」へのパス係数が $\alpha_1 = -.40$ で有意だったのに対して、「回避」から「親密性」へのパス係数が $\alpha_2 = -.16$ と有意ではなく、しかも α_1 と α_2 の差の検定の結果は $1.72 (p < .10)$ であった。これらの分析結果は仮説 3 を支持した。

この結果、青年期の愛着行動の特徴である「不安」や「回避」は青年期の「アイデンティティ達成」と正の相関があり、さらに次の段階の「親密性」の達成に有意な負の影響を及ぼすことが明らかにされた。すなわち、人間関係における「不安」や「回避」は漸成発達の発達主題の達成に影響する傾向があることが示唆された。

以上の研究では、青年期におけるアイデンティティの形成へ影響を及ぼす 3 つの要因について検討した。次は青年期のアイデンティティ形成の青年の行動や活動への影響について検討するために、青年の恋愛活動を典型例として考察を行った。その概要は以下のとおりである。

4. 青年期における恋愛相手の選択基準と漸成発達の各発達主題の形成状況との関係

第5章では、青年期における恋愛相手の選択基準と漸成発達各発達主題の形成状況との関係について検討した。

恋愛は青年期に入った個体にとって重大な課題である。恋愛行動の第一歩—恋愛相手の選択は恋愛関係の形成、保持あるいは別れの前提条件と考えられる(Stenberg & Barnes, 1988)。一方、選択に関する人格心理学における研究は Terman (1938) によって最初に発表された。Terman (1938) は恋愛と人格特性の関連について検討したが、それ以降様々な研究者によって 477 篇以上の論文が発表された (Cooper & Sheldon, 2002)。

その中で漸成発達理論において、Erikson (1968) は発達に関する 8 段階のライフ・サイクル図式を提示し、生涯のそれぞれの段階で解決を要する重要な心理社会的課題を示している。特に第6段階「親密性 対 孤立」では、専ら恋愛のことについて焦点をあてて論証した。さらにその時期だけではなく、親密性の形成経緯について最初の段階から全般的に説明した。他の人格理論が恋愛関係における二人の性格の異同しか論じないことに比べ、漸成発達理論はより深く検討していると考えられる。

Sanderson & Cantor (1995) は 2 つの研究を通して青年男女の交際する目的 (親密関係を求める目的と自信・自我探求の目的) とアイデンティティの形成とが関連することをあきらかにした。その結果、アイデンティティ達成型あるいはフォークロージャー型の人より親密関係 (親密性) を求めるために交際する。それに対してアイデンティティ拡散型あるいはモラトリアム型の人より自信・アイデンティティのために異性と交際することがわかった。Zimmer-Gembeck & Petherick (2006) は、242 人を調査して恋愛関係への満足度、デートの目的と職業アイデンティティ、性役割アイデンティティとの相関を検討した。結果は Sanderson たちの研究結果と同じく Erikson の理論を支持した。

一方、特有な社会文化の文脈において、その文脈にいる成員に認められた選択基準が存在している。青年の恋愛活動において、所属の社会文脈に共通した選択基準の枠組みと同時に、個人の生育環境、同化された価値観、人格特徴などの原因により、恋愛相手を選択する際の個人的な選

選択傾向が存在する。このため、恋愛相手の選択基準における個人差を通して、青年期における漸成発達各主題の達成状況の差異を読み取ることができると考えられる。

本研究の目的は、第1に日本の男女青年の恋愛相手の選択基準を明らかにする。第2に選択基準の中に潜在している構成因子を解析して、選択傾向を見出す。第3に選択の傾向が異なる青年の漸成発達の各段階における発達主題の形成状態を比較して、差異を検討することである。

これらの目的を達成するため、本研究は2回の調査を行った。第1回目は、首都圏4年制大学の大学生104名を調査対象として、質問「あなたは、恋愛相手を選択する場合に、どのような特徴を持っている相手がよいと思いますか？」に対して、自由記述で回答を求めた。調査結果を整理して恋愛相手の選択基準として挙げられた頻度の多い順に10位までの「恋愛相手の選択基準」を明らかにした。第2回目は、第1回目から得た10個の選択基準から2項目ずつ抽出し、AとBの2つの選択肢として並べて、45項目の「恋愛相手の選択する選好度」質問紙を作成した。なお教示は「あなたが恋愛相手を選択する場合、並んでいるAとBの項目のうちより重要だと思う項目に○印をつけてください」とした。さらに、首都圏4年制大学大学生132名に対してこの質問紙を用いて調査を行って、得たデータに対して多次元尺度構成法を行った。それとともに、第2回目の参加者に対してS-ESDS尺度を用いて漸成発達の各発達主題の形成状況を調べた。

その結果、まず、男女の恋愛相手を選択する際に10個の選択基準が明らかにした(Table 5-1)。また、調査の対象者は男女いずれも外観のことを非常に重要な選択基準としているとともに、性格のやさしさも重要な選択基準とすることがわかった。

次に、多次元尺度構成法により、男女両方の恋愛相手の選択基準の次元を抽出した。男性は女性より選択基準が複雑であることがわかった。男性の場合には、次元1「現代的な女性役割 対 伝統的な女性役割」となり、次元2「楽しさ 対 しっかきさ」となる(Figure 5-1)。女性の場合には、1つの次元、「性格的 対 外見的」であった(Figure 5-2)。

さらに、男女の次元空間における位置の差異によって、異なるグループに別れた。男性は「楽しさ」より「しっかきさ」を重視するグループ1と、「しっかきさ」より「楽しさ」を重視するグ

グループ2に別れた。それに対して、女性は「外見的」を重視するグループ1と「性格的」な優しさや思いやりを重視するグループ2に別れた。Table 5-2は男性の2グループのS-ESDSの各段階発達主題の得点におけるt検定の結果である。各段階の中で「基本的信頼感」、「自律性」、「生産性」と「アイデンティティ達成」において有意な差異が見られた。「主導性」、「親密性」と「生殖性」の段階には有意な差異が見られなかった。すなわち、女性の「しっかきさ」をより重視する男性の方は漸成発達の各発達主題の形成のレベルが高い。Table 5-3は女性の2グループのS-ESDSの各段階発達主題の得点におけるt検定結果である。各段階において有意な差異は見られなかった。

このような結果に対する解釈としては、男性は女性よりも親密性の発達が遅く、青年後期においてもまだアイデンティティの達成のために探索している。男性の方はアイデンティティの達成を通して親密性の段階に進む過程を取ろうとするため、結果として恋愛パターン、あるいは選択基準が複雑になると考えられる。即ち恋愛行動が親密性の発達の結果ではなく、自らのアイデンティティの自信を得るための「アイデンティティのための恋愛」(大野, 1995)になると推測される。女性の方は外見より性格のことを重視して、進化心理学の観点からみると、女性は将来の家庭のよい雰囲気形成して、子供にとって安心感のある生育環境をつくるためには、男性の性格の優しさが外見より最も重要だと判断する(Buss & Schmitt, 1993)。さらに女性はアイデンティティの達成と親密性の発達が同時平行的で両者のずれが少ないと考えられる。

この結果、女性の性格をより重視して優位な選択基準とする男性は漸成発達主題の達成レベルが高いことが明らかになった。すなわち、青年期の漸成発達主題の形成状況は青年の恋愛行動において、恋愛相手の選択基準に影響を及ぼすことが示唆された。

5. 漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係

第6章では、漸成発達の初期段階における人格発達と青年期の愛着行動との関係について検討を行った。

Erikson (1968) は漸成発達の初期段階の人格発達を十分に解決できていない人は不信や回避

のような対人行動の特徴を形成しやすく、このような人は青年期および成人期においても、自分の中に引きこもり他人と本当の親密関係を築くことができないと述べている。

一方、恋愛の行動特徴の研究において Shaver & Hazan(1987)は、母子間の結びつきが子どもの将来の人間関係や社会発達にとって決定的な要因であることを強調した Bowlby(1969,1973,1980)の愛着理論を発展させ、青年期の恋愛行動は人生初期における親子の愛着行動と同じ特徴を持つ成人愛着行動であると論じた。つまり、幼少期の愛着経験によって形成された「内的作業モデル」が青年期あるいは成人期の愛着行動に大きな影響を与えている(Shaver & Hazan, 1987)。

漸成発達理論と愛着理論とを比較すると、前者が人格特徴の形成に焦点を当てているのに対して、後者は内的作業モデルという認知構造の生成に焦点を当てている。しかし Bowlby は精神分析家の資格も取得しており、愛着に関する言及には精神分析理論からも多分に影響を受けている(金政, 2003)。したがって正統派の精神分析学派である Erikson が提唱した漸成発達理論と愛着理論との共通点は多く、特に生後から3歳までの発達段階を重視している。さらに、Fonagy(2001)は『愛着理論と精神分析』において精神分析の各流派の論説を検討して、Erikson の漸成発達理論と愛着理論とは理論上、最も近いものであることを指摘した。

本研究では、初期段階の人格発達と青年期における愛着行動との関係について、以下の3つの仮説を検証する。第1、初期段階の人格発達である基本的信頼感と自律性は、いずれも青年期における愛着行動の不安と回避への影響を及ぼすと考えられる。第2、初期段階の人格発達の青年期における現れと青年期の愛着行動の関係モデルにおいて、不安と回避との間には中程度の有意な正の相関関係があるのではないかと予測する。第3、初期段階の人格発達からの影響は、男性の場合には不安への影響が回避への影響より小さいのに対して、女性の場合には不安への影響が回避への影響より大きいと考えられる。

これらの仮説を検討するため、本研究は首都圏4年制私立大学の大学生229名のうち、質問項目「あなたには、過去又は現在において恋愛経験がありますか?」に対して「ある」と答えた172

名(男性 64 名, 女性 108 名)を分析対象とした。調査内容は, ECR-R (Revised Experiences in Close Relationships) 尺度日本語版 と青年期における「基本的信頼感・自律性」尺度である。

その結果, まず, ECR-R 尺度と青年期における「基本的信頼感・自律性」尺度の信頼性と弁別的妥当性を検討し, 両方とも適当な信頼性と弁別的妥当性を持つことが明らかになった。

次に, 「基本的信頼感」, 「自律性」と ECR-R 尺度における「不安」と「回避」の下位尺度との相関係数を男女別に算出した (Table 6-2)。男性の場合, 「不安」は「基本的信頼感」との間に $r = -.54, p < .01$, 「自律性」との間に $r = -.55, p < .01$ という比較的高い相関があり, 「回避」は「基本的信頼感」との間に $r = -.42, p < .01$, 「自律性」との間に $r = -.23, p < .01$ という中程度の相関が示された。女性の場合, 「不安」は「基本的信頼感」との相関が $r = -.47, p < .01$, 「自律性」との相関が $r = -.42, p < .01$ であり, 「回避」は「基本的信頼感」との相関が $r = -.27, p < .01$, 「自律性」との相関が $r = -.22, p < .05$ であり, 男女とも同様の相関パターンを示した。しかし「不安」と「回避」との関連について, 男性においては相関が認められなかったのに対して ($r = .16, n.s.$), 女性においては中程度の有意な正の相関があり ($r = .31, p < .01$), 女性の場合のみで仮説 2 が支持された。

さらに, 漸成発達理論に基づいて, 「基本的信頼感」と「自律性」を「初期段階の人格発達」という潜在変数に統合した。仮説 1 に対する分析結果に基づいて, 「初期段階の人格発達」が「不安」と「回避」に影響を与えるが, 「不安」と「回避」の間に相関がないモデル 1 (Figure 6-1) と, 「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であるモデル 2 (Figure 6-2) の 2 つのモデルを作成した。共分散構造分析を行い, 男女のデータを 2 つのモデルで検討し, モデルの適合度を比較した (Table 6-3)。その結果, 男性の場合は, モデル 1 が適合することが判明し, 男性においては「不安」と「回避」が無相関であるということが確認された。一方, 女性の場合にはモデル 2 が適合し, しかも「不安」から「回避」へのパス係数 $\alpha_3 = -.36, p < .05$ であり, 「不安」が「初期段階の人格発達」と「回避」との間の媒介変数であることを示している。

したがって, モデル 1 とモデル 2 のいずれも「初期段階の人格発達」は「不安」と「回避」に

対して負の影響を与えていることが示され(モデル 1: $\alpha_1 = -.63, p < .01$; $\alpha_2 = -.72, p < .01$; モデル 2: $\alpha_1 = -.41, p < .01$; $\alpha_2 = -.12, n.s.$), 仮説 1 が支持された。また, モデル 1 とモデル 2 におけるパス係数 α_1 と α_2 の差についての比較検定を行った (Table 6-3)。その結果, 男性のモデル 1 において, $d = -1.71, p < .10$ であり, 「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は「回避」への影響より 10%水準で有意に小さい傾向が示された。それに対して女性のモデル 2 の場合には $d = 1.93, p < .10$ であり, 「初期段階の人格発達」から「不安」への影響は「回避」への影響より 10%レベルで有意に大きい傾向が示され, 仮説 3 を支持する方向の結果が得られた。

この結果, 漸成発達の初期段階における人格発達は青年期の愛着行動における「不安」と「回避」に影響を及ぼし, 「基本的信頼感」と「自律性」の最初の形成状況が良いほど, その後の青年期の愛着行動における不安感や回避傾向を抑えることが示された。すなわち, 漸成発達初期段階の発達主題の達成は青年期の恋愛行動まで影響することが明らかになり, 個体の生涯発達における重要性が示された。

第 2 節 総合的考察

1. 青年期のアイデンティティの形成は諸要素の複雑な影響の結果である

Erikson は臨床的経験をまとめ, 人格発達に対する洞察から, アイデンティティの形成は心理—社会的相互作用の産物であると指摘した。すなわち, これらの要素は生理的, 心理的, 社会的に異なるカテゴリーに属し, それらがアイデンティティの形成過程において全生涯にわたって複雑な影響を及ぼすこととなる。本論文では, 世代間伝達の影響要因(第 2 章), 環境的影響要因(第 3 章)または行動特徴的要因(第 4 章)の 3 つの方面から, 一般の青年を調査対象として実証的にこの知見を論証した。さらに, 各影響要因がアイデンティティの形成過程における重要性, 強さ及び持続期間は異なっていることも明らかにした。たとえば, Erikson(1950, 1963)は漸成発達理論により, 母親からの影響は, 子どもの人生の初期段階において最も重要であり, 最も直接的なものであると強調した。ところが, 本論文の第 2 章での

結果に示されたように、母親の「基本的信頼感」と「自律性」が青年の「基本的信頼感」と「自律性」に影響し、青年の「基本的信頼感」と「自律性」が媒介変数として青年の「アイデンティティ達成」に影響することが明らかになり、青年期における母親からの影響は間接的なものであることがわかった。すなわち、青年期に入ると、母親からの影響の重要性は相対的に弱くなることが示された。一方、本論文の第3章の大学寮生活の雰囲気に関する潜在曲線モデルの分析結果により、寮生活の雰囲気は青年期の「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」の達成の時間的変化に有意な影響を及ぼしていることを明らかにした。すなわち、寮生活4年間だけを調べても、周囲の環境や生活空間からの影響は、以上の漸成発達主題の形成過程において時間とともに重要性が段々高くなり、影響の強さも増加してくる傾向が示された。しかし、このような一時的なマイクロ環境からの影響は母親からの影響と比べると、持続性が相対的に短いと考えられ、しかも「基本的信頼感」、「生殖性」の青年期における形成過程には有意な影響を与えないことが明らかになった。また、本論文の第4章の結果に示されたように、青年期の愛着行動における「不安」や「回避」は「アイデンティティ達成」と有意な負の相関があり、さらにその後の「親密性」の達成に有意な影響を及ぼしている。人間の特有な行動や活動における行動の特徴でもアイデンティティの形成とかかわって、さらにその後の発達主題に影響する。すなわち、アイデンティティの形成において、時間的や空間的变化にもかかわらず、影響を続けるような要素があると同時に、一時的だけに影響を及ぼすような要因も存在すると考えられる。

2. 青年期のアイデンティティの形成は能動的な発達の結果

人間の成長に伴って自己意志を、社会の要求を応じて活動範囲や生活空間を変化させ、様々な自分にとって意味付けの人物と出会うとともに、影響の受け入れは、受動的な発達から能動的な発達になる変化が起きることがある。受動的な発達とは、人間は外部から与えられたものを意識的に選択せずに受け入れることである。たとえば、生後の1年間に、赤ちゃんは口に入れるものすべてを飲み込む。一方、能動的な発達はその反対であり、個体の自由意志

を体現し、目的性を持つ自ら選択することである。たとえば、青年は未来の職業のため、専門の訓練に参加する。

このような影響に対する変化は、本論文の青年期のアイデンティティの形成過程においても読み取れる。子どもは生まれてから数年間に、母親からの影響はすべて選択することなしに受け入れ、このため、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の達成状況によって、子どもの「基本的信頼感」と「自律性」の達成は直接的に影響される。しかし、第2章の分析結果に示したように、母親の「基本的信頼感」、「自律性」と青年の「アイデンティティ達成」の関係モデルにおいて、青年自身の「基本的信頼感」、「自律性」は媒介変数として働き、母親からの影響を能動的にコントロールしている。さらに、第3章では、寮生活の大学生の「基本的信頼感」の得点の時間的変化は「寮生活雰囲気」からの影響を受けておらず、年々減少する傾向が示した。すなわち、青年期の「基本的信頼感」の達成が未来への展望と関連するので、学校外の社会環境はより重要な影響要因である。このため、大学生は最も身近な寮生活空間においても、学校外の社会環境、就職や生活状況などによって、「基本的信頼感」の状況が変化すると考えられる。

すなわち、本論文の結果により、青年期のアイデンティティの形成は能動的な発達の結果であり、重要な人物や環境の変化に積極的に適応したり、社会の状況に応じて影響を意識的に受け入れたりする可能性も示唆された。

3. 漸成発達主題の達成に有利な条件の重要性

さらに、Erikson は漸成発達の「適切な順序の範囲内」(『アイデンティティとライフ・サイクル』, p.48) があり、健康な人格発達が保証されるために、「よい家族・よい環境」が必要だと繰り返して強調した。本論文の第2章での母親の「基本的信頼感」、「自律性」と青年の「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」の間に、第3章での寮生活の雰囲気と青年の「基本的信頼感」、「自律性」、「アイデンティティ達成」、「親密性」との間にすべて有意な正の相関がある。さらに第4章では、青年期の愛着行動における「不安」と「回避」

は青年の「アイデンティティ達成」、「親密性」との間に有意な負の相関がある。すなわち、信頼感や自律性の達成レベルが高い母親、交流的しかも友愛な雰囲気、または不安感や回避の傾向が低い行動の特徴は漸成主題の発達に有利な条件である。このような条件があれば、Hartmann (1939, 1958)に提唱された「平均的に期待可能な環境」を構成させ、各発達主題は順調に達成し、うまく進むことを促進すると考えられる。

さらに、これらの研究結果を吟味すると、Erikson に提唱された漸成発達過程においての「適切な量の指導が与えられれば、発達の内的法則に従う」という原則の重要性について理解は一層深くなった。社会の歴史、文化もしくは経済の状況が異なるとしても、「適切な量の指導」や「よい家族・よい環境」のような有利な条件さえを備えれば、たとえば、母親の子育てを支援する社会システム、若い親たちにとって安定な仕事環境、さらに青年期の探索活動や試行錯誤に寛容な世論、友愛、交流的な sub-social group の雰囲気を励ます社会の価値観などで、この社会に属する青年は健康な人格がより達成され、その結果、青年たちが将来、社会の存在や進歩を支える中堅となることができるであろう。

4. 漸成発達の初期段階における発達主題の達成の重要性

本論文において、漸成発達の初期段階は1歳から3歳までの時期を指している。この時期に、「基本的信頼感」と「自律性」の獲得は主な発達主題である。この2つの主題の達成は、人格発達の土台を作り上げ、その後の発達段階におけるほかの主題の達成に関連している。さらに初期段階の主題の達成は人間の人格発達以外の心理学的特徴にも関連性があると考えられる。本論文の第2章の結果は、母親群と青年群の両方においても、「基本的信頼感」と「自律性」の得点はいずれもその後のほかの主題と有意な正の相関があることを示した。また、第6章の結果は、漸成発達の初期段階における「基本的信頼感」と「自律性」の達成はその後の青年期の愛着行動の特徴に影響を及ぼしており、この2つの主題の達成は人格発達だけではなく、人間関係にも影響することが示唆された。さらに、第5章の結果には、外見より性格を重視する男性群はこの2つの主題の得点がより高く、恋愛相手の選択基準と関連する

ことも明らかにした。

また、強調すべきことは、本論文の第2章の結果は、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の得点は青年の「基本的信頼感」と「自律性」の間に有意な正の相関があることである。すなわち、初期段階の発達主題の達成は個体自身に重要な意味があることとともに、次の世代の人格発達にも影響を与え、Erikson に述べられた「次代に引き継がれて終わる世代の循環である」(1971, p.131)ことが示唆された。このような世代間伝達により、アイデンティティの形成は単なる個人の問題ではなく、より広い意味な社会の問題であるといえるだろう。

もちろん本論文では限られた研究手法であるため、生後から3歳までの子どもの「基本的信頼感」と「自律性」の達成状況を直接に測定していない。しかし、本論文においての青年を調査対象とした複数の実証的研究を通して、初期段階の発達主題の達成の重要性を読み取ることができると考えられる。

5. アイデンティティの研究において、漸成発達理論を立場とする検討の有効性

本論文の目的は漸成発達理論を研究の理論立場として、青年期のアイデンティティの形成について検討することであった。先行研究で多用されたアイデンティティ・ステータス理論と異なって、本論文においての5つの実証的研究は青年期の第V段階に優勢になる主題の達成状況について検討すると同時に、その前後の段階における各主題の発達状況に対しても調べ、さらにこれらの主題と他の変数間の関係についても検討した。

第2章において、青年期の「アイデンティティの達成」について検討する際に、相関分析を通して、青年期前後のすべての発達主題の間に有意な正の相関があることを明らかにした。また、漸成発達の各主題の得点において、母親と青年との相関も算出し、「基本的信頼感」と「自律性」において、世代間伝達の現象があることが明らかになった。さらに、母親の「基本的信頼感」と「自律性」の達成はどのように青年の「アイデンティティ達成」に影響するかというプロセスについて、共分散構造分析を通して明らかにした。すなわち、漸成発達理論の導入により、青年自身の人格発達の主題や構成、そして相互の関係についてより深く理

解できるとともに、親世代の漸成発達主題の達成状況からの影響するメカニズムについても厳密に検討することが可能となり、アイデンティティ研究にも親子関係の研究にもより豊富な情報を提供した。

第3章では、各漸成発達主題は3年間に寮生活の雰囲気文脈において、どのように変化するかという検討を通して、「自律性」、「アイデンティティ」、「親密性」の達成の時間的変化はマイクロな環境からの影響を受けやすい傾向を持ち、それに対して「基本的信頼感」、「生殖性」の場合にはそのような傾向がないことが明らかにした。すなわち、漸成発達理論の導入によって、環境要因から青年のアイデンティティの達成への影響についてより詳しく検討することができる。

第5章では、外見より性格を重視する男性は「アイデンティティ達成」のレベルが高いこと以外、「基本的信頼感」や「自律性」の達成レベルもより高いことがわかった。この結果により、「基本的信頼感」や「自律性」の達成状況について人間関係における重要性がより明白になった。

さらに第3、6章のように、漸成発達理論のすべての発達主題から、研究の目的にあわせて1つあるいは2つの発達主題を独自の変数として、青年の行動や活動の特徴との関係を検討することができる。

さらに、漸成発達理論の導入によって、理論上の利点もある。まず、研究の視野が拡大され、青年期のアイデンティティの形成の全体像を俯瞰することができるようになった。また、各主題の達成と影響要因との間の関連性についての検討、青年期のアイデンティティ形成過程における各主題の特徴、影響要因との関係モデルにおけるメカニズムが明白に解明された。さらに、異なるカテゴリーの影響要因を同時に検討する結果として、アイデンティティ形成の原動力である心理—社会的相互作用の実像を明らかにした。

また、方法論において、本論文での漸成発達各主題の達成状況を測定する尺度はすべてS-ESDSを用いた。第2、3章の分析結果に示したように、49項目ある尺度が適度な信頼性

と因子負荷量を持っている。さらに、第4, 6章のように、全項目の尺度から、研究目的をあわせるために抽出した項目による構成した尺度「アイデンティティ達成・親密性」尺度、「青年期における基本的信頼感・自律性」尺度でも、指標が良い信頼性と弁別的妥当性があることを示した。すなわち、ESDS 尺度はアイデンティティの研究において有効な研究道具として用いられる。今後の研究において、この尺度をより活用されると期待できる。

第3節 残された課題，将来の研究課題への展望

本論文は漸成発達理論を理論の立場として、5つの実証的研究を行った。しかし、これらの研究において、いくつかの残された課題が存在している。

まず、本論文の第3章以外の研究は、調査時期や可能な測定手法が限られていることが原因で、すべて横断的研究法で行った。漸成発達の各主題は、生涯にわたって最終の統合まで発達を続けると同時に、各自の優勢になる時期がある。このため、漸成発達理論から、青年期のアイデンティティの形成過程においての各主題の関係や、影響要因との関係について検討する際に、これらの主題の達成傾向が青年期に横断的調査でも一定な程度でとらえるが、最も理想的研究方法とすれば、やはり縦断的調査である。今後の研究において、可能ならば、縦断的研究方法はより利用すべきであると考ええる。

また、本論文においての調査協力者は全て大学生である。大学生の特殊性のために、それに基づいての研究結果は青年全体の一部しか代表していない。大学生以外の青年たち、たとえば、専門学校生徒たち、高卒で就職した若者たちのアイデンティティの形成についての検討も重要である。

さらに、本論文において、アイデンティティの形成に影響する要因についての検討は、母親、寮生活や愛着行動など要因の単独な変数としての効果を調べたが、これらの要因の相互作用について触れてなかった。たとえば、寮生活する大学生と一人暮らしの大学生、そしてこれらの大学生の母親の漸成発達主題の形成状況はどのように総合的にアイデンティティの

形成を影響するののかについての検討する必要がある。

将来研究の展望について、各章の考察部分の終わりにおいてすでに述べた具体的な課題以外、総体的な研究方針に関して、主に以下の3点から課すべきだ。

第1は、漸成発達理論と Marcia のアイデンティティ・ステータス理論を統合して、青年のアイデンティティの形成に関する研究に活用する。すなわち、青年期アイデンティティの形成を着眼点として、その外在的形成状態を現象学的に調べて、さらにその前後段階の主題の達成から内在的因果論的考察を行うことである。

第2は、横断的研究法と縦断的研究法を統合して研究を行う。すなわち、青年期のアイデンティティの形成過程において、ある現象に対して、横断的研究法により、この現象の特徴や機能について検討するとともに、縦断的研究法でこの現象の起因そして変化について検討することである。

第3は、研究対象は一般の青年以外、社会に注目されている特殊なサブグループたとえば、ニート、登校拒否、無職の若者グループに対しても関心を払うことが必要であろう。このようなグループの青年たちのアイデンティティの形成における共通点と特殊な点を調べ、心理的、社会的形成要因を探索することにより、青年の心理的問題への援助と、社会的問題の解決に理論的根拠を提供できると考える。

文 献

- Adams, G. R., & Archer, S. L. (1994). Identity: A precursor to intimacy. In S. L. Archer (Ed.), *Interventions for adolescent identity*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp.193-213
- Adams, G. R., & Marshall, S. K. (1996). A developmental social psychology of identity: Understanding the person-in-context. *Journal of Adolescence*, *19*, 429-442.
- Adams, G. R., Ryan, B. A., Keating, L. (2000). Family relationships, academic environments, and psychosocial development during the university experience. *Journal of Adolescent Research*, *15*, 99-122.
- Adams, G. R., Munro, B., Doherty-Poirer, M., Munro, G., Peterson, A. R., & Edwards, J. (2001). Diffuse avoidance, normative, and informational identity styles: Using identity theory to predict maladjustment. *Identity*, *1*, 307-320.
- Akers, J. F., Jones, R. M., & Coyl, D. D. (1998). Adolescent friendship pairs: Similarities in identity status development, behaviors, attitudes, and intentions. *Journal of Adolescent Research*, *13*, 178-199.
- Archer, S. L. (1982). The lower age boundaries of identity development. *Child development*, *53*, 1551-1556.
- Archer, S. L. (1989). Gender differences in identity development: Issues of process, domain and timing. *Journal of Adolescence*, *12*, 117-138.
- Astin, A. (1973). The impact of dormitory living on students. *Educational Record*. *54*. 204-210.
- Barber, B. K., & Olsen, J. A. (1997). Socialization in context: Connection, regulation, and autonomy in the family, school, and neighborhood, and with peers. *Journal of Adolescent Research*, *12*, 287-315.
- Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in

- social psychological research: Conceptual, strategic and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.
- Belsky, J., Steinberg, L., & Draper, P. (1991). Childhood experience, interpersonal development and reproductive strategy. *Child Development*, **62**, 647-670.
- Berndt, T. J. (1982). The features and effects of friendship in early adolescence. *Child Development*, **53**, 1447-1460.
- Berzonsky, M.D. (1985). Diffusion within Marcia's identity-status paradigm: Does it foreshadow academic problems? *Journal of Youth and Adolescence*, **14**, 527-538.
- Berzonsky, M. D. (1992). Identity style and coping strategies. *Journal of Personality*, **60**, 771–788.
- Berzonsky, M. D., Kuk, L. S. (2000). Identity status, identity processing style, and the transition to university. *Journal of Adolescent Research*, **15**, 81-98 .
- Birnbaum, G. E., Orr, I., Mikulincer, M., & Florian, V. (1997). When marriage breaks up: Does attachment style contribute to coping and mental health? *Journal of Social and Personal Relationships*, **14**, 643–654.
- Black, K. A., & McCartney, K. (1997). Adolescent females' security with parents predicts the quality of peer interactions. *Social Development*, **6**, 91–110.
- Blyth, C., Simmons, R., & Zakin, D. (1985). Satisfaction with body image for early adolescent females: The impact of pubertal timing within different school environments. *Journal of Youth and Adolescence*, **14**, 227-236.

- Bookwala, J., & Zdaniuk, B. (1998). Adult attachment styles and aggressive behavior within dating relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, *15*, 175–190.
- Bosma, H. A., & Gerrits, R. S. (1985). Family functioning and identity status in adolescence. *Journal of Early Adolescence*, *5*, 69-80.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss: Vol. 3. Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brassard, A., Shaver, P. R. & Lussier, Y. (2007). Attachment, sexual experience, and sexual pleasure in romantic relationships: A dyadic approach. *Personal Relationships*, *14*, 475-493.
- Brennan, K. A., & Shaver, P. R. (1995). Dimension of adult attachment, affect regulation, and romantic relationship functioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *21*, 267-283.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult romantic attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Ed.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press, pp. 46-76.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: experiments by nature and design*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
- Brown, B. B. (2004). Adolescents' relationships with peers. In R. M. Lerner & L. Steinberg (Eds.), *Handbook of Adolescent Psychology(2nd)*, New York: Wiley. pp. 363-394.

- Buss, D. M., & Schmitt, D. P. (1993). Sexual strategies Theory: An Evolutionary Perspective on Human Mating. *Psychological review*, *100*, 204-232.
- Bylsma, W. H., Cozzarelli, C., & Sumer, N. (1997). Relation between adult attachment styles and global self-esteem. *Basic and Applied Social Psychology*, *19*, 1-16.
- Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- Byrne, B. M. (2001). *Structural equation modeling with Amos : Basic concepts, applications, and programming*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Camerena, P. M., Sargiani, P. A., & Petersen, A. C. (1990). Gender specific pathways to intimacy in early adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, *19*, 19-32.
- Campbell, W. K., Foster, C. A., & Finkel, E. A. (2002). Does self-love lead to love for others? A story of narcissistic game playing. *Journal of Personality and Social Psychology*, *83*, 340-354.
- Carnelley, K. B., Pietromonaco, P. R., & Jaffe, K. (1994). Depression, working models of others, and relationship functioning. *Journal of Personality and Social Psychology*, *66*, 127-140.
- Chen, M., & Bargh, J. A. (1999). Consequences of automatic evaluation: Immediate behavioral predispositions to approach or avoid the stimulus. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *25*, 215-224.
- Chickering, A. (1974). *Commuting versus resident students*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Chickering, A. W., & Reisser, L. (1993). *Education and identity*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Christopherson, B. B., Jones, R. M., & Sales, A. P. (1988). Diversity in reported motivations for substance use as a function of ego-identity development. *Journal of Adolescent Research*, *3*, 141-152.

- Cobb, R. J., Davila, J., & Bradbury, T. N. (2001). Attachment security and marital satisfaction: The role of positive perceptions and social support. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *27*, 1131–1143.
- Coleman, J. C. (1974). *Relationships in Adolescence*. Boston & London: Routledge and Kegan Paul.
- Collins, A., & Sroufe, A. (1999). Capacity for intimate relationships: A developmental construction, in W. Furman, B. B. Brown, & C. Feiring(Eds.), *The Development of Romantic Relationships in Adolescence* . London: Cambridge University Press, pp. 125-147.
- Collins, N.L., & Read, S. J. (1990). Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, *58*, 644-663.
- Collins, N. L., Ford, M. B., Guichard, A. C., Feeney, B. C. (2006). Responding to need in intimate relationships: Normative processes and individual differences. In M.Mikulincer & G. Goodman (Ed.), *The Dynamics of Love: Attachment, Caregiving, and Sex*. New York: Guilford Press. pp. 149-189.
- Collins, W. A., & Steinberg, L. (2006). Adolescent development in interpersonal context. In W. Damon & R. M. Lerner & N. Eisenberg (Eds.), *Handbook of child psychology: 3. Social, emotional, and personality development* (6th). Hoboken, NJ: Wiley. pp. 1003-1067
- Cook, J. L., & Jones, R. M. (2002). Congruency of identity style in married couples. *Journal of Family Issues*, *23*, 912-926.
- Cooper,C.R., & Grotevant,H.D.(1987).Gender issues in the interface of family experience and adolescents'frienddhip and dating identity. *Journal of Youth an d Adolescence*, *16*, 247-264.

- Cooper, C. R. (1994). Cultural perspectives on continuity and changes in adolescents' relationships. In R. Montemayor, G. R. Adams, & T. P. Gullotta (Eds.), *Personal relationships during adolescence (Advances in Adolescent Development)*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp. 216-235.
- Cooper, M. L., & Sheldon, M. S. (2002). Seventy years of research on personality and close relationships: Substantive and methodological trends over time. *Journal of Personality*, *70*, 783-812.
- Côté, J. E., & Levine, C. (1988). A critical examination of the ego identity status paradigm. *Developmental Review*, *8*, 147-184 .
- Craig-Bray, L., Adams, G. R., & Dobson, W. R. (1988). Identity formation and social relations during late adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, *17*, 173-187.
- Cramer, P. (2003). Personality change in later adulthood is predicted by defense mechanism use in early adulthood. *Journal of Research in Personality*, *37*, 76-104.
- Cross, H., & Allen, J. (1970). Ego identity status, adjustment, and academic achievement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *34*, 288.
- 答会明. (2002). 父母教养方式与孩子的自信、自尊、自我效能及心理健康水平的相关研究. *中国健康教育*, *8*, 483~486. (親の養育方法は子どもの自信、自尊心、自己効力感及び心理的健康レベルとの相関)
- Darling-Fisher, C., & Leidy, N. K. (1988). Measuring Eriksonian development in the adult: The Modified Erikson's Psychosocial Stage Inventory. *Psychological Reports*, *62*, 747-754.
- David, I. B., Jane, A. M., Clint, A. S., Suleka, P., & Garrett, L. S. (1997). Ego identity status and reported alcohol consumption: a study of first-year college students. *Journal of Adolescence*, *20*, 209-218.
- Davila, J., & Bradbury, T. N. (2001). Attachment insecurity and the distinction between

- unhappy spouses who do and do not divorce. *Journal of Family Psychology*, **15**, 371–393.
- Del Giudice, M. (2009). Sex, attachment, and the development of reproductive strategies. *Behavioral and Brain Science*, **32**, 1-67.
- Del Giudice, M. (2011). Sex differences in romantic attachment: A meta-analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **37**, 193-214.
- Delaney, M. E. (1996). Across the transition to adolescence: Qualities of parent-adolescent relationships and adjustment. *Journal of Early Adolescence*, **16**, 274-300.
- Doherty, R. W., Hatfield, E., Thompson, K., & Choo, P. (1994). Cultural and ethnic influences on love and attachment. *Personal Relationships*, **1**, 391–398.
- Domino, G., & Affonso, D.D. (1990). A personality measure of Erikson's life stages: The inventory of psychosocial balance. *Journal of personality assessment*, **54**, 576-588.
- Donovan, J. M. (1975). Identity status and interpersonal style. *Journal of Youth and Adolescence*, **4**, 37-55.
- Draper, P., & Harpending, H. (1982). Father absence and reproductive strategy: an evolutionary perspective. *Journal of Anthropological Research*, **38**, 255–273.
- Dryer, p. H. (1994). Designing curricular identity interventions for secondary schools. In S. L. Archer (Ed.), *Interventions for adolescent identity development*. Thousand Oaks, CA: Sage. pp.121-140.
- Duemmler, S. L., & Kobak, R. (2001). The development of commitment and attachment in dating relationships: Attachment security as relationship construct. *Journal of Adolescence*, **24**, 401–415.
- Dunphy, D. C. (1963). The social structure of urban adolescent peer groups. *Sociometry*, **26**, 230-246.

- Dworkin, J. (2005). Risk taking as developmentally appropriate experimentation for college students. *Journal of Adolescent Research*, 20, 219–241.
- Elizur, Y., & Mintzer, A. (2001). A framework for the formation of gay male identity: Processes associated with adult attachment style and support from family and friends. *Archives of Sexual Behavior*, 30, 143–167.
- Erikson, E. H. (1959, 1980). *Identity and the life cycle*. New York : Norton & Company, (西平直・中島由恵訳(2011). *アイデンティティとライフサイクル* 東京 : 誠信書房.)
- Erikson, E.H. (1950, 1963). *Child and society*. NewYork: Norton. (仁科弥生訳(1977). *幼児と社会* 東京 :みすず書房.)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. NewYork: Norton. (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理訳(1973). *アイデンティティ : 青年と危機* 東京 :金沢文庫.)
- Erikson, E. H. (1958). *Young man Luther: A study in psychoanalysis and history* . NewYork: Norton & Company . (西平直訳(2002) *青年ルター* 東京 :みすず書房.)
- Erikson, E. H. (1964). *Insight and responsibility*. New York: Norton. (鑪 幹八郎訳(1971) *洞察と責任—精神分析の臨床と倫理* 東京 : 誠信書房.)
- Fadjukoff, P. & Pulkkinen, L. (2006). Identity formation, personal control over development, and well-being. In L. Pulkkinen, J. Kaprio & R. J. Rose (Eds.), *Socioemotional development and health from adolescence to adulthood* . New York: Cambridge University Press. pp. 265-285
- Feeney, J. A. (1996). Attachment, caregiving, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, 3, 401–416.
- Feeney, J. A., & Noller, P. (1990). Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 281–291.
- Feeney, J. A., Noller, P., & Callan, V. J. (1994). Attachment style, communication, and

- satisfaction in the early years of marriage. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships: Attachment processes in adulthood*. Vol.5, London: Jessica Kingsley, pp. 269–308.
- Feeney, J. A., Noller, P., & Roberts, N. (2000). Attachment and close relationships. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close Relationships*, California: Thousand Oaks, pp. 185-201.
- Festinger, L., Schachter, S., & Back, K. (1950). *Social pressures in informal groups: A study of human factor in housing*. Stanford: Stanford University Press.
- Field, T. (1987). Effects of early separation, interactive deficits, and experimental manipulations on infant-mother face-to-face interaction. *Child Development*, **48**, 783-771.
- Flanagan, C., Schulenberg, J., & Fuligni, A. (1993). Parent-adolescent relationships during the college years. *Journal of Youth and Adolescence*, **22**, 171-189.
- Fletcher, G. J. O., Simpson, J. A., Thomas, G., & Giles, L. (1999). Ideals in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 72-89.
- Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press.
(遠藤利彦・北山修訳(2008). *愛着理論と精神分析* 東京：誠信書房)
- Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. (2000). An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 350–365.
- Fraley, R. C., Waller, N. G., & Brennan, K. A. (2000). An item response theory analysis of self-report measures of adult attachment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 350-365.
- Fromm, E. (1956). *The Art of Loving*. New York: HarperCollins. (鈴木晶訳(1991). *愛する*

ということ 東京：紀伊国屋書店)

- Furman, W., Simon, V. A., Shaffer, L., & Bouchey, H. A. (2002). Adolescents' working models and styles for relationships with parents, friends, and romantic partners. *Child Development, 73*, 241-255.
- Galinsky, M. D., & Fast, I. (1966). Vocational choice as a focus of the identity search. *Journal of Counseling Psychology, 13*, 89-92.
- George, C, Kaplan, N, & Main, M. (1985). *Adult Attachment Interview*. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- Gilligan, C. (1979). Woman's place in man's life cycle. *Harvard Review, 49*, 431-446.
- Gilligan, C. (1982). In a different voice: Women's conceptions of the self and of morality. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Gilligan, C., Ward, J. V., Taylor, J. M., & Bardige, B. (1988). *Mapping the moral domain*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Goldscheider, R., & Goldscheider, C. (1999). *The changing transition to adulthood: Leaving and returning home*. Thousand Oaks, CA: Sage Publication.
- Grotevant, H. & Thorbecke, W. (1982). Occupational identity formation. *Developmental Psychology, 18*, 396-405.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R., (1985). Pattern of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development, 56*, 415-428.
- Grotevant, H. D., & Cooper, C. R., (1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development, 29*, 82-100.
- Guerrero, L. K. (1996). Attachment-style differences in intimacy and involvement: A test

- of the four-category model. *Communication Monographs*, **63**, 269–292.
- Hamrick, F. A., Evans, N. J., & Schuh, J. H. (2002). *Foundations of student affairs practice: How philosophy, theory, and research strengthen educational outcomes*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Hartmann, H. (1939, 1958). *Ego Psychology and the Problem of Adaptation*. New York: International Universities Press,
- Hatfield, E. (1982). What do women and men want from love and sex? In E. R. Allgeier & N. B. McCormick (Eds.), *Changing boundaries: Gender roles and sexual behavior*, Palo Alto, CA: Mayfield Publishing, pp.106-134.
- Hatfield, E. & Sprecher, S. (1986). Measuring passionate love in intimate relations. *Journal of Adolescence*, **9**, 383-410.
- Hawken, L., Duran, R. L., & Kelly, L. (1991). The relationship of interpersonal communication variables to academic success and persistence in college, *Communication Quarterly*, **39**, 297-308.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511–524.
- Hinde, R. A. (1997). *Relationships: A dialectical perspective*. Psychology Press, East Sussex: UK
- 平石賢二. (2000). 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連. *家族心理学研究*, **14**, 41-59.
- Holland, J. L., Holland, J.E. (1977). Vocational indecision: More evidence and speculation. *Journal of Counseling Psychology*, **24**, 404-414.
- Howard, J. A., Philip, B., & Pepper, S. (1987). Social or evolutionary theories?: Some observation on preference in human mate selection. *Journal of Personality and Social*

Psychology, 53, 194-200.

- Jacobson, E. (1964). *The self and the object world*. New York: International universities press. (伊藤洸訳 (1981). *自己と対象世界* 東京: 岩崎学術出版社.)
- Jaffe, M. L. (1998). *Adolescence*. New York: Wiley.
- Jakobsen, K. (2001). Employment and the reconstruction of self. A model of space for maintenance of identity by occupation. *Journal of Occupational Therapy*, 8, 40-48.
- James F. Akers, J. F., Jones, R., & Coyl, D. (1998). Adolescent Friendship Pairs. *Journal of Adolescent Research*, 13, 178-201.
- Jones, R. M., & Hartmann, B. R. (1988). Ego identity: Developmental differences and experimental substance use among adolescents. *Journal of Adolescence*, 11, 347-360.
- Jones, J. T., & Cunningham, J. D. (1996). Attachment styles and other predictors of relationship satisfaction in dating couples. *Personal Relationships*, 3, 387-399.
- Jordan., A. G. Kaplan, J. B. Miller, I. P. Stiver & J. L. Surrey (Eds.), *Women's growth in connection: Writings from the Stone Center*. New York: Guilford Press. pp. 51-66.
- Jordyn, M. & Byrd, M. (2003). The relationship between the living arrangements of university students and their identity development. *Adolescence*, 38, 267-279.
- Jung, C. G. (1969). *The structure of the psyche*. In *The collected works of C.G. Jung* (Vol. 8). Princeton, NJ: Princeton University Press. (Original work published 1931)
- Kacerguis, M.S., & Adams, G. R. (1980). Erikson stage resolution: The relationship between identity and intimacy. *Journal of Youth and Adolescence*, 9, 117-126.
- 金政 裕司 (2003) 成人愛着スタイル研究の概観と今後の展望. *対人社会学研究*, 3, 17-28
- 金政祐司.(2007). 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達: 愛着は繰り返されるのか. *心理学研究*, 78, 398-406.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹.(2000). 日本人母子における愛着

の世代間伝達. *教育心理学研究*, **48**, 323-332.

Kegan, R. (1994). *In over our heads: The mental demands of modern life*. Cambridge, MA:

Harvard University Press.

Kirkpatrick, L. A., & Davis, K. E. (1994). Attachment style, gender, and relationship stability: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 502-512.

Kirkpatrick, L. A., & Hazan, C. (1994). Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, **1**, 123-142.

Kirkpatrick, L. A. (1998) Evolution, pair bonding, and reproductive strategies: A reconceptualization of adult attachment. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Ed.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press, New York: Guilford Press. pp. 353-393.

Klohnen, E. C., & Bera, S. (1998). Behavioral and experiential patterns of avoidantly and securely attached women across adulthood: A 31-year longitudinal perspective.

Journal of Personality and Social Psychology, **74**, 211-223.

Klohnen, E.C., & Mendelsohn, G. (1998). Partner selection for personality characteristic: A Couple-centered approach. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 268-278.

Kobak, R., & Sceery, A. (1988). Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child Development*, **59**, 135-146.

Kobak, R., Cole, H. E., Ferenz-Gillies, R., Fleming, W. S., & Gamble, S. (1993). Attachment and emotion regulation during mother-teen problem solving: A control theory analysis. *Child Development*, **64**, 231-245.

厚生労働省. (2010). 若者雇用関連データ. 厚生労働省.

(<http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/12.html>) (2012年4月1日19時34分)

- Kroger, J. (1985). Separation-individuation and ego identity status in New Zealand university students. *Journal of Youth & Adolescence*, **14**, 133-147.
- Kroger, J. (1996). *Identity in adolescence (2nd)*. London: Routledge.
- Kroger, J. (2000). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc. (榎本博明訳(2005). *アイデンティティの発達 青年期から成人期* 東京: 北大路書房.)
- 久保田 まり(1995). *アタッチメントの研究—内的ワーキング・モデルの形成と発達* 東京: 川島書店
- Le Poire, B. A., Shepard, C., & Duggan, A. (1999). Nonverbal involvement, expressiveness, and pleasantness as predicted by parental and partner attachment style. *Communication Monographs*, **66**, 293-311.
- Lerner, R.M., & Busch-Rossnagel, N. (1981). Individuals as producers of their development: Conceptual and empirical bases. In R. M. Lerner & N. A. Busch-Rossnagel (Eds.), *Individuals as producers of their development: A life-span perspective*. New York: Academic. pp.1-36.
- Li, H. & Lin, C. (2003). College stress and psychological well-being of Chinese college students. *Acta Psychologica Sinica*, **35**, 222-230.
- Lichtwarck-Aschoff, A., van Geert, P., Bosman, H., & Kunnen, S. (2008). Time and identity: A framework for research and theory formation. *Developmental Review*, **28**, 370-400.
- Lopez, F. G., & Gormley, B. (2002). Stability and change in adult attachment style over the first-year college transition: Relations to self-confidence, coping, and distress patterns. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 355-364.
- Luo, S., & Klohnen, E. (2005). Assortative mating and marital quality in newlyweds: A

- couple-centered approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 304-326.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marcia, J.E. (1976). Identity six years after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, **5**, 145-150.
- Marcia, J. E. (1993a). The ego identity status approach to ego identity.: J.E.Marcia, A.S. Waterman, D.R .Matteson, S.L.Archer, and J.L .Orlofsky, (Eds.) *Ego Identity: A Handbook for Psychosocial Research*. New York: Spring-Verlag. pp. 1-21.
- Marcia, J.E. (1993b). The relation roots of identity. In J. Kroger (Eds.), *Discussions on ego identity*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc. pp. 101-120.
- Marcia, J. E. (2007). Theory and measure: The identity status interview. In M. Watzlawik & A. Born (Eds.), *Capturing identity: Quantitative and qualitative methods*. Lanham, MD: University Press of America. pp. 1-14.
- 松井 豊・山本真理子 (1985) 異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響
社会心理学研究, **1**, 9-14.
- Matteson, D. R. (1977). Exploration and commitment: Sex differences and methodological problems in the use of identity status categories. *Journal of Youth and Adolescence*, **6**, 353-374.
- Maxwell, K. A. (2002). Friends: The role of peer influence across adolescent risk behaviors. *Journal of Youth and Adolescence*, **31**, 267-277.
- Mayseless, O. (1993). Gifted adolescents and intimacy in close same-sex friendships. *Journal of Youth and Adolescence*, **22**, 135-146.
- Mead, G.H. (1934). *Mind, self, and society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Meeus, W. (1993). Occupational identity development, school performance, and social

- support in adolescence: Findings from a Dutch study. *Adolescence*, **28**, 809-818.
- Meeus, W., Iedema, J., Maassen, G., & Engels, R. (2005). Separation-Individuation Revisited: On the Interplay of Parent-Adolescent Relations, Identity and Emotional Adjustment in Adolescence, *Journal of Adolescence*, **28**, 89-106.
- Michell, L. (1997) Loud, sad or bad: young people's perceptions of peer groups and smoking. *Health Education Research*, **12**, 1-14.
- Michell, L. & Amos, A. (1997) Girls, pecking order and smoking. *Social Science and Medicine*, **44**, 1861-1869.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). Contributions of attachment theory and research to motivation science. In J. Shah & W. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science*. New York: Guilford Press. pp. 201-216.
- Miller, J. B. (1991). The development of women's sense of self. In J. V. Jordan., A. G. Kaplan., J. B. Miller., I. P. Stiver & J. L. Surrey(Eds.), *Women's Growth in Connection: Writings from the Stone Center*. New York: Guilford. pp.11-26.
- Mitchell, W.A., Crenshaw, P., Bunton, R., & Green, E. (2001). Situating young people's experiences of risk and identity. *Health, Risk, and Society*, **3**, 217-233.
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・茂垣まどか・大野千里. (2003). Ochse&Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み. *立教大学心理学研究*, **45**, 65-76.
- 三好昭子 (2004) 伝記資料による人格形成過程の分析—谷崎潤一郎の否定的アイデンティティ形成について— 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 640.
- 三好昭子 (2006) 芥川龍之介の有能感の欠如についての伝記分析 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集, 200.
- 茂垣まどか (2006) エーリッヒ・ケストナーのアイデンティティ形成と理想視の関連につ

- いての伝記分析 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 210.
- Montgomery, M. J., & Sorrell, G. T. (1998). Love and dating experience in early and middle adolescence: Grade and gender comparisons. *Journal of Adolescence*, *21*, 677-689.
- 森本 文子 (2008). 大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連 九州大学心理学研究, *9*, 205-213.
- Mosbach, P. & Leventhal, H. (1988) Peer group identification and smoking: implications for intervention. *Journal of Abnormal Psychology*, *97*, 238-245.
- Munly, P. H. (1975). Erik Erikson theory of personal development and vocational behavior, *Journal of Counseling Psychology*, *22*, 314-319.
- Muuss, R.E. (2006). *Theories of adolescence* (6th). New York: McGraw Hill.
- Newman, B., & Newman, P. (2005). *Development through life: A psychosocial approach* (9th). Belmont, CA: Wadsworth Publishing.
- 西平直喜 (1978) アイデンティティ. *青年心理*, *7*, 165-166.
- 西平直喜 (1981) *友情・恋愛の探求* 東京: 大日本図書.
- 西平直喜 (1981a) *伝記に見る人間形成物語 1: 幼い日々にかいた心の詩* 東京: 有斐閣.
- 西平直喜 (1983) *青年心理学方法論* 東京: 有斐閣.
- 西平直喜 (1990) *成人 (おとな) になること: 生育史心理学から* 東京: 東京大学出版会.
- 西平直喜 (1996) *生育史心理学序説—伝記研究から自分史制作へ* 東京: 金子書房.
- 西平直喜 (2004) *偉い人とはどういう人か* 東京: 北大路書房.
- Noddings, N. (1983). Formal modes of knowing. In E. Eisner (Eds.), *Learning and teaching the ways of knowing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Noftle, E. E., & Shaver, P. R. (2006). Attachment dimensions and the Big Five personality

- traits: Associations and comparative ability to predict relationship quality. *Journal of Research in Personality*, 40, 179–208.
- Noller, P. (2005). Attachment insecurity as a filter in the decoding and encoding of nonverbal behavior in close relationships. *Journal of Nonverbal Behavior*, 29, 171–176.
- Nurmi, J. E. (1989). Planning, motivation, and evaluation in orientation to the future: A latent structure analysis. *Journal of Psychology*, 30, 64–71.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 *教育心理学研究*, 44, 55-65.
- Ochse, R., & Plug, C. (1986). Cross-cultural investigation of the validity of Erikson's theory of personality development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1240-1252.
- 岡堂哲雄.(2008). 総括「家族のライフサイクルと危機管理の視点」. 高橋靖恵.(編). *家族のライフ・サイクルと心理臨床*. 東京: 金子書房. pp. 103-132.
- 岡本祐子.(1995). 人生半ばを越える心理. 南博文・やまだようこ(編) *生涯発達心理学: 5 老いることの意味*. 東京: 金子書房. pp. 41-80.
- 岡太彬訓・今泉忠 (1994). *パソコン多次元尺度構成法* 共立出版.
- 奥田秀宇 (1990) 恋愛における身体的魅力の役割. *心理学評論*, 33, 373-390.
- Ong, A., Phenney, J., & Dennis, J. (2006). Competence under challenge: Exploring the protective influence of parental support and ethnic identity in Latino college students. *Journal of Adolescence*, 29, 961-979.
- 大野 久 (1995) *青年期の自己意識と生き方* 講座生涯発達心理学 4 自己への問い直し: 青年期 東京 :金子書房. 89–123.
- 大野 久 (1996) ベートーヴェンのハイリグンシュタットの遺書の「自我に内在する回復力」

- からの分析. *青年心理学研究*, 8, 17-26.
- 大野 久 (1998) 伝記分析の意味と有効性. *青年心理学研究*, 10, 67-71.
- 大野 久(2007). 恋愛と男性アイデンティティ 榎本 博明 (編) セルフ・アイデンティティ
—拡散する男性像— (現代のエスプリ別冊) 東京: 至文堂. pp. 127-136.
- 大野 久 (編著) (2010). エピソードでつかむ青年心理学 シリーズ生涯発達心理学 4. 東京 :
ミネルヴァ書房.
- 小塩 真司 (2005). *研究事例でSPSSとAMOSによる心理・調査データ解析* 東京: 東京図
書.
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. (1973). Ego identity status and the intimacy
versus isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 27, 211—219.
- Orlofsky, J. (1978). Identity formation, achievement, and fear of success in college men
and women. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 49-62.
- Papini, D. R., Sebbey, R. A., & Clark, S. (1989). Affective quality of family relations and
adolescent identity exploration. *Adolescence*, 24, 457-466.
- Pascarella, E., Terenzini, P. T. (1991). *How college affects students: findings and
insights from twenty years of research*. SF: Jossey-Bass Publishers.
- Pascarella, E., Bohr, L., Nora, A., Zusman, B., Inman, P., & Desler, M. (1993). Cognitive
Impacts of Living on Campus Versus Commuting to College. *Journal of College
Student Development*, 34, 216-219.
- Perosa, L. M., Perosa, S. L., & Tam, H. P. (1996). The contribution of family structure and
differentiation to identity development in females. *Journal of Youth and Adolescence*,
25, 817-837.
- Phinney, J.S. & Alipuria, L.L. (1996). At the interface of culture Multiethnic/multiracial high school
and college students. *Journal of Social Psychology*, 2, 139- 159.

- Podd, M. H., Marcia, J. E., Rubin, B. (1970). The effects of ego identity status and partner perception on a prisoner's dilemma game. *The Journal of Social Psychology*, **82**, 117-126.
- Raphael, D., Feinberg, R., & Bachor, D. (1987). Student teachers' perceptions of the identity formation process. *Journal of Youth and Adolescence*, **16**, 331-344.
- Rasmussen, J. E. (1964). The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Regan, P. C. (1998). What if you can't get what you want? Willingness to compromise ideal mate selection standards as a function of sex, mate value, and relationship context. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1294-1303.
- Ridge, S. R., & Feeney, J. A. (1998). Relationship history and relationship attitudes in gay males and lesbians: Attachment style and gender differences. *Australian and New Zealand Journal of Psychiatry*, **32**, 848-859.
- Rice, F.P. (1992). *The adolescent: Development, relationships, and culture*. Boston: Allyn & Bacon.
- Rindfuss, R. R. (1991). The young adult years: Diversity, structural change and fertility. *Demography*, **28**, 493-512.
- Roker, D., & Banks, M. H. (1993). Adolescent identity and school type. *British Journal of Psychology*, **84**, 297-300.
- Rose, D. N., & Bond, M. J. (2008). Identity stress and substance abuse among young adults. *Journal of Substance Use*, **13**, 268-282.
- Rubin, Z. (1973). *Liking and loving: An invitation to social psychology*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Sanderson, C.A., & Cantor, N. (1995). Social dating goals in late adolescence: Implications

- for safer sexual activity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1121-1134.
- Sanderson, C. A., & Cantor, N. (2001). The association of intimacy goals and marital satisfaction: A test of four mediational hypotheses. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1567-1577.
- Schachner, D. A., Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2005). Patterns of nonverbal behavior and sensitivity in the context of attachment relationships. *Journal of Nonverbal Behavior*, **29**, 141-169.
- Scharfe, E. & Bartholomew, K. (1994) Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, **1**, 23-43.
- Schultheiss, D. P., & Blustein, D. L. (1994). Contributions of family relationship factors to the identity formation process. *Journal of Counseling & Development*, **73**, 159-166.
- Sharabany, R., Gershoni, R., & Hofman, J. A. (1981). Girlfriend, boyfriend: Age and sex differences in intimate friendship. *Developmental Psychology*, **17**, 800-808.
- Shaver, P. R., & Brennan, K. A. (1992). Attachment styles and the "Big Five" personality traits: Their connections with each other and with romantic relationship outcomes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 536-545.
- Shaver, P., & Hazan, C. (1987). Being lonely, falling in love: Perspectives from attachment theory. Special Issue: Loneliness: Theory, research, and applications. *Journal of Social Behavior and Personality*, **2**, 105-124.
- 下山 晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 *教育心理学研究*, **34**, 20-30.
- Shulman, S., Laursen, B., Kalman, Z., & Karpovsky, S. (1997). Adolescent intimacy revisited. *Journal of Youth and Adolescence*, **26**, 597-618.
- Silbereisen, R. K., & Noack, P. (1990). Adolescents' orientations for development. In H. A. Bosma & A. E. Jackson (Eds.) *Adolescence and its social worlds*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 67-94.

- Sibley, C. G., Fischer, R., & Liu, J. H. (2005). Reliability and validity of the revised Experiences in Close Relationships (ECR-R) self-report measure of adult romantic attachment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *31*, 1524-1536.
- Simpson, J. A. (1990). Influence of attachment styles on romantic relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 971-980.
- Simpson, J. A. & Gangestad, S. W. (1992). Sociosexuality and romantic partner choice. *Journal of Personality*, *60*, 31-51.
- Simpson, J.A. & Harris, B.A. (1994). *Interpersonal attraction: Perspectives on close relationships*. Needham Heights MAUS.
- Sperling, M. (1994). *The major neuroses and behavior disorders in children (2nd)*. Northvale, NJ: Jason Aronson Inc.
- Sternberg, R. J. & Barnes, M.L. (1988). *The psychology of love*. New Haven: Yale University Press.
- Surrey, J.L. (1991). The "Self-in-relation:" A theory of women's development. In J.V. Jordan, A.G. Kaplan, J.B. Miller, I.P. Stiver, & J.L. Surrey (Eds.), *Women's growth in connection: Writings from the Stone Center*. New York: Guilford Press. pp. 51-66.
- Sussman, S., Dent, C. W., McAdams, L. A., Stacy, A. W., Burton, D. & Flay, B. R. (1994) Group self-identification and adolescent cigarette smoking: a 1-year prospective study. *Journal of Abnormal Psychology*, *103*, 576-580.
- 谷 冬彦. (2001). 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成. *教育心理学研究*, *49*, 265-273.
- Terman, L. M. (1938). *Psychological factors in marital happiness*. New York: McGraw-Hill.
- Tesch, S. A., & Whitbourne, S.K. (1982). Intimacy and identity status in young adults. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 1041-1051.

豊田 秀樹 (2007). 共分散構造分析 “AMOS 編” ——構造方程式モデリング—— 東京 : 東京図書.

Treboux, D., Crowell, J. A., & Waters, E. (2004). When “new” meets “old”: Configurations of adult attachment representations and their implications for marital functioning. *Developmental Psychology*, *40*, 295–314.

Tucker, J. S., & Anders, S. L. (1998). Adult attachment style and nonverbal closeness in dating couples. *Journal of Nonverbal Behavior*, *22*, 109-124.

Valliant, P. M., & Scanlan, P.(1996). Personality, living arrangements, and alcohol use by first year university students. *Social Behavior and Personality*, *24*, 151-156.

Van Hoof, A. (1999). The identity status field re-reviewed: An update of unresolved and neglected issues with a view on some alternative approaches. *Developmental Review*, *19*, 497–556.

Walster, E., Aronson, E., Abrahams, D., & Rottman, L.(1996). Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, *4*, 508-516.

渡邊賢二・平石賢二・信太寿理.(2009). 母親の養育スキルと子どもの母子相互信頼感, 心理的適応との関連. *家族心理学研究*, *23*, 12-22.

Waters, E., Merrick, S., Treboux, D., Crowell, J., & Albersheim, L. (2000). Attachment security in infancy and early adulthood: A twenty-year longitudinal study. *Child Development*, *71*, 695-702.

Waterman, A. S., Geary, P. S., & Waterman, C. K. (1974). Longitudinal study of changes in ego identity status from the freshman to the senior year at college. *Developmental Psychology*, *10*, 387-392.

Waterman, A. S. (1982). Identity development from adolescence to adulthood: An

- extension of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, 18, 341-358.
- Waterman, A. S. (1999). The problem of selectivity in intrinsic motivation and identity formation. Manuscript submitted for publication.
- Weinman, L.L., & Newcombe, N. (1990). Relational aspects of identity: Late adolescents' perceptions of their relationship with parents. *Journal of Experimental Child Psychology*, 50, 357-369.
- Winch, R.F. (1958). *Mate selection*. New York: Harper.
- Whisman, M. A., & Allan, L. E. (1996). Attachment and social cognition theories of romantic relationships: Convergent or complementary perspectives? *Journal of Social and Personal Relationships*, 13, 263-278.
- Winstead, B., Derlega, V. J., & Rose, S. (1997). *Gender and Close Relationships*. New Delhi, London: Sage Publications, Inc.
- 山田昌弘.(2005). 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く。 東京: 筑摩書房。
- Youniss, J., & Smollar, J. (1985). Adolescent relations with mothers, fathers, and friends. Chicago: University of Chicago Press.
- 山内星子.(2010). 母親の感情特性が青年の感情特性に与える影響 : 感情のデュアルプロセスモデルの枠組みから *発達心理学研究*, 21, 287-295.
- Zani, B. (1993). Dating and interpersonal relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. pp. 95-119.
- Zayas, V., & Shoda, Y. (2007). Predicting preference for dating partners from past experiences for psychological abuse: Identifying the psychological ingredients of situations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 123-138.

Zimmer-Gembeck, M.J., & Petherick, J. (2006). Intimacy dating goals and relationship satisfaction during adolescence and emerging adulthood: Identity formation, age and sex as moderators, *International Journal of Behavioral Development*, 30, 167-177.

张晓泳 胡吉省 吕瑞芳(2005). 浅谈新生心理特点及其适应能力的提高 *牡丹江师范学院学报*, 6, 75-76. (大学新入生の心理的特徴と適応能力の改善について)

資 料

本論文で作成，使用した質問紙。

1. S-ESDS(the simplified version of Oche & Plug's Erikson and Social-Desirability scale)尺度

以下の項目には、4 = 「非常にあてはまる」、3 = 「ややあてはまる」、2 = 「あまりあてはまらない」、1 = 「まったくあてはまらない」の四つの選択肢の中から、最も自分によく当てはまると思うものを一つ選び、その番号に○印をつけてください。

1. 私は生きている間には、自分がしたいことを成し遂げられると思う。 4-3-2-1
2. 私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする。 4-3-2-1
3. 自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい。 4-3-2-1
4. 私は自分の能力を最大限に生かしている。 4-3-2-1
5. 私って本当はどんな人間なのかわからない。 4-3-2-1
6. 本当の私のことを理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。 4-3-2-1
7. 結局のところ子育ては、楽しみよりもむしろ重荷だと思う。 4-3-2-1
8. 私は、誰に対しても同じように丁寧に接している。 4-3-2-1
9. 私は人から信用されていないように思う。 4-3-2-1
10. 自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする。 4-3-2-1
11. 私は人と競争（することで自分の能力を発揮）することを楽しむ。 4-3-2-1
12. 私のしたことを（人が見たら）人ならもっとうまくできたのではないかと、決まり悪い思いをする。 4-3-2-1
13. 私は、自分に合った生き方をしていると思う。 4-3-2-1
14. 私は人とプライベートなことを話すことがある。 4-3-2-1
15. 私は自分が死んだ後まで残るようなことは、これまで何もしてこなかったと思う。 4-3-2-1
16. 私は、誰か人を嫌いになることがある。 4-3-2-1
17. 私は、元気がないと思う。 4-3-2-1
18. 友だちから非難されるのではないかと心配になる。 4-3-2-1
19. 私は自分が計画したことを実行して、それを成功させる自信がある 4-3-2-1
20. 何かをやろうと思っても、私にはそれを始めるほどのエネルギーがない。 4-3-2-1

21. 私は、私であることに誇りを感じている。 4-3-2-1
22. 私はこの世の中で、ひとりぼっちのように感じる。 4-3-2-1
23. 私は、人が成長しようとしていることに役立つようとしている。 4-3-2-1
24. 私は人の陰口をいう。 4-3-2-1
25. 人類って素晴らしいと思う。 4-3-2-1
26. 穴があったら入りたいとか、人前から消えてなくなりたいと思うことがある。 4-3-2-1
27. 私は好奇心や探究心が旺盛だ。 4-3-2-1
28. 私には能力がないので、人生で本当にしたいことができないような気がする。 4-3-2-1
29. 私は、のけ者にされているように感じる。 4-3-2-1
30. 私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。 4-3-2-1
31. 小さい子どもの世話は楽しい。 4-3-2-1
32. 「あの人は自分より下だ (劣る)」と思うことがある。 4-3-2-1
33. 私の人生には何かが足りないと思う。 4-3-2-1
34. 誰かが、私の欠点に気づいてしまうような気がする。 4-3-2-1
35. 人と競争するとき、私は勝つことに一生懸命になる。 4-3-2-1
36. どうせ失敗するだろうから、難しいことは避けてとおる。 4-3-2-1
37. 人生に望むものが定まらない。 4-3-2-1
38. 誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。 4-3-2-1
39. 私は、人生を無益に過ごしていると感じる。 4-3-2-1
40. 私は、誰に対しても親切な配慮する。 4-3-2-1
41. 人は信用できるものだ。 4-3-2-1
42. 私は意志が強い。 4-3-2-1
43. (日頃) 私はわくわくするようなプランを立てている。 4-3-2-1
44. 自分には能力があると思う。 4-3-2-1
45. 私のことを人がどう思っているか、よくわからない。 4-3-2-1
46. 人に自分のことをさらけ出すと、不安になることがある。 4-3-2-1
47. 私は、人によい影響を与えている。 4-3-2-1
48. 私が失敗したことに誰かが成功すると、嫉妬を感じる。 4-3-2-1
49. 私の未来は明るいと思う。 4-3-2-1
50. 人の意見に賛成できないとき、それを相手に伝える。 4-3-2-1

51. 私は何かをする際に、新しい方法を試してみることにためらいを感じる 4-3-2-1
52. 私は、何かやり遂げられるような気がする。 4-3-2-1
53. 私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。 4-3-2-1
54. 素で（飾らないで）付き合える相手がいる。 4-3-2-1
55. 私は、将来まで残るような価値あることをしている。 4-3-2-1
56. 私は何かから逃れたくて、うそをつく。 4-3-2-1

注：本尺度に、第 8, 16, 24, 32, 40, 48, 56 項目は「社会望ましき」を測定するための項目である

2. 中国大学生寮生活雰囲気尺度

以下の項目には、5=「非常にあてはまる」、4=「ややあてはまる」、3=「どちらでもない」、2=「あまりあてはまらない」、1=「まったくあてはまらない」の5つの選択肢の中から、最も自分の寮の生活雰囲気によく当てはまると思うものを一つ選び、その番号に○印をつけてください。

- | | |
|---|-----------|
| 1. 寮のメンバーたちはよく交流する。 | 5-4-3-2-1 |
| 2. 寮のメンバーは互いに友情で結ばれている。 | 5-4-3-2-1 |
| 3. 同じ寮に住んでいるので、寮のメンバーは似たような好み・興味関心になってくる。 | 5-4-3-2-1 |
| 4. 寮では、あることに対して討論する際、他のメンバーの意見を尊敬しながら順番に発言する。 | 5-4-3-2-1 |
| 5. 寮のメンバーのだれかが困っていると、みんなが助けてくる。 | 5-4-3-2-1 |
| 6. 寮のメンバー間で、考え方と考える内容は基本的に異なっている。 | 5-4-3-2-1 |
| 7. 他の寮と比べて、われわれの寮のメンバー間には交流が少ないと感じる。 | 5-4-3-2-1 |
| 8. 友愛・協力は、寮の生活雰囲気の特徴である。 | 5-4-3-2-1 |
| 9. 寮では自分と他のメンバーとの考え方は一致しており、大きな違いはないと思う。 | 5-4-3-2-1 |
| 10. 寮のメンバーたちと話したいとは思わない。 | 5-4-3-2-1 |
| 11. 掃除のような共同活動をする際、寮のメンバーはよく協働している。 | 5-4-3-2-1 |
| 12. 寮の雰囲気のおかげで、寮のメンバーはみな進歩した。 | 5-4-3-2-1 |
| 13. 寮では、他のメンバーの考え方を認めて互いに理解しようとする。 | 5-4-3-2-1 |
| 14. 寮では何かトラブルがあった際、双方で自分の誤りを認め、積極的に問題を解決する。 | 5-4-3-2-1 |
| 15. 寮内に問題があった時、みな積極的に解決の方法を探す。 | 5-4-3-2-1 |
| 16. 寮のメンバーは、日頃から互いに励んでいる。 | 5-4-3-2-1 |
| 17. 寮のメンバー間に問題が起こった時、ほとんどの場合、解決されずに終わる。 | 5-4-3-2-1 |
| 18. 寮のメンバーは、自分の事だけに関心を持つ。 | 5-4-3-2-1 |
| 19. 寮のメンバーは、日頃からおしゃべりを楽しんでいる。 | 5-4-3-2-1 |
| 20. 寮のメンバーの考えることを理解できないと感じている。 | 5-4-3-2-1 |

3. ECR-R (Revised Experiences in Close Relationships) 尺度日本語版

現在の関係についての感情とは限らず、過去のことについてもかまいません。項目をよく読み、以下の7つの選択肢の中から最も自分によく当てはまると思うものを一つ選び、その番号に○印をつけてください。

	非 常 に 当 て は ま る	ど ち ら で も な い	非 常 に 当 て は ま ら ない
私は彼／彼女が私といっしょに居（い）たくないのではないかとよく心配になる。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女に自分の愛情を表しても、相手が同じように私を好きと思ってはくれないかもしれないと思う。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は、彼／彼女が私のことを実際には愛していないのではないかとよく心配する。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女に愛されなくなってしまうのではないかと心配になる。	7	-6	-5-4-3-2-1
私が彼／彼女のことを考えているほど、彼／彼女が私のことを考えていないような気がする。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女と離れていると、私は彼／彼女が誰か他の人に関心をもつようになるかもしれないと心配する。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女が原因で私は疑い深くなってしまふ。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は彼／彼女に捨てられることをほとんど心配しない。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は自分が他人にかなわないのではないかと心配する。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女は私が望むほどは親密になりたくないようだ。	7	-6	-5-4-3-2-1
しばしば、私が想っている程強く、彼／彼女が私のことを好きでいて欲しいと思う。	7	-6	-5-4-3-2-1
一旦彼／彼女が私の本当のことを分かると、私のことを好きではなくなるのではないかと思う。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は彼／彼女と別れることをめったに心配しない。	7	-6	-5-4-3-2-1
私が必要とする愛情と支え（サポート）を彼／彼女から得られないことは私を苛立たせる	7	-6	-5-4-3-2-1
私は自分の人間関係でとても悩んでいる。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女は私が怒っているときにだけ、私に関心を向けるようにみえる。	7	-6	-5-4-3-2-1
とても困っている時彼／彼女に頼ることは私にとって助けになる。	7	-6	-5-4-3-2-1
彼／彼女に頼ることは心地よい。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は彼／彼女に対して心を開くことを心地よく思わない。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は彼／彼女と色々な話を話し合う。	7	-6	-5-4-3-2-1
私はどんな事でも彼／彼女に話す。	7	-6	-5-4-3-2-1
私は彼／彼女に頼ることができない。	7	-6	-5-4-3-2-1
私にとって彼／彼女に頼ることは気安いことだと思う。	7	-6	-5-4-3-2-1

私は、普段から彼／彼女と私の悩み事と関心事についてよく話し合う。	7-6-5-4-3-2-1
彼／彼女と親密になることは私にとってとても心地よい。	7-6-5-4-3-2-1
私は彼／彼女とあまりにも親密になりたくない。	7-6-5-4-3-2-1
彼／彼女は、私のことや私の必要としていることを本当に理解している。	7-6-5-4-3-2-1
彼／彼女がすごく近づこうとすると気詰まりになる。	7-6-5-4-3-2-1
自分のプライベートな考えや感情を彼／彼女と共有できると安心だ。	7-6-5-4-3-2-1
彼／彼女に近づくことは、私にとって割と気安いことだ。	7-6-5-4-3-2-1
彼／彼女と親密になることは私にとって難しいことではない。	7-6-5-4-3-2-1
私は自分が心の底でどのように感じているかを彼氏／彼女に見せたくない。	7-6-5-4-3-2-1

4. アイデンティティ達成・親密性尺度

以下の項目には、4=「非常にあてはまる」、3=「ややあてはまる」、2=「あまりあてはまらない」、1=「まったくあてはまらない」の四つの選択肢の中から、最も自分によく当てはまると思うものを一つ選び、その番号に○印をつけてください。

1. 私は、のけ者にされているように感じる。	4-3-2-1
2. 私は、私であることに誇りを感じている。	4-3-2-1
3. 人生に望むものが定まらない。	4-3-2-1
4. 私のことを人がどう思っているか、よくわからない。	4-3-2-1
5. 私って本当はどんな人間なのかわからない。	4-3-2-1
6. 私は、自分に合った生き方をしていると思う。	4-3-2-1
7. 私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。	4-3-2-1
8. 私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。	4-3-2-1
9. 誰も私のことなど本当には気遣ってくれないと思う。	4-3-2-1
10. 本当の私のことを理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。	4-3-2-1
11. 素で（飾らないで）付き合える相手がいる。	4-3-2-1
12. 私はこの世の中で、ひとりぼっちのように感じる。	4-3-2-1
13. 私は人とプライベートなことを話すことがある。	4-3-2-1
14. 人に自分のことをさらけ出すと、「不安」になることがある。	4-3-2-1

4. 青年期における基本的信頼感・自律性尺度

以下の項目には、4=「非常にあてはまる」、3=「ややあてはまる」、2=「あまりあてはまらない」、1=「まったくあてはまらない」の四つの選択肢の中から、最も自分によく当てはまると思うものを一つ選び、その番号に○印をつけてください。

- | | | |
|-----|-------------------------------------|---------|
| 1. | 私は生きている間には、自分がしたいことを成し遂げられると思う。 | 4-3-2-1 |
| 2. | 私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする。 | 4-3-2-1 |
| 3. | 私は人から信用されていないように思う。 | 4-3-2-1 |
| 4. | 自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする。 | 4-3-2-1 |
| 5. | 私は、元気がないと思う。 | 4-3-2-1 |
| 6. | 友だちから非難されるのではないかと心配になる。 | 4-3-2-1 |
| 7. | 人類って素晴らしいと思う。 | 4-3-2-1 |
| 8. | 穴があったら入りたいとか、人前から消えてなくなりたいと思うことがある。 | 4-3-2-1 |
| 9. | 私の人生には何かが足りないと思う。 | 4-3-2-1 |
| 10. | 誰かが、私の欠点に気づいてしまうような気がする。 | 4-3-2-1 |
| 11. | 人は信用できるものだ。 | 4-3-2-1 |
| 12. | 私は意志が強い。 | 4-3-2-1 |
| 13. | 私の未来は明るいと思う。 | 4-3-2-1 |
| 14. | 人の意見に賛成できないとき、それを相手に伝える。 | 4-3-2-1 |

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ひとからならぬご指導を賜りました立教大学の大野久教授、貴重なご意見とコメントを下さいました立教大学の都筑誉史先生と筑波大学の佐藤有耕先生に深く感謝致します。

また、西平直喜先生、帝京大学短大の三好昭子先生、立教大学兼任講師茂垣まどか先生及び大野ゼミの皆様には、本当に多くの助言と激励をいただきました。記して感謝の意を表します。

さらに、本論文における調査にご協力下さった皆様に厚くお礼申し上げます。